
魔法少女リリカルなのはA ' s ～全てを変えることが出来るなら～

IKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA's（全てを変えることが出来るなら）

【Nコード】

N9760X

【作者名】

IK A

【あらすじ】

機動六課は『JS事件』によって、大切な仲間を失う。その中で生き残った独りの少年『朝我 零』。彼は事件解決後、全てを否定した――そして彼は過去へ飛び、全てを変える。

変えてはいけない過去を変える独りの少年が会う、今まで知らなかった過去と出会う新たな仲間。その出会いを経て変化していく、彼の想いとは……。今――変えてはいけない過去を変える、少年の戦いが始まる。少年は変えられるだろうか？彼女達の――

—その運命を—

全否定が始めるプロローグ

新暦0075年

『古代遺物管理部 機動六課』は次元犯罪者『ジェイル・スカリエッティ』の手によって消滅の危機に瀕した。

俺、『朝我^{ともが} 零^{れい}』はスターズ隊長『高町なのは』と副隊長『ヴィータ』の二人と共に『聖王のゆりかご』と呼ばれる巨大飛行戦艦の内部に潜入。

内部に発見された『聖王』の正体はとある事件で見つけた少女『ヴィヴィオ』だった。

高町なのははヴィヴィオと戦闘を行うが、今まで共に過ごしてきたヴィヴィオに本気で戦えず、撃墜される。

ヴィータはゆりかご内部にある核の破壊に向かい、核の破壊に成功。

だがヴィータはガジェット・ドローンによって撃墜される。

そこに救助に『八神はやて』が訪れるが、突如活動停止したゆりかごでの脱出に失敗して死亡した。

一方でライトニング部隊隊長『フェイト・T・ハラOWN』は別の場所に潜伏していた『ジェイル・スカリエッティ』の逮捕の為に現場に向かっていた。

ジェイル・スカリエッティの発見し、倒したが、逮捕には至らず、戦死する。

そしてFW達は皆、戦闘には勝利するものの、部隊長達の死に絶望する。

そして俺は、聖王のゆりかごでヴィヴィオと決着をつける。

俺は見事勝利し、ゆりかご内部に潜伏するナンバーズのクアットロと言う女性の撃墜に成功した。

そしてヴィヴィオの救出も成功し、事件は集結を迎えた。

それから一ヶ月が過ぎる。

朝我「なのは・・・フェイト・・・ヴィータ・・・はやて・・・」

俺は独り、3人の墓に来ていた。

朝我「ごめん。俺は・・・最低だったな」

俺の頭の中に思い浮かべるは・・・4人と過ごした思い出。

だが・・・俺には後悔していることがあった。

朝我「もっと・・・4人の事・・・いや、皆の事を知っていれば良かった・・・」

俺は機動六課の中でも、孤立していたほうだった。

いや、俺から独りでいることを望んでいた・・・っていった方が正しい。

だがなのは達は俺に何度も声をかけてきた。

こんな・・・俺なんか・・・

朝我「もっと皆の事を知っていれば・・・現在は変わっていたのに・・・」

俺は、なのは達に悪い事をした。

生意気な事を言ってしまった。

悪口を言ってしまった。

全部・・・俺が悪いのに・・・

朝我「本当は・・・俺が死ぬべきだったんだ――！」

だから――俺は使う。

朝我「俺は――――過去と現在を否定する！……！！！」

すべて

そう言って俺は全身に溢れる魔力を世界に……そしてこの世の全てに向けて放った。

朝我

『

『ダ・カーポ始まりの世界』

そう言って、俺は全ての始まりに飛んだ。

まずは独りで無くなる事（前書き）

過去改変を始める彼はまず飛んだ世界は始まりの世界。

高町なのはが魔法に出会った時間とその世界。

その世界から変えることで――――未来を変えられると信じて――――。

魔法少女リリカルなのは　　＼全てを変える事が出来るなら＼　　始まります。

まずは独りで無くなる事

朝我 Side

朝我「・・・ここは・・・海鳴市」

俺は光から解放されると、懐かしい場所へ辿り着く。

場所は地球にある海鳴市の海鳴公園。

朝我「どこまでの時間に飛んだか忘れたな・・・多分、少し飛びすぎた可能性があるな・・・」

そう考えた俺は現在の時間を調べる為に公園を歩き出す。

朝我「変わらないな・・・海鳴公園」

俺はなのと同じように地球出身だった。

だがなのはたちとは長くいたわけではない。

俺はいつも独りでいることを望んで・・・いつも屋上で寝ていたからな・・・

海鳴公園は俺が独りで寝るには丁度いい場所だった。

だから・・・馴染み深い場所で、少し安心した。

朝我「・・・あれ・・・」

公園の隅っこにある木の椅子に座る、独りの少女がいた。

栗色の髪・・・左手で飲み物を持つ姿・・・左利き・・・

朝我「なの・・・は」

彼女はまさしく、高町なのはだった。

だが、小学3年生、つまり魔法に出会った頃の容姿にしては少々幼い。

きっと小学2年生だろう。

公園に桜が咲いている所を見ると、季節は春。

そして俺は巻き戻った時間は・・・『11年前』

つまり俺は、この11年と言う過去を改変して・・・新しい未来を作り出すんだ。

．．．でも、何でなのは独りなんだ？

アリサや．．．すずかがいたはずだが？

なんで．．．

朝我「ねえ、その君」

なのは「え．．．」

俺は勇気を振り絞って、彼女に声をかけた。

なのは「貴方は・・・誰？」

あ・・・っと、この世界じゃ俺の事知らないんだったな。

しかも俺の姿未だに19歳だし・・・

朝我「・・・君の事を、よく知っている人・・・かな？」

なのは「すところか？」

朝我「違う。つか、ストーカーな。平仮名じゃない」

いきなりストーカー扱いかよ・・・

なのは「それじゃ・・・誰？」

朝我「だから、君の事を・・・まあ少しだけ知ってる人」

なのは「やっぱりストーカーだよ」

朝我「違うから」

あれ？俺・・・小2の子供に弄られてる？

なのは「・・・なんでもいい」

朝我「え・・・・・・・・」

彼女が先に折れ、俺に意見を求める。

なのは「私・・・独りぼっちなのだ。貴方・・・友達になってくれる？」

独り・・・ぼっち！？

あの・・・高町なのはが！？

回想

これは、俺が機動六課で見ってきた高町なのはのまとめだ。

高町なのはは19歳でエース・オブ・エースと呼ばれる程名高い存在へと成長した。

その影には、度重なる苦難と困難の連続を乗り越えた事にある。

そしてあの時までのなのはは・・・その存在があるだけで、皆に希望を与えていた。

そう。周りから慕われ、決して独りぼっちなんかではない・・・そんな、皆の中心となる少女だった。

そして今、目の前にいる8歳のなのは。

彼女は自分の事を独りぼっち言った。

朝我「独り・・・ぼっち。実はな、俺も独りぼっちなんだ」

なのは「え・・・」

朝我「ちょっと前に仲間が4人・・・事件で死んだんだ。俺の・・・
唯一の仲間」

なのは「そう・・・だったんだ」

朝我「ああ。だから、君が俺に『友達になって欲しい』って言って
くれたの、凄く嬉しい」

そう言うと、彼女は笑顔で言う。

なのは「じゃ、友達になってくれるの!?!」

朝我「ああ。君の人生の一番最初の友達は――朝我零だ」

なのは「・・・うん!?!?!?!」

こうして俺はなのはと友人になる。

そして俺は夜、寝どころが無いので公園のベンチで寝る。

朝我「まさか・・・11年前のなのが・・・独りぼっちだったなんて・・・」

??? 「ビックリした？」

朝我「!？」

突如聞こえた女性の声に、俺は辺りを見回す。

だが、そこには誰もいない。

朝我「誰だ!？」

??? 「ええゝ!？」も、もう私の声忘れたの!？」

え・・・この声・・・あの懐かしい声・・・まさか!？」

朝我「なのは・・・なのか？」

なのは「ピンポーン！正解！」

そう言う俺の背後から透けた状態の19歳のなのはが現れた。

朝我「なのは・・・死んだはずじゃ！？」

なのは「うん。だから、朝ちゃんに魔力としているんだよ」

朝我「魔力・・・なるほど、死ぬ前に俺の体内に魔力を入れて、その魔力と俺の魔力を組み合わせてなのはは実体となって現れた・・・と言うわけか」

なのは「にやはは・・・頭良いね、正解」

嬉しくないっての・・・聞きたい事が、山ほどあるってのに・・・

なのは「朝ちゃんの気持ちは分かるよ。けれど、私がこの状態でいるのも限界があって・・・だから、言える事だけ話すね」

話すこと・・・か。

なのは「まず、私が独りでいる理由は簡単。私のお父さんが・・・事故で死んだの」

朝我「な——!?!」

なのはが・・・父さんを亡くしてる!?

そんなの・・・聞いたことがない・・・

なのは「それで、その時期から私のお店『翠屋』は忙しくなっちゃって・・・私を育ててくれる人、私の面倒を見てくれる人はいなかったの」

それって・・・完璧な孤独じゃないか!?

なのは「だけど・・・もう大丈夫みたいだね」

朝我「え・・・」

なのはは、安心したように言う。

なのは「あの頃の私には――朝ちゃんがいてくれる。だから、もう心配はいらないかなあ」

朝我「・・・俺に、なのはを救えるか？」

なのは「ううん。救う必要は無いよ」

朝我「え・・・」

そしてなのは俺の胸に顔を埋めるように抱きついて言った。

なのは「ただ――傍にいてくれれば、それで良いの」

朝我「なのは・・・!？」

するとなのはは徐々にその姿を消えていく。

なのは「にゃはは・・・もう、朝ちゃんの魔力が限界みたい」

朝我「は!？」

いや、俺はまだ全然いけるぞ!？

なのは「私の魔力に合わせてくれる分の魔力が・・・もう無いの」

なるほど・・・全ての魔力がなのはの存在維持に使われる訳じゃないのか。

朝我「また・・・会えるよな？」

なのは「え？もしかしてさみしいの？」

にやにやした様子で聞いてくる。

朝我「・・・ああ。正直言って、凄く寂しい」

こんな気持ち・・・初めてだな。

朝我「なのはがいないと・・・寂しいよ」

なのは「・・・ごめんね・・・朝ちゃん」

そう言って、なのはは涙を流して姿を消した。

朝我「・・・でも、俺は負けない。救うんだ――全てを――」

そう覚悟を決め、俺は夜を過ごした。

なのは Side

なのは「・・・えへ・・・」

家に帰った私は、やっぱり独りでした。

でも、今日は不思議と・・・寂しい気持ちがしません。

お風呂に入っても、思い浮かべてしまうのは、公園で出会った人。

私の・・・初めての友達。

なのは「明日も・・・また会えるかな／／／／／／／／」

そう言って私は、明日が学校であることを忘れ、朝我さんの事ばかり考えて悶々として朝を迎えます。

まずは独りで無くなる事（後書き）

知った事は、彼女が独りぼっちだったこと。

それは、周りから信頼されて・・・俺も信頼していた彼女しか知らないからこそ知った・・・驚きの真実。

それを知った俺は、ただ近くにおいてあげようよ決意する。

本と一人の少女（前書き）

高町なのはと出会って二日経った。

その二日で、俺は色んな事実にした。

なのはが独りだったこと。

父を失っていた事。

だとしたら・・・きっと彼女も・・・

そう思った俺は、彼女を探す。

そして知る、新たな真実。

魔法少女リリカルなのは　　く全てを変えることが出来るならく　　始
まります。

本と一人の少女

朝我 Side

朝我「さて・・・次は・・・」

そう言って俺は考えながら街を歩く。

向かうのは図書館。

今から探すのは『八神はやて』

彼女は読書が趣味（決して官能と言う意味ではなく）だったので今から彼女を見つけ、どんな生活をしていたかを知ろうと思った。

というのも、なのはの人生が俺の予想を上回っていたから、もしかしたらはやても・・・と思ったからである。

だが俺は本をあまり読んだりしないので、はやてと話しが合うか物凄く不安だったりする。

朝我「元々勉強とか駄目だったからなあ・・・」

そう。俺は勉強に関しては本当にダメで、機動六課に来れたのはリンディ・ハラオウンさんの気遣いあってだった。

その為、俺は戦術を建てて戦うなどは苦手で、戦いながら先を読むことしかできなかった。

朝我「この時代に来んだから、少しは勉強しないとな」

そう言って俺は図書館にたどり着き、中に入った。

朝我「うゝん・・・っと・・・」

海鳴の図書館は結構本の量が多く、それだけにこの図書館は広い。

学校の図書館とは大違いだ。

さて、本を探さ・・・もとい、はやてを探さないと！

そう考えていると俺の後ろから声をかけてくる車椅子の少女が現れた。

???「あの、そこにある本、とって貰って良いですか？」

朝我「え?・・・ああ、これか」

そう言って俺は4段目に置いてあった本を取って彼女に渡した。

???「ありがとうなあ」

朝我「いや・・・って・・・!?!」

この喋りかた・・・髪色、声。

???「?」

朝我「あの・・・君は・・・」

???「え?」

朝我「君は――八神はやて・・・なのか?」

はやて「え・・・どうして・・・」

これが、俺が知らない・・・八神はやてとの出会いだった。

はやて「ふえ！？そ、そうなん？」

朝我「ああ」

俺ははやての両親と知り合いと言う嘘についてははやての親戚だと言った。

まあ全て嘘だが、はやての両親は既にこの歳で亡くなっている。

だから失礼ながら、はやての両親を利用させてもらった。

朝我「今日俺がここにきたのは、まあ今のはやての様子を見に来た
ってとこだ」

はやて「そ、そんな・・・心配なんていらへんよ？」

朝我「そうか・・・まあ車椅子で生活してるってだけあって今の状
況を知りたいから、今日は一緒にいていいか？」

はやて「それはかまへんけど・・・朝我さんは大丈夫なん？」

朝我「ああ。問題はない」

はやて「うん。それは、今日はよろしくお願いしますう」

なんか・・・はやてからそんなことを言われるのは初めてだな。

機動六課にいたときは命令されてただけだったからな。

そして俺は車椅子を押してあげてはやての家に向かった。

家に着くと俺は、いきなり衝撃を受けた。

朝我「・・・・」

そこは、外出していたからと言うのもあるが、真っ暗だった。

はやて「ちょっと待っててなあ、今電気つけるからあ」

そう言って部屋の電気をつける。

だけど・・・まだ暗い。

なんだろう・・・なぜか、暗い部屋だと感じる・・・

部屋の電気が暗い？

・・・違う。

窓から日差しが入ってるのに、それでもまだ・・・この家は暗すぎる。

何故だ・・・なぜなんだ・・・

何故・・・なんて寂しい場所なんだ。

はやて「？どないしたん？」

朝我「あ・・・いや、何でもない。悪いな、お邪魔して」

はやて「ええよ。私は一人暮らしやし、家族は多い方がええからな」

多い方って・・・お前、独りじゃねえかよ。

俺や・・・なのはみてえに・・・

なんで・・・なんで笑顔でいられるんだよ・・・

・ ・ ・ ・ ・ あ、そうか。

分かった気がする。

なんで ・ ・ ・ こんなにこの家が暗いのか。

暗いのは ・ ・ ・ この家自体じゃないんだ。

はやて「はい。これ、お茶や」

朝我「ああ、ありがとう」

本当に暗いのは
――
君の、はやてその笑顔なんだな。

朝我「・・・馬鹿やろう」

ほんと・・・馬鹿だな。

はやて「え・・・あ／／／／／／／／／／」

俺は車椅子に座ったままのはやてを、そっと抱きしめた。

はやての顔を、俺の胸に埋めるように・・・

朝我「お前・・・どうして隠すんだよ。話してくれよ。甘えてくれよ。泣いてくれよ。怒ってくれよ。そして――笑ってくれよ」

俺は見たい、はやての本当の笑顔を。

こんな偽物の笑顔で、この世界が明るいとは思わない。

この・・・はやての生きる世界が明るいなんて・・・俺は、思わない。

はやて「・・・ごめん。ちょっと・・・うるさくなるかもしれへん」

朝我「構わない。今は、俺しかないからな」

はやて「・・・うん」

そう言って、はやては吐き出すように泣き出した。

全ての悲しみを吐き出すように・・・

全ての理不尽を恨むように・・・

全部・・・夢である事を祈るように・・・

そして全てを吐き出し終わると、彼女は疲れはてて眠りにつく。

はやて「すう．．すう．．すう．．」

朝我「ったく．．．この性格は、生まれつきか」

いつも、自分の中にある感情を外に出さなくて、いざ出すと大きくて．．．

一度泣くといつも大泣きで、笑うと大笑いで、怒るとマジギレで．．

不器用だから、慣れないから．．．だから大きく感情が出てしまう。

今のうちからこういうことに慣れないから．．．皆から心配されるんだよ。

朝我「良かった。俺がいなかったら．．．このままだったかもしれないなかったんだから．．．」

そう言って布団の上にはやてを仰向けで寝かせ、毛布を肩までかけて俺は部屋を出ていった。

はやて「むにゃ・・・ふみゅう・・・」

朝我「またな、はやて。もうお前は――独りじゃないからな」

そう言って、俺ははやての家を出ていった。

だがこの日の夜、八神はやては闇の書から現れる守護騎士達と出会うことになる。

その話は、また時期を改めて話すことになるだろう。

序章の始まり（前書き）

二人との出会いを終え、早くも時期は変わり、高町なのはは小学3年生となり、魔法とであう。

だが俺は未だ、何も出来ず、ただ二人いつもの場所で会って話しをするだけ。

そう・・・ただ、それだけしかできない。

俺は、何をしていいのか分からないんだ。

だが、そんな俺もとうとう、あの事件が始まる。

魔法少女リリカルなのは　　＼全てを変えることが出来るなら＼　　始
まります。

序章の始まり

季節は変わり、春になった。

春の桜はいつも綺麗で、いつも――全ての始まりと終わりを伝える。

そう、全てはこの春から始まるんだ。

朝我「早くも・・・1年か・・・」

俺はこの1年の間に、なのはの両親と話しをしてなのはの家族関係の修復をした。

そのかいあってか、なのはは今まで以上に元気になり、学校でも友達が出来たと言っていた。

はやてはその後、図書館で何度も会って恥ずかしながら勉強を教わった。

基礎中の基礎はあるのだが、応用問題などが俺はダメで、はやてに教わった。

・・・てかはやってって9歳くらいになるのに何で小6の勉強してる

んだ？

さてさて余談はここまでとして、いよいよ本題に入る。

もうそろそろ、物語が始まる。

彼女達の物語。^{かこ}

そこに、俺は参加する。

タイミングは最初からでも良いが、それは管理局と共に動くことに
||となる。

出来ればそれは避けたい。

管理局や地上本部は・・・闇がいくつもあつたからな。

朝我「・・・!？」

夜になり、俺は嫌な感覚を覚えた。

魔力反応や・・・何か強力な力を感じる。

朝我「これは・・・ロストログアなのか!？」

初めて感じた感覚に俺は驚きながらも、その場所へ向かう。

朝我「・・・な!？」

そこは、木々がうるさい程にざわめいている。

そして風が体に容赦なく打ち付け、感覚を狂わせる。

俺が見つけたのは、そんなおぞましい雰囲気魅せる一体の狼の様な化け物。

更には、全身ボロボロで体のいたる場所から血が流れる一人の金髪の少年。

彼は右手に紅き丸い宝石を持ち、目の前の化けものと戦う。

?? 「ぐあああああああ!!!!!!」

だが、彼の体力は限界で、狼に吹き飛ばされた。

朝我「! 危ない!!!!」

俺は両足に魔力を込め、それを爆発させて光の速度を手にする。

朝我

『

――

『瞬間魔力換装
プリューゲル・ブリッツ

――

』

俺は少年を抱きとめ、少年をゆっくりと横に倒す。

朝我「……殺るか」

俺は化け物を睨みつけ、瞳を閉じて――唱える。

朝我『かぎ牡籥とぎかけ闔す総光の門――』

俺の左掌から小さな魔法陣が現れる。

朝我『七惑七星が招きたる、由来^{ゆらいそつふう}艸阜の勢――』

そして刀の柄の部分が出てきた。

その形状から刀だと判明する。

何かを察した化け物は素早く走り出し、俺に牙を向ける。

朝我『廉貞れんじょう零零れいれい、急ぎて律令の如く成せ――』

次の瞬間、化け物は横にまっぷたつに切られ、更に炎に燃えて消滅した。

朝我『千歳の儔——火車切広光——』

三尺を越える大太刀、赤き焰を纏って、俺はそれを右手に持つ。

朝我「無益な殺生は好まない。けれど、“護るため”なら、無益でも何でも斬る」

そう言って俺は再び刀を左手に出した魔法陣の中に戻す。

そして切り裂かれた化け物の中からは蒼く輝く宝石が現れた。

朝我「これ・・・ジュエルシード!？」

俺はそれを、左手に再びだした魔法陣の中に納めた。

朝我「これが・・・ロストログア全てを繋ぐきっかけ――」

そして俺は倒れた少年の治療を始めた。

治療を終えると少年は何故かフェレットに成り代わり、俺は動物病院にあずけた。

序章の始まり（後書き）

この出会いは、全ての始まりの序章。

最初に見つけたジュエルシードは、その序章の幕開けを知らせる物。それを証明するかのように、俺はこの世界に来て初めて魔法を使った。

キャラ設定 朝我零編

朝我^{ともが} 零^{れい} 19歳 身長175cm

魔力ランクSー

魔力変換資質 非保有

魔力色 『銀・黄金』

デバイス 非保有

希少能力 『次元の家』
ホール・ハウス

説明

左掌に空間魔法陣を発生させ、そこから物を収納して自分専用の次元に送られる。

出したい時は左掌から魔方陣発生から、右手でそれを引き抜く。

両手で同時発生させた場合、巨大な魔法陣となり、人が入ることも可能になる。

これは量に限界が無いので、なんでも好きな量だけ入れられ、更に食べ物を入れてもその次元には時間軸が存在しないので腐ったりもせず、鮮度も入れた時から変化しない。

武器

『かしゃぎりひろみつ
火車切広光』

三尺を越える大太刀で、刀身は仄かに紅い。

魔力を込めると焰を出す、これは魔力変換資質とは関係ない。

武器はもつとあるのだが、まだ内容が進んでないので、進んでからまた発表する。

技

『ダ・カーポ
始まりの世界』

説明

『次元の家』の能力を極限まで使い、現在の時間を別次元に送ることで自らを過去の時間に飛ばす。

だがこの能力は戻る事以外は出来ず、一度戻れば二度進むことは出来ない。

容姿

- ・髪の毛は肩までと長め。
- ・髪色は若干白が混ざった黒。
- ・服装は茶色っぽい長袖のジャケットに青いジーンズ。※BJもこれに同じ。
- ・瞳は普段は黒っぽい青。

性格

- ・頭はあまりよくない。
- ・冷静に物事を考える為、物事に対して常に結果や理由を求める。
- ・謙虚なせいか、自分の事を低く評価しすぎる。
- ・怒った時は外道と呼ばれる程の恐ろしさをだす。

好き嫌い

好き

- ・人の笑顔。
- ・正直な想い。
- ・友人・親友・家族。
- ・甘えん坊。

嫌い

・好きな人の血。

・死。

・朝我零
じぶんじしん

・好きな人の涙。

・嘘。

・運命。

余談

朝我は過去、つまり11年前に飛ぶ前の時間で生きていた高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての3名に告白したが、3人ともふったらしい。

このことも後の内容で明らかになるので楽しみに。

キャラ設定 朝我零編（後書き）

変更が何度もあると思うので感想＋意見をお願いします。

始まり（前書き）

夜が明ける。

夜が明ければ、平穏な朝となり、平穏な日常が始まる。

だが、一人の少女は違った。

そしてこの日、少女は日常とはかけ離れた、非日常と出会う。

魔法少女リリカルなのは　　く全てを変えることが出来るならく　　始
まります。

始まり

なのは Side

なのは「行ってきます!!」

そう言うと、私の家族は皆、私に『行ってらっしゃい』と言ってくれる。

そして私は元気に外へ出て、学校へ向かう。

去年までは無かった、私の望んでいた日々。

それが叶った背景には、朝我さんの存在がありました。

回想

ある日、私の家族全員が家に集まった日、朝我さんは私の家に来て家族に言いました。

朝我「なのはを、これ以上独りにしないでくれ」

桃子「え・・・」

恭也「その前に、お前は誰だ？」

朝我「なのはの——最初の友達だ」

美由希「最初って・・・なのはは学校に友達がいるって・・・」

朝我「なのはが言ったのか？だとしたらそれは本心じゃない、なのはは独りだったんだ——お前らのせいだな！！！！！！」

桃子「!？」

その時の朝我さんは、私の前では一度も見せなかった——怒りの姿。

全身から怒りが溢れて、今にも爆発しそうでした。

朝我「事情は分かってる。だが、家族・・・それも娘一人を見捨てるなんて・・・あんたらどんな神経してんだ？ああ！？」

口調もどんどん悪くなって、不良みたいでした。

桃子「私だって辛かったわ。でも、これしか無かったの！今は、今だけは我慢して欲しかったの！時間が経てば、きっと解決するはずだから・・・」

朝我「今じゃないと——駄目なんだよ」

朝我さんは静かにそう言った。

そして再び口を開け始めた。

朝我「今じゃないと——なのはは変わってしまう。純粹な瞳と心を持つ少女が、変わってしまうんだ。俺は、そんな事を許さない」

なのは「朝我さん……」

そう言って朝我さんは、私の左手をギュッと握ってくれました。

なのは「あ……（温かいなあ……朝我さんの手）」

そう言って私が朝我さんの手を握り返すと、朝我さんの表情は落ちていて普段の朝我さんに戻ってくれました。

朝我「俺も、大切な人を……4人も失いました。だから、貴方がたの気持ちは痛いほど分かっているつもりです。でも……だからこそ、取り残されたなのはを一人にしないでください」

なのは「え……」

この時、私は初めて知りました。

朝我さんは、大切な人を4人も失ったって。

それなのに私は・・・朝我さんに色んな悩みをぶつけてしまった。

朝我さんの方が、もっと傷ついていた筈なのに・・・なのに・・・

桃子「ありがとう、朝我君。そして、ごめんなさい。なのは・・・独りにしてて、何も出来なかったのは、私の責任だから・・・」

朝我「いえ。“誰が悪いか”じゃないくて、“誰が悲しんでいるか”が大切なんです」

桃子「そうね、ありがとう」

回想終了。

それからお母さん達は私と接する時間を作ってくれて、今年は大分時間が出来て、家族の時間が増えました。

それもこれも、全部朝我さんのおかげです。

・・・そして、もう一つ。

アリサ「なのはあゝ！早くしなさい！！」

すずか「なのはちゃん！おはよう！」

なのは「二人ともおはよう!!」

私に二人の友達が増えました。

金髪のちょっと怒りっぽいのがアリサちゃん。

紫色の髪で優しそうな子がすずかちゃん。

二人ともお金持ちで、少し忙しいけど、私と仲良くやっています!

そう、私の世界は朝我さんとの出会いで大きく変わりました。

この手にしたかった日常が、この手に入って――一生手に入らないと思っていた日々が・・・今ここにある。

桜が舞うこの春は、そんな新しい年の始まりです。

すずか「そう言えば昨日の夜、公園で何か事故があったらしいよ」

なのは「へえ、そうなんだあ」

あれ・・・何か引っかかるような・・・

昨晚、私は夢の中で紅い宝石と、黒い狼を見ました。

そこでは大きな爆発があって・・・それで・・・

・・・あれ？そこから記憶がない・・・

アリサ「？どうしたの？」

なのは「ふえ？な、なんでも無いよ!？」

笑って誤魔化して、私達はバスに乗って学校に向かいました。

バスに乗っている中、私は窓の外を長めながら、思い出す。

なのは「（朝我さんに出会って、もう1年かぁ・・・もう1年にもなるのに私、朝我さんの事・・・何も知らない。出来ることなら・・・

色々知りたいなあ」

そう思いながら、また日常に戻る。

朝我 Side

朝我「・・・」

昨晚の突然の事件から数時間が経過し、翌日のお昼頃、俺は再びあの場所に向かっていた。

そこは既に警察などが入っていて、俺達が立ち入る事はできなくなっていた。

まあ俺は隠れながら移動するのは慣れてるから別に問題はないのだが・・・

そして俺は隠れながら移動して、戦った場所に向かった。

朝我「・・・」

俺は、この世界の運命を変えた。

それは、俺が魔法を使って戦いをした時点で変わったのだ。

そもそも俺が魔法を手にしたのは元々あったリンカーコアが次元漂

流によって目覚めて能力を手に入れたからだ。

そう。俺は次元漂流を経験したことがある。

死を感じた瞬間、俺は本能的に覚醒した。

俺はただ『生きたい』と強く願った結果として、力を得る事ができたんだ。

だが、力を手にしても俺は——誰も救えなかった。

なのはやヴィータ、はやてもフェイトも救えなかった。

ハッピーエンドなんて存在しないなんて認めない。

俺は、強引でも手に入れると決めた。

ハッピーエンドを——。

なのは「え・・・朝我、さん」

朝我「な——！！」

だが、突然俺の背後から現れたのは、高町なのはだった。

なのは「な・・・何で・・・」

朝我「それは、俺の台詞だ。なんで・・・なのはが」

アリサ「なのは！」

すずか「なのはちゃん！」

朝我「アリサ・・・すずか・・・」

なのは「え・・・なんで・・・知ってるの・・・」

やばいな・・・何かややこしくなってきたそう・・・

アリサ「あんた・・・誰よ？」

すずか「私・・・知らないよ？」

そりゃそうだ。

俺が二人と知り合うのは六課に入隊して地球に任務で向かったあの時が初めてだからな。

さてさて余談は1行ほどで良いだろう。

なのは「朝我さん、何があったんですか？」

朝我「・・・」

ここで俺は迷う。

嘘を付くべきなのか？

真実を教えるべきなのか？

もし真実を言えば、きっとなのは魔法の世界に入って・・・

だったら、嘘をつけばいいのか？

嘘について、なのはを平凡な人生を送らせるべきか・・・

朝我「・・・ごめん。話す事はできない」

なのは「!・・・どうして・・・どうして!?!」

朝我「!?!」

なのはは悲しそうな表情でそう言った。

アリサとすずかは察したのか、黙ってなのはと俺の会話を聞いていた。

なのは「私、朝我さんに助けられてばかりで・・・朝我さんを助けることが出来てない!! 私には朝我さんの力になりたいの!!」

朝我「なのは・・・」

その表情、その眼差し。

それは、ヴィヴィオを救出する時に見た・・・なのは表情にそっくりだった。

ああ・・・そうか。

意地っ張りな性格、自分の想いを通したい頑固さはこの時から既にあったわけか。

・・・でも

朝我「ごめん。俺は・・・力になって欲しいなんて思っていないし、力を求めている」

なのは「・・・」

そう言うとなのはは無言で俯き、そして我慢できなかったのか、俺やアリサ達を無視して走り去っていった。

すずか「なのはちゃん!!!!!!」

すずかは走ってなのは追いかける。

アリサ「あんた・・・最低」

冷たい声でそう言うと、アリサも二人を追いかけていった。

朝我「・・・はあ、流石アリサ・・・グサツとくる言葉をくれるな」

でも、実際にアリサの言うことは正しい。

朝我「でもな・・・俺は、なのはに何度も助けられてるんだ」

そう。10年後のなのはは、いつも自分よりも周り中心で、俺の事もいつも護ってくれた。

こんな・・・すぐに死んでもいい俺の事を、護ってくれた。

そんななのはをこの世界で救う事が出来たのは、俺からの恩返しって事にしてた。

だから・・・これ以上、なのはに助けて貰いたくない。

もう、なのはは十分に護ってくれたのだから。

??? 「朝ちゃん、我俣だね」

朝我「!？」

すると俺の背後から現れたのは10年後のなのはだった。

なのは「お久あゝ!」

何とも軽い挨拶だった。

朝我「なのはってこの頃から真っ直ぐだったんだな」

なのは「にやはは・・・変わらない、私の短所みたいなものだよ」

自虐的な笑でそう答える。

なのは「でも、朝ちゃんは何であんなに強く拒んだの？」

朝我「俺は、なのはに助けられまくりだったからな。なのに・・・これ以上助けられたら・・・」

なのは「迷惑？」

朝我「違う・・・けど・・・俺が、情けなくてな」

いつまで・・・護られていれば強くなれるんだ？

俺は・・・強くなって護りたいのに・・・情けなさすぎるだろ・・・

なのは「・・・情けなくても、私は良いと思うよ」

朝我「え・・・」

いつもと変わらない笑顔でそう言った。

なのは「私は好きで護りたいの。独りぼっちだった私の傍にいてくれた皆を・失いたくは無かったから・・だから、私の手の届く範囲だけでも、護ってあげたかったの」

朝我「なの・・は」

全てを護る訳じゃなくて・・か。

なのは「私は、朝ちゃんの事を護りたかった。ただ・・それだけなの」

朝我「・・うん。ありがとう」

なのは「にやはは・・改めて言われると、ちょっと恥ずかしいかな」

頬をポリポリかいてそう言った。

するとまたなのはは消えかかった。

なのは「それじゃ私は消えるね」

朝我「ああ。ありがとう」

なのは「うん。またね、朝ちゃん」

朝我「またな、なのは」

そう言うとなのは消える。

朝我「・・・いいのか・・・なのはを、巻き込んで・・・」

俺は再び――迷う事になる。

そして、その日の夜。

なのは Side

なのは「・・・」

私は一人、夜の外を散歩してました。

今日、朝我さんと衝突しちゃって・・・だから気晴らしに歩いて紛らわそうとしてる。

なのは「嫌われちゃったかな・・・」

しょうがないよね。私は、生意気言っちゃったんだから。

・・・私に力があつたら、朝我さんの力になれるのかな・・・

もし私が朝我さんを護れる力があつたら、朝我さんは私を認めてくれて・・・

なのは「あれ・・・どうして、こんなに朝我さんの事・・・考えてるんだろ・・・」

不意にそう思った。

理由が分からない。

何が原因で私は朝我さんの事を考えてるんだろう？

——初めての友達だから？

うーん・・・なんか惜しいような気が・・・

そして私は更に不意にこんな事を考えてしまった。

——もしかして朝我さんの事が好きだったりして？

なのは「はう／／／／／」

どうしてだろ・・・急に熱くなってきた。

好きって事がよく分からないけど、思ったら思ったらで何か詰まっていた物がとれた感覚があるよ。

なのは「好き・・・か・・・えへ／／／／」

分からないけど、嬉しいな。

こんな・・・幸せな気持ち。

朝我さんの事を考えると、心臓がドキドキして、呼吸が少し荒くなる。

苦しいけど・・・嫌いじゃない感覚。

なのは「でも・・・だとしたら、仲直りしないと・・・」

じゃないと、ずっと仲悪いままだから・・・

なのは「明日、ちゃんと謝ろ！」

そう決めた私は、家に帰ろうとした。

助けて・・・

なのは「ふえ？」

私は誰かの声が聞こえた気がしたので後ろを向いて確かめました。
でもそこには誰もいなくて、だから空耳だと思ったので再び家に向
かって・・・

誰か
……
助けて
……

なのは「!?!」

・・・違う。

空耳なんかじゃなくて・・・本当に助けてって・・・助けを求めている!

だったら・・・だったら!!!!!!

私は声の聞こえる方へ走っていききました。

何が出来るか分からない。

足で纏いになるかもしれない。

けれど、迷ってなんかいられない。

私には、選択の猶予は与えられていないのだから。

私は、“決断”しなければいけないのだから。

決断と、手にする光（前書き）

少女は走り出す。

夜の道を走る。

少年は走り出す。

夜の道を走り出す。

全ての始まりは、二人の一步から――

魔法少女リリカルなのは　く全てを變えることが出来るならく　始
まります。

決断と、手にする光

朝我 Side

朝我 「!?! ロストロギアの反応!?!」

気づいた俺は即座に走り出す。

朝我 『――――『ブリュッセル・ブリッツ瞬間魔力換装』――――』

速度は光を超えて、目指すべき場所へ向かう。

なんで・・・こんなに嫌な予感がするんだ？

この胸騒ぎは・・・一体何だ！？

朝我「とにかく・・・間にあってくれ！！！」

俺は光を超える速度で移動しながらそう思った。

なのは Side

なのは「これって・・・!」

そこは家が沢山ある場所でそこはまるで戦いでもあったかのように地面が抉れていたりしていました。

そしてそこには3つの顔を持つ黒い影と小さなフェレットがいました。

——『君は・・・』

なのは「え?」

私にかかる声。

その声の主は間違いなくあのフェレット。

でも・・・フェレットが喋るなんて・・・

・・・ううん。今は全てを否定している場合じゃない。

今は、この状況を打破しないといけない。

なのは「私は・・・何をすればいいの？」

そのフェレットを拾い上げて声をかける。

フェレット「君には素質がある。この“力”を使う・・・素質が」

そう言ってフェレットは私に紅く丸い宝石を渡した。

なのは「これは？」

フェレット「君に力をくれる物。君の力を貸して欲しい！手伝って欲しいんだ！！」

なのは「……」

私は見つめる、この宝石を。

今から私はきっと、日常を変化させる。

非日常へ踏み込む。

今なら、まだ引き返せる。

——違う。

逃げるのは、もう嫌だ！

もう——逃げたくない！！後ろを向きたくない！！！！

助けてと言われた。

私には出来ることがあると知った。

だったら、迷ってなんかいられない。

迷う必要なんかない。

そう、答えは——最初から決まっている。

なのは「私は、力が欲しい。私は、どうすればいいの？」

私は迷わず、力を欲した。

フェレット「僕の言う言葉が続けて唱えて」

なのは「うん！」

そう言って、私は復唱する。

『——我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を今ここに
解き放て——』

唱えると、不思議と体が軽くなる。

まるで翼を手にした天使の様に。

体に『自由』が手に入った様に。

私は詠唱を続ける。

『風は空に
星は天に
そして』

そして、温かな桜色の光が私を包み込む。

なのは『不屈の心はこの胸に――!!』

そして私は白き魔女服に着替えると、杖となった紅い宝石を握む。

なのは「レイジングハート!!!!!!セツト・アップ!!!!!!」

そして私は光の中から現れる。

不屈の心を胸に――今。

なのは「行くよ！レイジングハート！！！」

もう、私の瞳と心に――迷いは無い。

だから私は、真っ直ぐ――行くんだ！！！！

朝我 Side

朝我「!？」

俺が着く頃には、もう遅かった。

なのは「行くよ！レイジングハート!!!!」

彼女は、光と翼を掴んでしまったのだ。

朝我「そんな・・・嘘だろ・・・」

間に合わなかった。

なのはは、運命に引き込まれる様に、魔法の力を手にした。

結局俺は、止められなかった。

なのはが魔法の力を手に入れるのを防ぐことができなかった。

非日常へ踏み出す一歩（前書き）

覚醒してしまったエース・オブ・エース。

その現実には後悔しても、後悔している時間は無かった。

今はただ、護ることだけを考えろ。

今はただ、目の前で怒っている事を受け入れ、対応するんだ！

そして俺は——護るんだ！

魔法少女リリカルなのは　　く全てを変えることが出来るならく　　始
まります。

非日常へ踏み出す一歩

朝我 Side

朝我「なのは・・・」

俺は拳を強く握り締め、後悔していた。

だが、後悔している時間も無かった。

なのは「きゃっ!!!!!!!!!!」

朝我「!?! まずい!!!!!!!!!!」

なのはは影との戦闘で吹き飛ばされた。

いきなり初めての実戦。

しかもなのはは空戦魔導士。

体が不安定な中で戦うなんて・・・無茶だ!!

だったら・・・だったら俺が何とかしないとダメだろ!!

朝我

『

プリューゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装』

『

!!!!!!
』

光を超える速度で、空を駆け抜ける。

なのは S i d e

なのは「え・・・」

私は戦いを始めると、すぐに影に吹き飛ばされた。

だけど私はある人に助けられた。

私の私を助けてくれたのは、私が護りたかった人。

朝我「大丈夫か？なのは」

そして――私が大好きな、一番最初の友達。

なのは「朝我・・・さん」

朝我「なのは・・・ケガは無いか？」

なのは「あ・・・は、はい」

そう言って朝我さんはゆっくりと地上に私を下ろして、電柱に背中をあずける形で座らせました。

朝我「なのははここにいろ。俺があいつを斬る！」

フェレット「君は・・・」

朝我「・・・お前は、昨日の・・・どうしてここに」

フェレット「それは・・・奴の中にあるロストログアが目的って言えば君は分かる？」

なのは「?????」

ふ、二人は何の話をしてるのおおお!!?!?!?!?

朝我「なのは、お前はかなり厄介な事に巻き込まれた・・・ってだけ、今は説明しとく」

なのは「朝我・・・さん・・・」

突然、朝我さんの声が重いものとなり、更に朝我さんの左手に小さな魔法陣が現れ、そこから刀の柄の部分が出てきました。

朝我さんは迫り来る影の方に体を向け、唱え始める。

朝我『牡籥^{かぎ}かけ闇^{とぎ}す総光の門――』

朝我『七惑七星が招きたる、
由来^{ゆらいそふう}艸阜の勢

朝我『廉貞れんじょう零零れいれい、急ぎて律令の如く成せ――』

そして影は朝我さんに襲いかかった。

・・・だが刹那、影はまっふたつに切られて更に燃え上がった。

朝我『千歳の儔——火車切広光——』

朝我さんの右手には紅い焰を纏った刀がありました。

なのは「凄い・・・」

フェレット「君は・・・一体・・・」

朝我さんは刀を左手の魔法陣の中に納めて、私達に話した。

朝我「誰も護れなかった、無力な男さ」

その後、レイジングハートの中に蒼い宝石を納めて私達は海鳴公園の芝生に座って話しを始めました。

朝我 Side

朝我「そんでフェレット。お前は誰だ？」

ユーノ「僕の名前は『ユーノ・スクライア』。僕はあのロストロギ

アの回収をするためにこの世界に来んだ」

朝我「さっきの・・・あの蒼い宝石か？」

そう言うところユーノは頷いて更に続ける。

ユーノ「僕の失敗で、この世界に別れてしまったんだ。だから僕は
この世界に来て、あのロストログアを・・・『ジュエルシード』の
回収をしているんだ」

なのは「ジュエル・・・シード・・・」

朝我「なのは、分かったか？」

なのは「うん・・・何となくは」

だったら・・・

朝我「だったら今すぐなのははこの事全てを忘れて、元の日常に戻
れ」

なのは「え・・・」

元々なのはは無関係者だ。

それをユーノが勝手に巻き込んだ様にしか俺は思えない。

朝我「この件に関しては俺が解決させる。だからなのは日常にもどる『嫌だ』・・・なのは」

だが・・・いや、やはりと言うべきか・・・なのは反抗した。

なのは「私は何か出来るんでしょ!? 私は・・・今はまだ足で纏いになるけど、もっともっと強くなるから!!」

朝我「そうじゃない・・・そうじゃないんだ!!」

なのは「!?!」

俺は頭に血がのぼったかのように怒ってしまった。

朝我「お前は平和に生きて良いんだよ!! こんな、いつ死ぬかも分からない世界に、その歳で入る必要なんて無いんだ!! だから・・・」

なのは「・・・」

なのは静かに、俺の両手を握った。

朝我「っ・・・なのは・・・」

なのは「私、朝我さんに日常を取り戻してもらえて、本当に嬉しかった。だって、私はいつ死んでも独りだって思っていたから・・・だから、だからそんな私を助けてくれた朝我さんの傍にいたいのに！」

朝我「・・・」

真っ直ぐな瞳。

まるで穢れを感じさせない、その純粋な瞳と想い。

いつだって、この瞳と心は変わらない。

俺が大好きな・・・彼女の心。

そう。俺はいつだって・・・彼女の瞳と心に憧れていた。

朝我「・・・良い、のか？」

なのは「私はもう・・・決めたんだ。逃げないって。強くなるって！」

真っ直ぐな瞳で言われた俺は、何も否定できず・・・なのはの言葉を受け入れることしかできなかった。

朝我「・・・分かった。だけど、一つだけ条件がある」

なのは「？」

俺はなのはを抱きしめて言った。

なのは「ふえ！?!?!?!?!」

朝我「絶対に、俺の傍から離れるなよ。魔法は、俺の傍だけで使ってくれ」

もし、最悪な運命がなのはを待つのなら、俺がその運命を変える。

だとするなら、俺もなのは自身も、離れ離れになってはいけない。

それをよく知ってるから・・・だから、俺は彼女を護る！

なのは「・・・キュウウウウウ」

朝我「!?!? な、なのは!?!? しっかりしろ!! おい!?!?」

ユーノ「ああ・・・なのはに同感するよ・・・」

何故か頭から湯気を出して目をクルクルさせて気絶するのはだつたとき。

雷の魔導士（前書き）

まるで運命に導かれるように魔法の力を手にしたなのは。

その手にした力と、解決させないといけない事件が、俺達の始まり。

そして遂に彼女が動き出す。

それは、背負いし過去と、取り戻したい過去にちじょうを持つ少女。

彼女との出会いは、俺の中で様々な想いを創り出す。

魔法少女リリカルなのは　く全てを変えることが出来るなら　く　始
まります。

雷の魔導士

朝我 Side

朝我「・・・（ド）ハア…」

今日の俺は溜息続き。それもそのはず。

今の俺の現在地が高町なのは家の空き部屋だからだ。

理由はまあ俺が普段野宿していると説明したらここに連れられ、ご両親に説明したらOKだったと言うことでこんな感じです。

・・・うん、優しすぎる。

衣食住に困らない点ではなんていい場所なのだろうと思う。

さてさてそんな日々が始まって早二日。

なのはは学校に出かけている。

ユーノが護衛（役に立つか不明）につけてるので俺は高町家でのん

びりと・・・はしてない。

朝我「いらっしやいませ、翠屋へようこそ」

俺は翠屋のお手伝いをしていた。

流石に無銭飲食は心苦しいので、せめて何かできないかと考えた結果としてこれだ。

こう言うウェイターなど、客を扱う仕事は初なので少し戸惑うが、まあ何とか慣れた。

朝我「ありがとうございました！」

客が帰ればそう言う。

そんなことの繰り返し。

今日は何事も無ければと、忙しい中祈る。

朝我「!？」

だが、やはりと言うかなんというか、現実はそうはいかないらしい。

ジュエルシードの反応だ。

朝我「桃子さん、俺、なのはの迎え行ってきます」

桃子「ええ。店は大分客が減ってきたから構わないわよ。なのはの事、よろしくね（ニヤリ）」

朝我「はい」

そう言って俺は走って店を後にした。

・ ・ ・ ・ ・ てか、さっき桃子さんが何か企んでいるような表情をしたような ・ ・ ・ まあいいや。

なのは Side

なのは「え ・ ・ ・ ええええ！？！？！？！？！？！？」

ユーノ「うわぁ・・・」

私達はジュエルシードの反応した場所に向かいました。

するとそこには巨大な猫さんが一匹・・・しかも巨大。（大事な事なので2回言いました）

なのは「ね・・・ねえユーノ君？あれって・・・何でああなるの？」

ユーノ「え・・・えっと、ジュエルシードは想いを叶える力があるんだけど、多分あの猫は『大きくなりたいな』って思った所にジュエルシードがあって・・・」

叶っちゃったと・・・ジュエルシードも夢の叶え方が豪快すぎるよぉ・・・

ユーノ「僕は補助をするからなのはは戦って！」

なのは「分かった！」

猫さんにはかわいそうだけど、仕方ないよね！」

私は桜色の弾丸を5つ展開させる。

そして杖を振って放つ。

なのは「デイベインシューター・・・シュート!!」

放たれた弾丸は猫さんに当たりましたが全然効いてないようです（

—|—;）

だけど・・・

???? 「バルディッシュ——フォトンランサー」

なのは「え……」

突如放たれた雷の槍が、猫さんに直撃しました。

私は放たれた方向を向くと、空に金髪の髪をして黒いマントを羽織った女の子がいました。

???? 「バルディッシュと同型の……インテリジェントデバイス……」

なのは「え……!？」

私が疑問に思った瞬間、私に向けて雷の槍が放たれた。

なのは「ぐうううう!!!!」

私は何とかシールドを張って防ぐと、その隙に彼女は猫さんを雷の鎌で切り裂いた。

そして猫さんは徐々に小さくなってジュエルシールドだけが残った。

???? 「ジュエルシード・・・回収」

そう言って彼女はジュエルシードを雷の鎌に入れました。

そして去ろうとしていた。

なのは「!ま、待って!!!」

そして私が飛ぶと、眼前には刃を向けた彼女が・・・

なのは「!プロテクション!!!!!」

私は何とか防いで距離をとる。

なのは「い、いきなり攻撃なんて・・・理由くらい言ってくれても
!!!!!!!!!!」

????? 「言っても・・・多分、意味がない・・・」

彼女は静かに答える。

そして私に雷の槍を5発放つ。

なのは「!?!? きゃああああ!!!!!!」

私は防ぎきれず、撃墜されてしまいました。

「……ごめん」

そう言って彼女は止めと言わんばかりに一発の槍を放った。

「口で言わない時点で、意味なんて無いだろ……」

????? 「!?!」

なのは「え……………」

薄れゆく意識の中、私が見たのは――

朝我「ごめん。遅くなった」

なのは「朝我……………」

――私を助けてくれた、初めての友達の姿。

朝我 Side

朝我「ふう・・・間に合った」

遅くはなった。

けれど相手が“彼女”で助かった。

俺はなのはを木陰に仰向けで寝かせ、ユーノに任せると俺は彼女の
もとへ向かう。

朝我「待てよ!——フェイト!」

フェイト「っ!？」

俺が名前で言うのと彼女は驚いた様に俺を睨む。

フェイト「どうして・・・私の名前を・・・」

朝我「知ってるよ。俺は・・・君の事を、よく知ってる」

護れなかった人の一人だからな。

フェイト「私は・・・貴方を知らない」

朝我「そんじゃ、初めまして。朝我零だ。フェイトは名乗らなくても良い。知ってるから」

フェイト「・・・」

彼女は静かに俺に刃を向ける。

朝我「・・・なんの真似だ？」

フェイト「私の敵なら、斬る」

朝我「・・・今はもしかしたら――敵なのかな」

そう言って俺は左手に小さな魔法陣をだす。

フェイト「なら――倒す!!」

そう言って彼女は俺に真っ直ぐ切りかかる。

朝我『牡籥^{かぎ}かけ闔^{とぎ}す総光の門――』

朝我『七惑七星が招きたる、由来艸阜の勢——』

そしてフェイトの刃が俺に当たる瞬間、フェイトの以外の雷がフェイトの刃とぶつかり合う。

フェイト「!？」

朝我『文曲もんこく零零、急ぎて律令の如く成せ――』

そして俺の右手に現れるは、雷の刀。

朝我『千歳の儔——雷切——』

ここに、雷刃と雷切がぶつかり合う。

雷の魔導士（後書き）

ぶつかり合うのは二つの雷。

運命を背負う二人の刃のぶつかり合いは、二人の進むべき運命を変
えることとなるのか？

雷が背負う者（前書き）

二つの雷がぶつかり合う。

それは、お互いに叶えたい夢と想いがある二人が振るう刃。

二つの雷光がぶつかり合う時、運命に変化が訪れる。

二人が背負う、その想いとは――。

魔法少女リリカルなのは　　く全てを変えることが出来るならく
始　　ま　　り　　ま　　す　　。

雷が背負う者

朝我 Side

フェイト「はあああああああ！！！！」

朝我「はあっ！！！！！」

フェイトは勢いよく真正面から俺に切りかかってきた。

俺は刀を逆手に持って振るう。

フェイト「っ！？」

俺が刀を逆手持ちにしたことを恐れたフェイトは瞬時に下がって雷の槍を放った。

俺はそれを切り裂いて、再び刀を構える。

フェイト「(逆手持ちの刀・・・初めて見る。いきなり飛び込んだら危ない)」

朝我「(だま9歳なのに、あんなに思考しながら戦うなんて・・・流石フェイト)」

お互いにお互いを分析しながらの戦い。

だが俺は余裕そうな表情で戦っていた。

朝我「まだまだこんなものじゃないだろ？もっと本気で来い！」

フェイト「言われなくても・・・！！！」

そう言ってフェイトは5発の雷の槍を放つ。

朝我「よっと！」

俺はバック宙をして避ける。

フェイト「そこ！！！」

そう言って着地した瞬間の俺に切りかかった。

朝我「!？」

更に背後からは先ほど放った5発の槍が俺の方にターンして迫ってきた。

簡単に言えば挟み撃ちだ。

フェイト「これで・・・!!!!」

フェイトは勝利を確信した。

朝我『――瞬間魔^{ブリュッセル}力^{ブリッツ}換装』――

フェイト「な——!?!」

俺はフェイトの刃と雷の槍が当たる寸前で光を超える速度で移動して回避した。

フェイト「ぐうううう!?!」

そしてフェイトは自分自身の技で自爆した。

朝我「“いま現在”のフェイトじゃ俺は倒せない。まだ・・・まだな」

フェイト「くっ・・・」

爆風の中から悔しそうな声をだすフェイト。

って、BJボロボロじゃないか・・・

朝我「ジュエルシードを狙う理由は？」

フェイト「教える訳には・・・いかない！」

強い口調でそう言ったフェイト。

朝我「・・・」

そう言ってフェイトは再び立ち上がり、雷の槍を複数展開して放つと同時に切りかかった。

朝我

『

—

『瞬間魔力換装』
プリューゲル・ブリッツ

—
』

俺は光を超える速度で突っ込み、雷の槍をひらりひらりと避けながらフェイトに一閃を入れる。

「な!？」

朝我
『
千鳥一閃
ちどりいつせん
……! ! !
』

蒼き雷光の一閃がフェイトの腹部を切り裂く。

フェイト「があっ!!!」

フェイトは何とか耐えきり、腹部を左手で抑えながら俺を睨む。

フェイト「どう、して・・・峰打ちを・・・」

気づいたみたいだな。

俺は最初からフェイトと戦う時は峰で戦っていた。

それは、フェイトを殺さないため。

刀は振るえば人を殺す凶器となる。

だけど、殺さない様に使うことだってできる。

だから俺は、なのはを殺さなかった彼女を殺さない。

朝我「フェイトを殺す理由が俺にはない。だから、今日はこのへん

で終わりだ」

そう言って俺は雷切を左手の魔方陣に納める。

フェイト「・・・私に、何もしないの？」

朝我「何で？」

フェイト「だって・・・敵だって・・・」

朝我「フェイトには背負うものがあるんだろ？ だったら生きろ。フェイトには―――生きる権利があるんだから」

フェイト「・・・」

フェイトは無言で、飛び去って行った。

追いかけるはしない。

呼び止めはしない。

必要ないから。

だって、またすぐ会うのだから。

ジュエルシードがあるのなら、俺達は――また会う事になるだろう。

朝我「・・・フェイトの運命も、変えてやりたいのに・・・」

俺は、何もできずにいる。

現在も・・・未来も。

俺はJ・S事件の時、フェイトを救えなかった。

フェイトの背負っているものに、気づいてあげられなかった。

フェイトがプロジェクトFで生まれた現実を、10年以上経っても、
なのは達と恵まれても、背負ったまま・・・忘れられずにいた。

そんなことも知らなかった俺はフェイトに——告白をした。

結果は当然の如く振られた。

その理由はきっと、何も知らない俺が嫌だったのだろう。

そんな事も分からなかった俺は・・・結局フェイトを救えず、誰も救えず・・・失った。

朝我「俺は――また救えないのかな・・・」

???? 「ううん。朝我なら、救えるよ」

朝我「!？」

突如、俺の背後から聞こえた・・・懐かしい声。

後ろを向くと、ひらりと金髪の長い髪をなびかせる、大人っぽい女性がいた。

そう――俺が護れなかった人の一人。

朝我「フェイト・・・」

10年後のフェイトだった。

フェイト「うん。久しぶりだね、朝我」

朝我「お前・・・どうして・・・」

フェイト「なのはと同じ様に、朝我の魔力を借りてるの」

おい・・・皆勝手ですな。

朝我「全く、10年前のフェイトはあんなに頑固だったとは」

フェイト「うう・・・ごめんなさい」

俺がじと目で見るとフェイトはシュンとして謝った。

朝我「・・・なんか、こうやって会話できる日が来るなんてな」

フェイト「そうだね。ごめん、勝手に逝っちゃって」

朝我「全くだ。そのせいで俺がタイムスリップする羽目になったんだからな」

フェイト「うう・・・」

また凹むフェイト。

朝我「冗談だ。俺が勝手にとった行動だ」

そう言ってフェイトの頭を撫でる。

そうするとフェイトは頬をほんのり赤める。

フェイト「もう・・・本当に、優しいんだから」

懐かしむような声でそう言うフェイト。

フェイト「朝我。私を・・・救って」

朝我「フェイト・・・」

フェイトは真剣な表情で俺を見つめる。

フェイト「今の私は、本当の真実を知らずに生きてる。そしてこの先、後悔する結末が待ってる。だから・・・だから、運命を変えて、朝我！」

フェイトの強い想い。

それは、他人にいつも過保護なフェイトだからこそなのだろう。

フェイトだって、もし変えられる運命があるなら変えたいと願っている人の一人だ。

だけど、過去は変えられない。変えられる力が無いから。

だからフェイトはその度に後悔することだってあった。

執務官だったからこそ、運命を誰よりも恨んでいたはずだ。

そんなフェイトだからこそ、自分自身ですら過保護なんだ。

朝我「当然だ。俺は絶対に助けるし、運命を——変えてみせる」

そう。俺は、そのためにこの時代まで飛んだんだ。

そして、力がある。

だったら答えは決まっている。

助ければいいだけだ。

フェイト「うん。ありがとう、朝我」

朝我「ああ。だからフェイトは、のんびりと自分自身の運命の変化を見届けてくれ」

フェイト「うん。朝我、応援してるから。いつでも“力”になってあげる”からね」

朝我「・・・じゃな」

フェイト「うん。またね」

そう言うとフェイトは消えていった。

朝我「さて・・・そんなじゃ、家に帰るか」

そう言って俺はなののはののもとに行き、目をクルクルさせているなのはをおんぶして家に帰っていった。

雷が背負う者（後書き）

救えなかった運命の少女に頼まれたのは、過去の自分を救うこと。

過去を変える、それが彼の目的なら、答えは決まっている。

彼は、彼自身の持てる力全てで護る・・・救うと決めているのだから。

過去を変えられなくても（前書き）

高町なのはが魔法の力を手にしてしばらく。

その間のなのはの成長速度は、朝我とユーノの二人も驚くほどだった。

このままなら、どんどん強くなって・・・

だが、そんな今だからこそ・・・現実を知ることが必要となる。

魔法少女リリカルなのは　　く全てを変えることが出来るならく　　始
まります。

過去を変えられなくても

朝我 Side

朝我「!なのは、上行ったぞ!!!」

なのは「うん!!!」

暗闇の夜、俺となのはとユーノの3名でジュエルシードの回収に向かう。

最初の頃は飛ぶことすら不安定だったなのは、今は自由に飛び回り、そのまま攻撃ができるようになってきた。

なのは「ディバインシューター・・・シュート!!!!」

なのはは5発の魔力弾を放つと、それら全てが直撃して、敵は消滅。

そのままジュエルシードが現れ、なのははそれを回収する。

朝我「お疲れ」

なのは「うん!」

この頃なのはは調子が良いようで、俺と訓練をしても徐々に動きにキレが増したりしてきていた。

それだけあって成功の度に喜びは大きくなりつつあるようだ。

朝我「帰るぞ。夕飯までにな」

なのは「うん!!」

そう言ってなのはは俺の右手に掴まる。

ユ一ノは俺の左肩に乗っかる。

朝我

『

—

『瞬間魔力換装』
プリューゲル・ブリッツ

—

』

光を超える速度で俺達は家に帰り、一日を平和に終えるのであった。

なのは Side

なのは「はふう・・・生き返るう」

私は家に帰り、お風呂の中でのんびりしてます。

戦う事が何度もあって、こういうリフレッシュの時間は大切だと今一度学びました。

なのは「私・・・強くなってるよね・・・」

湯に浮かぶ自分の顔を見て、自問自答していました。

なのは「このまま強くなれば、私は朝我さんの様に・・・」

そう。私の目標は、朝我さん。

あの人のいる世界まで進んでみたい。

今のままなら、行ける気がする。

だって私・・・強くなってきてるから。

なのは「もっと・・・もっともっと、頑張らなきゃ！」

そう言って私は再び気合を入れ直すのであった。

・
・
・
翌日。

朝我 Side

朝我「むう・・・駄目だ。耐えられない」

俺は翠屋から離れて街中をのんびり歩いていた。

本日翠屋はとあるサッカーチームの勝利を祝う為貸切状態で恐ろしいこととなっている。

俺はかなり無関係者なため、その空気に耐えられずに逃げてきたわけだ。

朝我「ふう・・・ここは何も無ければ、本当に平和な世界だな」

魔法の世界に足を踏み込めば、こんな日常は少ない確率でしか無いからな。

さて・・・この後どこで時間を潰すか・・・ユーノ連れてくれば良かったな・・・

そんな後悔をしていると、俺は感じた。

朝我「!・・・ったく、平和ってのはこうも簡単になくなるのか・・・」

そう言って俺は走り出す。

朝我

『

—

『瞬間魔力換装』

—

』

朝我「な——!？」

俺がなのはのいるビルの屋上に辿り着く。

なのはも気付いたのだろう。

そこに辿り着いた時、俺は絶句した。

なのは「あ……ああ……」

なのはは絶望したように座り込み、眼前に広がる光景から目を逸らせずにいる。

今回のジュエルシードは、巨大な大樹だった。

街の中心部に生えたその根は、海鳴市を大きく覆っている。

朝我「流石ロストログア・・・ほんとに、叶えることが豪快なこと
で・・・」

ここに来る途中で反応が大きくなった時点で予想はしていたが。

多分、暴走したんだ。

これだけの大きさと言うことはおそらく、『人間』が発動させてしまったのだろう。

俺達とは違う一般人にとって、ジュエルシードは綺麗な石や宝石の
落し物程度にしか見えない筈だ。

だからこそ、それを拾ってしまうの当然のことだ。

朝我「さて・・・ジュエルシードはどこだ・・・なのは！」

俺はなのはに声をかける。

なのは「や・・・わ・・・私・・・私・・・」

だがなのはは全身を震わせ、顔は青ざめた様子でいた。

朝我「ユーノ。なのはに何があった？」

答えをユーノに聞いた。

ユーノ「多分、気づいていたんだ。ジュエルシードの反応に……
だけどなのは何も出来なかったんだ」

気づいていて……何も出来なかった……か。

なのは「気づいてたのに……分かったのに……私……」

まるで、あの時の俺みたいだな。

回想

これは俺が機動六課に入隊してホテル・アグスタと言う場所での護衛任務終了後の事。

この護衛任務の概要はまた未来になればわかるが、ティアナの行動が不自然と言うか・・・焦っているようだった。

もつと・・・早く強くなりたい。

誰でも思うことだ。

だがティアナの場合は、その思いがとても強かった。

その焦りが原因で護衛任務ではなのはとヴィータに叱られた。

その後、なのはは模擬戦を行うと宣言していた。

その宣言で既に俺は、嫌な予感がしていた。

結果は、予想通りティアナとスバルがなのはに本気で落とされる。

俺は・・・それを気づいていて、何も出来なかったんだ。

後悔した。

もしかしたら、俺はその運命を変えられたのではないか？

そう思うと、彼女達に謝罪の想いでいっぱいだった。

回想終了。

・・・確かその時・・・フェイトに慰められたんだっけ？

えっと・・・なんて言ってたっけな・・・

・・・ああ、そうそう。思い出した。

朝我「なのは」

なのは「え・・・」

——思い上がるな！……！！……！！……！！……！！

なのは「!?!」

俺は怒鳴るようにそう言ってなのはに詰め寄る。

そして俺はフェイトに言われたことを俺なりに言った。

朝我「お前は神様か!?! 違うだろ!?! 失敗はいくらだってある! この先、今よりもっと辛い失敗を何度も何度も繰り返す!?! でも、それから逃げちゃ駄目なんだ!?! 現実逃避するんじゃない! 変えられない過去があるなら、変えられる未来を変えるんだ!?!」

なのは「朝我……さん……」

そう。フェイトも言ってくれた。

朝我「なあなのは？なのは手には・・・力があるんだ。人を救える力、人を護れる力、人と向き合える力。そしてその手の魔法は、打ち抜く力だ。涙だって、痛みだってそして――運命だって」

なのは「運命・・・」

なのはの体の震えが無くなった。

そして瞳には力が徐々に戻ってきた。

朝我「さあ、過去の失敗を撃ち抜いて、成功する未来を掴むんだ！」

回想

俺がフェイトに、ティアナ達の件を話した時。

フェイト「朝我。朝我は・・・力があるんだよ。それでも、失敗はする。私だって・・・なのはだってはやってた。誰だって失敗するから、だからこそ、今ここで現実逃避しちゃいけない。過去は変えられないんだったら、未来を帰れば良い。今と同じ失敗を、もう二度としないように努力すればいい。そうじゃなきゃ・・・また、同じ失敗を繰り返すよ？」

回想終了。

朝我「これが魔法の世界だ。後は、なのは自身で決断するんだ」

そう言って俺はユーノを肩に乗せて空を飛ぶ。

朝我

『

—

『
瞬間魔力換装
』

—

』

なのは Side

なんだろ・・・私。

いつまで・・・ここに立ったままなんだろ・・・

朝我さんとユーノ君はとっくに戦ってる。

私は・・・戦わないの？

私・・・調子に乗ってたんだ。

力があるから、助けられると思って・・・まだまだ弱いのに・・・
魔法の力を過信しすぎてた。

私は弱い。だから失敗する。

だけど、だからこそ・・・それを乗り越えることができる。

私には、力があるんだから・・・

なのは「レイジングハート・・・私に、力を貸して!!!!」

そう言って私はビルの屋上から勢い良く飛び、レイジングハートを掲げる。

なのは「レイジングハート、セット・アップ!!!!!!」

そして桜色の光が私を包み、私は朝我さん達のもとへ向かう。

柔らかな桜光

朝我 Side

朝我『千歳の儔——火車切広光——』

俺はまあ相手が木なので炎の刀である火車切広光を右手に持ち、迫り来る枝を切り裂く。

サーチを初めて何とかジュエルシードの有りかを見つけた。

きつとそれを狙わないとどうにもならないであろう。

朝我「だが・・・俺一人じゃ・・・大技使わないと・・・」

そう言って俺は刀を両手で握る。

両手で握り、力を込める。

ユーノの支援にも限界がある。

俺一人でなんとかしないとイケない状況か・・・ったく、最近はそのと一緒に戦ってたせいか、本気をあまり出さなかったからな・

・

???
「朝我さん!!!!!!」

朝我「!？」

だが、俺は一人じゃなかった。

俺の後ろから近づく、桜色の閃光。

その柔らかな桜光はどんどん俺に近づいて……近づいて……近づいて……!?

なのは「朝我さぁん!!!!!!」

朝我「ゴフッ!？」

俺の腹部に桜光……もとい、なのはが速度を一切落とさずに抱きついた。

おかげさまで俺は腹部からエビの様に曲がってしまった。

朝我「な……なの……は……?」

なのは「ごめんなさい、さっきは混乱してて……」

いや、出来れば今の突進の事を謝って欲しいんだけど……

なのは「でももう大丈夫です!」

ダメだ……今のことに関しては反省してない……

朝我「まあいい。もう大丈夫なら、手伝ってくれ」

なのは「うん！」

そう言っただけなのは構える。

朝我「俺はジュエルシードへの道を作る。なのははその一本の道に
撃ち抜く力を叩き込め！」

なのは「うん!!!」

朝我「ユーノ。なのはの傍に・・・いてやってくれ」

ユーノ「・・・うん! 任せて!」

フレットに任せてって言われても・・・だが、信用できる。

朝我「頼む」

そう言っただけ俺は全速力で核であるジュエルシード目掛けて切りか
かった。

朝我

『

『瞬間魔力換装』
プリューゲル・ブリッツ

』

』

光を超える速度で向かうが、敵は無数の枝を俺に向けて鞭の様に放つ。

俺はそれを全て紙一重で避け続ける。

だが敵も対応が早く、枝を重ねて壁のようにする。

朝我『護身破敵とともに、禍災を除かむることを請う――』

だが俺は刃に焰を纏わせ、その壁目掛けて切りかかる。

朝我『神隠す十拳とつかの如く火産靈ほのむすび、
火車来々、焰羅に送られん!!』

全ては、後ろで桜光の魔力をチャージし、俺を信じてその場から動
かず、砲撃の準備をしてくれる彼女が安心出来るように。

そして俺は切り裂く。

朝我「壺の閃!!!!!!!!!!!!!!」

その一閃は枝で出来た壁は燃えるようにして切り裂かれたのだった。

だが壁は更に増え続ける。

俺は切り裂いた勢いを殺さず、そのまま全身を空中で回転させながら更にその壁に一閃を入れる。

朝我「式の閃!!!!!!」

その一閃は先ほどの一閃よりも火力が高く、一瞬にして壁が燃え尽きる。

だが敵も対応が早く、更にまた壁が出来、俺はそれを先程よりも威力を高めて切り裂く。

朝我「参の祓!!!!!!」

そしてその一閃でようやく核であるジュエルシードとそれに取り込まれたであろう二人の人がいた。

朝我「二人の願い・・・叶うことを祈ってる」

そう言って俺は全方向から迫る枝に対し、最大威力の焰の一閃を打

ち込む。

朝我『喰らえ』火天墜衝
!!!!!!!!!!!!

なのは Side

朝我さんが私を呼んでくれた。

なのは「朝我さん・・・凄い。私達も負けられないよ！レイジング
ハート！！！！！！」

その言葉に答えるように、レイジングハートは桜色の光の翼をだす。

なのは「行くよ!!! レイジングハート!!!!!!」

そして私は溜めた桜色の魔力を遠くにあるジュエルシード目掛けて一直線に放つ。

朝我さんが作ってくれた道に、私は最大威力の魔力を入れる。

なのは「――『ディバイン・バスター』――」
「!!!!!!」

放たれた砲撃は曲がることなく一直線にジュエルシールドを直撃して、

封印した。

そして海鳴市全体を覆っていた木は元通りになりました。

これで、一つの大きな戦いは終わりました。

でもそれは、これから続く戦いの中間地点程度なのかもしれません。
けれど、なんとかなると思います。

前に出て戦ってくれる人。

後ろでサポートしてくれる人がいるから。

私は安心して立ってられる。

安心して砲撃の準備も出来る。

二人がいなかったら・・・私はきっと、何もできない。

だから二人に出会えて、本当に良かったって・・・そう思います。

朝我「なのは！帰るぞ！」

なのは「うん！」

ユーノ「二人ともお疲れ様」

朝我「ああ！」

なのは「うん!!!!」

だからいつか・・・もっと強くなって、朝我さんを救えるように・・・
・そうなりたいて思います。

朝我さんの近くに・・・いたいから。

温泉での出会い（前書き）

時は過ぎていくもの。

そんなことは分かってる。

けれど、それが怖いと感ずることだってある。

俺、朝我零はその一人。

この先の未来で、大切な人達が、命懸けの戦いをする未来を知っているからこそ俺は、時間が経つのが怖くなる。

そんな緊張感、偶には全て忘れて、のんびりと休みたい。

たった一日だけ、24時間だけでいい。

俺を魔導士じゃなくて——ただの普通の人に——。

魔法少女リリカルなのは　　く全てを変えることが出来るなら　　始
まります。

温泉での出会い

朝我 Side

く夢の中でく

????? 「はあああああ! ! ! ! !」

俺は武器を手に、大人のなのはと共にサイドポニーの金髪少女と戦っていた。

なのは「があっ! ! ! ! !」

朝我「なのは! ! ! ! !」

なのはは彼女の拳を防ぎきれずに殴り飛ばされる。

朝我「・・・○○○○○、本気でやるしか・・・手段は無いんだな」

そう言って俺は火車切広光でも無く、雷切でもなく、『薙刀』を出していた。

朝我「行くぞ」

俺は武器の名を呼び、一人の少女と戦う。

朝我・????? 「はあああああ! ! ! ! ! ! ! !」

そして二人は最大威力でぶつかり合う。

そして決着はつき、俺は全身をボロボロにしながらも勝利した。

《聖王陛下反応ロスト・システムダウン》

だが、その場所は魔力無効化フィールドと化し、俺達は魔力を練ることができなくなってしまった。

今動けるのは俺だけ。

俺一人でなのはと彼女を背負って逃げては・・・間に合わない。

そう・・・一人を、見捨てなければいけなかった。

なのは「朝ちゃん・・・先に行って」

朝我「！？ふざけるな！お前を置いて行けっのか！？」

なのは「私は、大丈夫・・・後で・・・おい、かけるから・・・」

朝我「全身ボロボロの体でどう追いかける気だ！？全員助ける！！」

そう言って俺は二人を背負い、全身の力を振り絞って走り出す。

だが魔力も使えない俺は・・・歩く速度と変わらなかった。

なのは「朝・・・ちゃん・・・私を・・・おい・・・て」

朝我「嫌だな！！！！俺は・・・好きな奴を置いて逃げたくない！！！」

なのは「えへへ・・・嬉しい・・・けど・・・ごめんね」

こんな状況の中で俺は振られたんだ。

更になのは・・・最後の力を振り絞って、俺と彼女を押す。

ここで俺は夢から目が覚める。

朝我「っ！！！！！！！はぁ！！はぁ！！！！・・・」

呼吸が荒い・・・

朝我「嫌な夢を見たな・・・？」

起き上がると俺は知らない部屋の布団に寝ていた。

畳に和風をイメージする部屋・・・

朝我「そっか。俺達は温泉に来てるんだったな」

五月になり、ゴールデンウィークとなったため、高町家と月村一家とアリサと俺を加えたメンバーで海鳴温泉へ二泊三日の旅行に出ていた。

着いたのが遅く、夜だったために昨日は到着直後にすぐ寝てしまった。

俺も疲れていた。

というのも、この時間でアリサとすずか達とは初対面で、彼女らは俺を見るやいなや『なのはの彼氏なの！？』と言ったりして俺となのはは状況の修復に時間をかけた。

嬉しいのだが、流石に今はそんな考えは無い上に俺は10年後のなのはに振られているのでそう言う事を考えたりはしていない。

その上なのはの兄貴さんが妙に反応して・・・俺と決闘がどうとか
こうとか・・・

桃子さんが何とか止めてくれたが、決闘は何故か『旅行が終わった
ら』と言うことになった。

なのはの兄貴さん・・・雰囲気や体つきからして、かなりの実力者
だ。

まあ、やってみてもいいか。

朝我「さて・・・起きて・・・・・・・・・・ってえ・・・・・・・・え
？」

一瞬俺はフリーズした。

何故なら一枚の布団に・・・俺十・・・何と・・・将来『管理局の

白い悪魔』と呼ばれるので今は『白い小悪魔』と呼ぼう。

その小悪魔こと高町なのはが俺の布団で寝ていた。

しかも浴衣だけあって妙にはだけている場所があったり・・・

朝我「まずい!!!」

そう思った俺は毛布を首から下を隠すようにかけた。

朝我「ふう・・・第一の問題は解決」

さて問題は二つ目・・・そして最大の問題。

朝我「俺はなのはに――何もしないよな？」

そう。問題はここなのだ。

俺はなのはの事が好きだ。

だがそれは10年後のなのはであって今のなのはではない。

しかし俺は夢で10年後のなのはを見た。

もしかしたらその時に“何か”した可能性がある。

まずい・・・このままでは俺が『ロリコン』になってしまう!!!

・・・え？ 『お前は既にロリコンだ!!』 だと？

んなわけないだろ？

朝我「と、とにかく、部屋から出よう!!」

そう言って俺はタオルを持って湯に向かう。

それも全速力で。

朝我「ふう・・・」

カポン・・・と音が聞こえそうなくらいのんびり出来る温泉。

朝我「やべ・・・気持ちいい・・・」

全身の疲れがどっと落ちていく感覚。

いやぁ・・・スッキリするなぁ・・・

朝我「ああ・・・こんなのにんびり出来る時間・・・やっと出来たな・・・」

この時代に来てから俺は戦う日々・・・

未来を変えるために毎日色々やってたからな・・・

こういう何もしないでただのんびりと湯に使うのは久しぶりだ。

朝我「はぁ・・・朝風呂っていいな」

温泉を早朝から入るこの幸せ・・・って、俺は年寄りみたいだな。

・・・？

朝我「あれ・・・今・・・なんか感じた・・・魔力・・・」

それを感じた俺は風呂をあがる。

朝我「ったく・・・俺は心配性過ぎるな・・・」

苦笑いしながら俺は服を着て、反応があつた場所に向かう。

なのは Side

私は朝起きると朝我さんがいなくなっていた。

昨晚、私は朝我さんと寝たかったので朝我さんの布団に入って寝ました。

そして朝起きた私は朝風呂をするために廊下を歩きだしました。

??? 「んー? ふむふむ…」

突如私の目の前に女性が現れて、私を見て、何やら頷き始める。

??? 「君? 家の子をアレしてくれちゃってるのは?」

赤みを帯びた橙色の髪を背中まで伸ばし、翡翠色の瞳をした、私のお姉ちゃんと同じ年くらいの人の言葉に、私はどうしていいのかわからなかった。

なのは「え・・・えっと・・・」

??? 「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキに見えるんだけどな」

私をジロジロ見て失礼なことを言う女性。

私はこの人に何かしたかな・・・

朝我 「あれ・・・なのは？」

なのは 「朝我さん・・・」

浴衣姿の朝我さんが私のもとに来た。

朝我 「その人・・・誰？」

??? 「ふん・・・」

なのは 「???」

??? 「ああごめん。私の知ってる子に似てただけみたい。ごめん

ごめん！」

そう言って笑顔で謝る女性。

よかったあ・・・悪い人じゃなかったあ・・・

??? 「それじゃね〜」

そう言って彼女は去ろうとした。

朝我「待てよ！」

なのは・???「!？」

朝我さんは女性の首元に雷の刀を向けていました。

朝我「お前・・・何者だ？」

???「え？私はただの人で・・・」

朝我「普通の人は初めて会った子に対して殺意を向けないんだが？」

???「!？」

え・・・わ、私、殺意向けられてたの!？

朝我「答えろ・・・お前は、“人ではない” そうだろ——
——使い魔」

使い魔？

なんのことだろう？

「……へえ……私の正体、よく気づけたねえ」

朝我「当たり前か……じゃ、お前はあの金髪の子……フェイトの使い魔か」

「……だとしたら？」

朝我「……今は、何もしない」

そう言って朝我さんは刀を左手に出た小さな魔方陣に入れました。

「……敵に情けかい？ 甘いね……後で後悔するよ」

朝我「後悔か……だけど、お前には帰る場所があるだろ？」

「……！？」

そう言い終えると朝我さんは私の左手を掴んで歩きだした。

なのは「あ……」

朝我「また会うときは敵だろうな。けれど、俺はお前らを殺したりはしない。殺す理由がないからな」

そう言っつてと朝我さんと私は女性から離れていきました。

アルフ Side

私はさっきの男性と子供から離れ、私の主に連絡をとる。

アルフ「もしもしフェイト？こちらアルフ」

フェイト「うん。どうだった？」

アルフ「彼女は問題ないけど、あの男性は危険。私の気配に気づいた上に、私の背後をとった」

フェイト「!?!?・・・そう」

フェイトも驚いた。

けれど私達は迷ってられない。

アルフ「でも、大丈夫。私がフェイトを守るから!」

フェイト「うん・・・ありがと、アルフ」

アルフ「それで、そっちはどんな感じ？」

フェイト「こっちは収穫無し。もう少しジュエルシードを探してみる」

アルフ「うん。それじゃまた後で」

フェイト「うん」

そう言っ　て私は念話をきる。

そして私は拳を握り締めて見つめる。

アルフ「そうだ。どんな奴が相手でも――フェイトを傷つける奴は、倒す」

そう言って決意を改め、私はジュエルシードを探索し始める。

温泉での出会い（後書き）

守ると言う想い。

どんなに強い相手でも、守ると誓った。

それが、使い魔の存在意味なのだから。

再び交わる雷 変えたい運命

フェイト Side

フェイト「くっ…」

あれから日没まで山中を探し回った。

けれどそう簡単にはジュエルシードは見付からない。

ジュエルシードが発動さえしなければ小さく綺麗な宝石だ。

この広大な山の中から探し出すのは容易じゃない。

そんなことは分かってる。

けれど私は・・・どんな方法を使っても見つけ出すんだ。

フェイト「（だけど・・・中々見つからない。さっき、ここに小さなジュエルシードの反応があったから来たのに・・・もっと範囲を広げてみるか・・・）」

?? 「ここにいたか——フェイト」

フェイト「!?!」

後ろを向くと、私の名前を知る・雷の刀を持つ男性がいた。

朝我「悪いな。なるべくこの場所に来るようにジュエルシードの反応を出させたり消したりを繰り返させてもらった」

フェイト「!?!」

私は・・・あの人に狙われていた!?!

結界魔法を使って私にこの場所を分からせたんだ・・・

フェイト「貴方は・・・何者なの?」

私の事を何故か知っていて、そして強い。

ただ者じゃないのは明白。

朝我「俺は誰も救えなかった、無力な魔法使い・・・そんなところだろうな」

フェイト「無力って・・・私を倒したのに!？」

朝我「それは今のお前と俺とは見てきた世界が違う。簡単に負けるわけではないだろ」

・・・悔しいけど、それは事実。

この人は強い。

・・・けど

フェイト「私は負けない・・・絶対に!」

そう言って私はバルディッシュを鎌の形にして構える。

朝我「・・・お前はあのジュエルシードを集めて、どうするつもりだ？」

フェイト「・・・」

私は答えない。

だって・・・あれを求めているのは、私じゃないのだから。

フェイト「はあああああ!!!!!!」

私は彼に切りかかる。

朝我「・・・俺は、手伝ってやれないのか・・・」

そう言って彼も私に切りかかる。

私は――大切な過去にちじょうを、取り戻すんだ!!!!!!

なのは Side

なのは「! ユーノ君!」

ユーノ「分かってる! この反応・・・すぐに向かおう!」

なのは「うん!」

私とユーノ君は朝我さんとジュエルシードの反応がした場所に向かう。

なんで私には何も言わずに行っちゃったの・・・

それに・・・どうして・・・こんな嫌な予感がするの？

何か・・・これから嫌な事が起こるかもしれない。

朝我 Side

フエイト「はあああああああ！！！！」

朝我「はっ！！！」

フェイトが光速で切りかかる。

俺はそれを全て見切って防ぐ。

だがフェイトは諦めず、光速で俺の全方向から切りかかる。

後ろ、左右、前方、上空、地上。

様々な方向から切りかかれるが、俺は全てに対応する。

フェイト「はあ、はあ、はあ・・・（さっきから本気で打ち込んでるのに・・・掠りもしないなんて、私の速度にここまで対応されるなんて・・・）」

朝我「これで終わりか？」

フェイト「・・・まだ！！」

そう言ってフェイトは再び切りかかる。

朝我「・・・！？」

だが、俺とフェイトは動きを止め、地上を見る。

地上の川面から青い光が立ち上った。

この反応、間違いなくジュエルシード。

ジュエルシードを核として水は人型となり、水の巨人へと姿を変えた。

あれを倒すには雷切では駄目か・・・

そう思った俺は雷切を納め、火車切広光を出した。

フェイト「もう一本の・・・刀」

ああそうか。フェイトには初めて見せたな。

朝我「これが俺のもう一つの刀『火車切広光』。名の通り焰の刀だ」

こいつで蒸発させながら斬るとするか。

朝我「俺は奴を斬るけど、フェイトはどうする？」

フェイト「私も、あれを倒す」

なら・・・目的は同じだ。

朝我「行くぞ！」

そう言って俺は刀身に魔力を込めると魔力は巨大な焰へと姿を変え、そのまま焰の塊を地上にいる敵目掛けて放つ。

朝我『
——『炎龍一閃』
——! !
』

上空からまるで焰の隕石の様に放たれた焰は水の巨人を包み込んで
蒸発させていく。

俺が出来るのはここまで。

朝我「後は――フェイト!!」

そう言うのとフェイトはジュエルシードを封印した。

そして宙に光なく浮かぶジュエルシード。

朝我「ふう・・・」

フェイト「・・・」

俺が安堵の息も漏らすとフェイトは俺を見つめる。

フェイト「何で私に譲ったの？」

朝我「俺は別にジュエルシードが欲しい訳じゃない。でもフェイトは手に入れないといけないんだろ？どんな事情かは知らないけど、命張ってるんだ。そんな奴にはちゃんと褒美はあげないとな」

そう言うって俺は刀を魔方陣の中に納める。

そして再びフェイトを見つめて、右手をだす。

朝我「俺は――フェイトの力になりたい」

そう。もしフェイトの願いが叶えば、未来が変わる筈。

だから俺はフェイトの味方になりたいと思った。

フ ェ イ ト S i d e

フ ェ イ ト 「 . . . 」

私は、差し出された手に、迷いを持った。

でも、それと同時に想うことがいっぱいあった。

——もしかしたら、この人なら私の事情が分かってももらえるかもしれない。

——そしたら凄い心強いし、私は叶えられるかもしれない。

だけど . . . どこかでまだ、迷いがある。

この手を掴んで良いのかって . . .

裏切られるのが怖い。

裏切られるのが怖いなら、最初から関係なんて持たなければいい。

でも・・・それでも、私は――

フェイト「わ・・・私は――!!」

???「はあああああ!!!!!!!!」

朝我「!？」

だけど、私の答えは、私の使い魔によって遮られた。

フェイト「アルフ!？」

アルフが、武器を持たない彼に殴りかかったのだ。

朝我

『

プリューゲル・ブリッツ
『瞬間魔力換装』

』

』

彼は目にも止まらぬ速度で移動してそれを避けた。

アルフ「フェイト！ジュエルシールドは確保したんだ！！さっさとず
らかるよ！！！！」

フェイト「で、でも・・・」

アルフは彼に攻撃をしながら、私にそう言う。

今の状況なら・・・そうせざるを得ないけど・・・

???? 「朝我さん!伏せて!」

朝我「!」

彼は少女の声に促されるように伏せると、桜色の砲撃が放たれた。

アルフは驚きながらも即座に対応して私の隣に向かう。

アルフ「ちっ!援軍か・・・」

朝我「なのは!」

なのは「朝我さん、大丈夫?」

彼女は彼に声をかける。

・・・何でだろう？

あの二人を見てると・・・胸がチクチクする・・・

なんで・・・こんなに・・・怒り・・・みたいな感情がこみ上げてくるの？

朝我「俺は大丈夫。それより、俺はフェイトと話が・・・」

アルフ「話しなんて・・・させない!!!!!!!!!!」

朝我「ぐっ!!」

アルフは彼の話しを無視して殴ると彼は両手でそれを受け止めるが止めきれずに地面に飛ばされる。

フェイト「アルフ!？」

アルフ「大丈夫・・・このくらいじゃ死なないって」

フェイト「そう・・・」

何で・・・安心したんだろ・・・

なんで・・・彼の事を考えると色々考えてしまうのだろう・・・

アルフ「とにかくここは一端・・・」

フェイト「・・・!？」

だけど私はここで、ある事に気づく。

ジュエルシードが、白いBJを着る少女の近くにあると言うこと。

私は、それを取りに行く。

なのは「!させない!!!!」

そう言って彼女も取りに行く。

私は負けない為に、バルディッシュを彼女に振るう。

なのは「!？」

彼女は対応出来ず、目を閉じる。

だが



これで
・
・
・
・

フ
エ
イ
ト
「あ
・
・
・
あ
あ
・
・
・
・
」

私の刃から流れる血。

なのは「う．．．そ．．．」

その時、全ての音が消えた気がした。
時間が止まった気がした。

刃を受けたのは彼女ではない。

刃を受けたのは――

朝我「ぐ．．．はあ．．．」

肩から腰にかけて切り裂かれ、血を出しながら力なく地上に落下していった．．．そう。

なのは「朝我さああああああああああああああああん!!」

彼女を庇って、私に斬られた・・・朝我と言う男性だった。

再び交わる雷 変えたい運命（後書き）

運命は、最悪な道に進んでいる気がする。

二人の9歳の少女は、目の前で人がきられた所を、初めて目の当たりにした。

彼が居なければ、起こり得なかった今。

だが、彼の参戦により――――未来が、最悪の結果に変わってしまったのだった。

本当に知るべきこと

なのは Side

なのは「・・・」

昨晚の悲劇から時は経ち、今はお昼。

私は朝我さんの部屋で、ベットで眠っている朝我さんを見つめています。

もう・・・何時間経つんだろ・・・

昨晚、朝我さんは私を庇って切り裂かれた。

私はジュエルシードを無視して、地上に落下していく朝我さんを助けました。

そしてすぐに戻ってユーノ君に治癒魔法をかけてもらいました。

朝我さんの傷は癒えましたが、意識が覚めません。

朝我「ぐ……う……」

そして何より、朝我さんは今……悪夢を見ているみたいなんです。

朝我さんは何かを掴もうと必死に手を伸ばしました。

朝我「い……や……なの……なの……なの……は……
……」

え……わ、私!?

朝我さんは私を呼んでいました。

朝我「逝く・・・な・・・なの、は・・・うう・・・」
必死にもがくその姿は、いつもの優しい朝我さんではありませんでした。

私は朝我さんが伸ばすその右手を両手で包み込んで、声をかけました。

なのは「私は・・・ここにいます。だから・・・大丈夫、安心して・・・」

そう言うと、朝我さんの表情は柔らかくなって、全身から力が抜けて、再びすやすやと眠りにつきました。

なのは「ふう・・・良かったあ・・・」

安堵の息を吐くと、お母さんとお兄ちゃんが肩にユーノ君を乗せて部屋に入ってきました。

桃子「なのは、朝我君・・・大丈夫？」

なのは「うん。まだ寝てるけど・・・ゆっくり寝てるよ」

恭也「なのはは大丈夫か？」

なのは「うん。大丈夫」

桃子「そう。最初はビックリしたわよ、先に朝我君は家に戻ってたうえに徹夜してぐっすりなんて」

そう。家族皆にはそう言っているんです。

朝我さんと私とユーノ君が、魔法を使う事を隠すために。

桃子「・・・そう。それじゃお粥、ここに置いておくわね」

そう言ってお母さんはお盆に乗せたお粥を卓袱台の上に置いて私の隣に来て朝我さんの顔を見ました。

恭也「初めて見るな。彼の無警戒の姿」

なのは「え？」

お兄ちゃんがそう言って私達に言いました。

恭也「彼を一目見て思った。彼は沢山の者を失ってる。そして、二度と失わない為に、日々緊張感や警戒心を持って過ごしている・・・それはきつと、全ての時間でだと思おう」

なのは「そんな・・・」

桃子「そうね。確かに今の朝我君の表情は、いつも見ていた朝我君とは全然違うわ。安心してるって表情ね」

なのは「安心・・・」

朝我さんの過去に・・・何があったんだろ・・・

・・・というか私は朝我さんのこと・・・全く知らない。

一緒に戦ってきて・・・一緒に住んで、それでも私は・・・朝我さんの事を、何も知らない。

朝我さんの事を知れば私は・・・朝我さんの役に立てる筈なのに・・・

でも、朝我さんはきっと私には何も教えてくれない。

それは、朝我さんが優しい人だから。

だとしたら今、私に出来ることは・・・

少しでも朝我さんを安心出来るように強くなって、いつか朝我さんの背負うものを降ろすこと。

フェイト Side

フェイト「・・・」

アルフ「フェイト・・・」

私は朝から一睡もせず、部屋で待機状態のバルディッシュを眺めていた。

昨晚の戦いで、私は一人の男性を切った。

言い訳になるけど、私は彼を切るつもりはなかった。

それも、あんなに深く・・・

ただ白いBJを着る私と同年代の少女にかすり傷程度の切り傷をさせる程度だったはずだった。

なのに私は・・・彼に恩があるのに、傷つけてしまった。

私、本当に最低だ。

フェイト「アルフ・・・私、どうすれば良いかな？」

私は・・・どうすれば良いのか分からない。

だからアルフに聞いてみた。

アルフ「あいつは敵だよ？敵の心配は必要ないさ」

フェイト「敵・・・」

その言葉に私は違和感を持った。

それはきつと、彼が差し出した右手だった。

もしあの手に迷いを持たなければ私はきつと、彼を傷つけなかった。

・・・あの人、朝我って言ったかな。

朝我・・・私の事、許してくれないよね。

私はやっぱり、アルフと一緒に全てを成し遂げるしかないよね。

フェイト「アルフ、行こ」

アルフ「うん！」

そう言って私とアルフはジュエルシードを探しに行く。

朝我 Side

朝我「・・・ん」

目を覚ますと天井が見える。

見覚えがあるなと思い出すとそこは俺がお世話になってる高町家の俺の部屋だった。

俺はベットで寝ている。

だが、俺は記憶が曖昧だ。

確か俺はフェイトとアルフと戦って

——切られた。

そう思い出した俺は自分の胸に手を当てる。

朝我「包帯が巻かれてる・・・既に傷はない・・・」

ユーノの治療魔法で助けてもらったってところか。

なのは「すう・・・すう・・・ふみゅ」

朝我「なのは・・・」

そして俺のベットに体をあずけてスヤスヤと寝ているのは間違いないな
くなのはだ。

首にはレイジングハートが着いている。

レイジングハート「お目覚めですか？」

レイジングハートが点滅しながら俺に声をかける。

朝我「ああ。バッチリだ、今からでも戦える」

レイジングハート「それは良かった。マスターはとても心配しておられました故」

朝我「なのはが？・・・って、そりゃそうだよな・・・」

なのはとフェイトには・・・辛いものを見せてしまったな。

人が切られる姿。

血を流して倒れていく姿。

そんな姿を、9歳の時に見せてしまった。

朝我「・・・！？」

だが、後悔する時間よりも、ジュエルシードの反応が俺に襲いかかった。

朝我「まったく、復帰直後に出撃って・・・六課にいた時よりハードだな・・・」

レイジングハート「六課とは？」

朝我「・・・“いつか”分かる」

そう言って俺は布団から起きてなのはを布団に寝かせて毛布をかけて部屋を出る。

朝我「レイジングハート。なのは主を頼む」

レイジングハート「了解しました、朝我様」

そう言って俺は家の窓から飛び降りて飛行魔法で空を飛び、光を超える速度で進む。

朝我

『

――

『瞬間魔力換装
プリューゲル・ブリッツ

――

』

夜のビルが立ち並ぶ街中、魔法使い以外は入れない結界の中に俺は入り、地上に降りる。

そこには金髪でツインテールの少女が、武器を構えて立っていた。

フェイト「あ……あの……」

おどおどした様子で俺に話しかけてきた。

フェイト「あの……怪我……大丈夫……ですか？」

朝我「え……ああ、大丈夫。治癒魔法かけてもらって一日中寝てたら快調だね」

そう言うとフェイトは安堵の表情を浮かべる。

フェイト「良かった……あの時は、ごめんなさい」

朝我「謝る必要はないさ。あの時はフェイトだってああする他なかった。俺だってきつとフェイトと同じことをしていたさ」

フェイト「・・・ありがとう」

朝我「ああ・・・それと『はあああああ！！！！！！！』・・・雷切」

それは上空から殴りかかってくるアルフの拳を刃の側面で防ぐ。

フェイト「アルフ！！！！！！」

アルフ「フェイト！こいつのことは良いから早くジュエルシールドを！！！！！！」

フェイト「・・・」

フェイトは申し訳なさそうな表情をしながらジュエルシールドの反応があつた場所へ向かう。

アルフ「これ以上・・・フェイトを惑わすことを・・・するなああああ
ああああ！！！！！！！！！！」

そう言ってアルフは渾身の拳を俺に放つ。

朝我「・・・・・・・・っざけんな」

アルフ「!?!」

だが俺はそれを右手で掴む。

アルフ「くっ・・・」

アルフは必死に俺の手から離れようとするが俺の握力に離れることが出来なかった。

朝我「ふざけんじゃねえぞ!!!!!!」

アルフ「!?!」

俺は怒りを露にする。

朝我「フェイトを惑わす? お前には見えないのか!? フェイトが・・・
・独りで誰も幸せにならない戦いを続けていることに!!!!!!」

アルフ「フェイトは独りじゃない！」

朝我「使い魔おまえがいるってのか？」

アルフ「ああそうさ！！！」

朝我「だったら・・・何で手を差し伸べてあげないんだ！？あいつは今にも死にそうな・・・そんな危険な場所にいる。ちょっとしたショックで全てが崩壊するような・・・そんな場所にあいつはいるんだぞ！？それなのにお前は・・・お前は他人が差しのべる手を自ら否定してフェイトを殺そうとしてるんだ！！！！どうしてそれに気づかない！？お前は使い魔だろ！！！！！！！！！」

アルフ「あんたに・・・あんたなんかには、フェイトの何が分かるんだ！！！！！！！！！」

そう言ってアルフは回し蹴りを繰り返す。

朝我「俺は――何も知らないよ。フェイトの事、知ってるように
で実は何も知らない。そのせいで俺は――失ったんだ」

そう言って俺はしゃがんでアルフの蹴りを避けて懷に雷の一閃を繰り出す。

その一閃を喰らったアルフはショックで気絶する。

朝我「分かっていたら、きっとフェイトを救える。だから俺は、知りたいたんだ。フェイトが一体どんな人で――何を背負って生きてきたか」

そう言って俺はフェイトのもとへ向かう。

そこには既になのはがいて、フェイトと戦っているのだった。

本当に知るべきこと（後書き）

分かってあげたい。

皆が何を背負っているのか。

それを知れば、俺は運命を変えられたに違いないから。

運命を変えて・・・誰も失わない世界に進みたいから・・・

これから

朝我 Side

俺はアルフとの戦闘を終え、ジュエルシードの近くに向かうと、なのはとフェイトが夜の空を飛び回っていた。

お互いの魔力弾・槍を放ち、お互いにそれを避ける。

そしてお互いの砲撃を放ってぶつかり合う。

お互いに一步も譲らぬ対決となっていた。

朝我「なのは・・・強くなったな」

最初の頃はフェイトに完敗だったなのはがこの超短期間でフェイトと互角に渡り合えるまでに成長している。

それは彼女の素質もそうだけど、それよりも何より、決断しているからだと思う。

人は想いの強さで、いくらでも成長できる。

そして今のなのはは、もっと強くなる。

この戦いを終えて、また一つ強くなるだろう。

だが、二人の間に割り込むようにして、ジュエルシードは空高く、その力を発現させた。

朝我「この膨大な力・・・次元震が起こる！」

そんなことをお構いなしになのはとフェイトはジュエルシードに突っ込む。

朝我「二人とも・・・駄目だ!!!!!!!!!!!!!!」

俺は必死に声をだす。

だが時既に遅し。

なのは・フェイト「「!？」」

二人のデバイスはジュエルシードの強力な力によってヒビだらけになった。

そして二人は衝撃波によって飛ばされる。

なのは「ぐううつ・・・」

フェイト「バルディッシュ・・・戻って」

そう言うバルディッシュは待機モードになり、フェイトはジュエルシールドに向かって飛ぶ。

そしてフェイトはジュエルシールドを両手で掴んだ。

朝我「まずい!!!!!!」

俺は即座にフェイトのもとに行く。

フェイト「ぐううつうつうつ・・・」

フェイト「!？」

その魔力に、俺は想いを込める。

俺が今まで変えられなかった運命を変えるのを邪魔させる奴は絶対に倒すと誓い。

朝我「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

フェイト「・・・」

それから数分、どうにかジュエルシードは静まってくれた。

朝我「はいこれ」

そう言って俺はフェイトにそのジュエルシードを渡す。

フェイト「な・・・何で・・・また」

朝我「今回はお前の手柄だ。だったらお前が持っていけ」

フェイト「・・・」

そう言う俺は立ち上がり、なのはのもとに向かう。

朝我「今日はこのへんにしとこう。お互いに武器が万全になってから・・・また」

そう言って俺はフェイトと別れる。

そしてフェイトはアルフを連れてその場を後にした。

朝我「なのは、大丈夫か？」

なのは「う、うん。それより朝我さんはどうなの？昨日の傷・・・」

朝我「ユーノのおかげで大分良くなった。あと、なのはが看病してくれたおかげでな」

そう言ってなのはの頭を撫でる。

なのは「ふにゃ・・・」

朝我「さて、さっさと家に戻ってレイジングハートの修復だ」

なのは「うん」

だが、この戦いで発生した次元震は、次元航行中の戦艦を、魔法の文化の無い地球に送り込む結果となるのだった。

そして家に戻った俺となのははユーノと共に今後の活動の話をする。

朝我「次元震の発生・・・か」

ユーノ「どうかしたの？」

朝我「いや、なんか・・・嫌な予感がしてな」

ユーノ「・・・」

それはユーノも感じている様子だった。

そう、何かが近づいている気がする。

なのは「??????」

なのははさっぱりみたいだけどな。

朝我「取り敢えずこれからは今回の反省点を踏まえて、慎重に行動しないとな。なのはみたいに突撃思考も少しは考えないとな」

なのは「うう・・・ごめんなさい・・・」

じと目でなのはを見るとなのははしゅんとして謝った。

朝我「（六課じゃ、俺がなのはに謝ってばかりだったのにな・・・）」

そう思い出すと、不思議な感覚だった。

ユーノ「ジュエルシードは相手側と僕たちの方でも少しずつ集まってきた。これからは一層戦いが激しくなるかもしれない」

朝我「確かに・・・」

結局、俺たちとフェイト達は最終的にはどちらがジュエルシード全てを持つかで争わなければならないのは分かっている。

それは決まった運命でもある。

・・・その運命を変える方法は・・・いや、この戦いを無くしたら、何かを失うんじゃないか？

だとしたら、無闇に全てを変えるのは危険か・・・

・・・てか、今だに管理局が動いていないのが気になるな・・・

これだけ俺達の戦闘があつたに加えて今回の次元震だ。

誰も何も動かないなんておかしい。

だとしたら・・・もうすぐ、来るか・・・

そしたら俺は――管理局ぐんじょうとフェイトの味方をすればいいのだろう。

俺は機動六課の魔導士だった。

階級は2等空尉だった。

なのはとフェイトより1階級下だ。

元々は管理局で囑託魔導士をやっていたのだが、何があっただか俺の名前が八神はやての耳に入ったらしく、俺を採用することになった。

そう。結局は俺は管理局の人間だということだ。

この時代は違うが・・・それでも俺自身がそうであることは変わらない。

だとしたら、この先必ず介入してくるであろう管理局。

そしてきつと叶えたい願いの為に精一杯のフェイト。

俺は―――どちらの味方をすればいいのだろう・・・

なのは「朝我さん、大丈夫？」

朝我「え・あ、ああ、病み上がりだからちょっと疲れた。今日はもう、寝るな」

なのは「あ、はい。それじゃ、おやすみなさい」

朝我「ああ、おやすみ」

そう言って俺は自分の部屋にもどるのだった。

朝
我
「
・
・
・
」

そして俺はなのはのデバイスが治るまでの数日、ずっとそのことを
考え続けるのであった。

コラボの章 白き修羅&IKA（前書き）

今回は毎度お馴染み白き修羅先生とのコラボです。

TPP問題があろうとも、二次創作を諦めないで頑張ろう！！

コラボの章 白き修羅&IKA

朝我 Side

朝我「・・・」

俺は海鳴公園で一人、仰向けで空を見ていた。

というのも、今日は平日でなのはは学校に行っているため、俺は何もやることはないのだ。

翠屋の手伝いと思ったのだが、今日は桃子さんに用事があったため、店は休みで店は誰もいない。

・・・つまり、暇なのは俺だけ。

朝我「あれ・・・俺ってもしかして・・・ニート？」

仕事なし。学業なし。・・・やることなし。

朝我「・・・orz」

ああ・・・なんか凹む。

翠屋で本格的にバイトするのも良いかな・・・

朝我「この時代に飛ぶ時に計算するのを忘れていたな・・・」

まさかタイムスリップするとニートになるとは・・・

朝我「・・・ジュエルシード・・・見つからないな・・・」

それがもう一つの悩み。

ジュエルシードの反応は、まるでなのは達の復帰を待つかの様に反応なし。

海鳴の搜索範囲をもっと拡大させて、海鳴の隅々まで調べないと駄目か・・・または海鳴以外の場所にあると考えるか・・・

朝我「まあどちらにせよ、レイジングハートの復活を待たないことには、こちらでも動けないか・・・」

そう言って溜息をつく、俺は目を閉じて昼寝をしようとした。

?? 「あれ・・・朝我!？」

俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

朝我 「え・・・その声」

俺は起き上がって声の主を見た。

?? 「ああ、やっぱり朝我じゃないか!!！」

朝我 「龍牙!？」

俺と紅き修羅は再会した。

朝我「お前、どうしてこの時代せかいに？」

龍牙「ああ、まあ・・・色々な」

朝我「？」

龍牙の意味深な言葉にはてなマークが出る俺だった。

龍牙「てか、お前も何でここにいるんだよ？お前は六課にいるんじゃないかったのか？」

朝我「まあ・・・こっちも、色々」

龍牙「？」

今度は龍牙がはてなマークを出してしまった。

龍牙「まあ、久しぶりに会えて嬉しいな」

朝我「ああ。俺も、お前に会えるなんて思ってもみなかったからなあ・・・」

そう言って俺と龍牙は過去を思い出す。

回想

これは俺、朝我零がまだ六課に入る前の・・・未来の物語。

皆もご存知の通り、スバル・ナカジマ、ギンガ・ナカジマの二名が被害にあった、空港火災事故があった。

その事故に俺も救出に参加していた。

いや、ほんとは無関係者だったのだが、空港に“待ち合わせしている人”がいたもんで、その人の降りた空港が災難なことに火災現場だった。

まあ待ち合わせしていた人は実力はあるので心配はないのだが、迎えに行ってたのでついでもってことになった。

だが待ち合わせしていた人は空港から脱出していたらしく、俺はそれを知らないまま避難が遅れた人の救出をしていた。

その空港火災の時、俺は龍牙に出会った。

朝我「誰かいませんかあ!!!!」

崩れた岩を雷切で切り裂きながら進んだ。

『機神双獣撃』
きしんそうじゅうげき

朝我「な!？」

突如目の前を、獣の形をした何かが通って、その後に一人の男性が姿を現した。

?? 「お前は？」

朝我「俺は朝我零」

龍牙「俺は時空管理局『特務機動隊』隊長。真崎龍牙中将だ。よろしく」

それが、俺と龍牙の出会いだった。

龍牙「なるほど。つまり朝我は友人探しの為にここに来て、偶々ここにいたと？」

朝我「ああ。だけど・・・この時期に火災・・・それも空港って・・・」

龍牙「ああ。“不自然”だと、俺も思う」

俺と龍牙は共に救出作業を続け、作業が終わると二人で話し合っていた。

龍牙「今回火災が発生した空港の設備は完璧だった。だが、俺たちが出動せざる事態になった」

朝我「問題はそこだ。俺たちが出動する程危険な火災が発生出来るのか？それも、質量兵器などが無しでだ」

疑問は、更に疑問を生んで、俺たちは悩み続けた。

今回の空港火災事故は『事故』として終わらせるのは間違っている気がしたからだ。

龍牙「まあそのへんは俺らの方で何とかするさ。協力ありがとな」

朝我「いや、こちらこそ」

そう言ってお互いに握手して、俺達は別れた。

回想終了。

朝我「結局、あの事故の事は原因不明のまま・オレらは終わったな」

龍牙「こっちはまだ調べ中。まあこの世界に来たから、それを調べる必要が無くなるけどな」

朝我「・・・俺が、無かった事にすればいいってことか？」

龍牙「そこはお前に任す」

そんな会話をしていると、俺はふと気になった事を口にする。

朝我「お前って今、どこに住んでるんだ？」

龍牙「俺は“別の世界”の八神はやての家に居候してる」

朝我「・・・は!？」

物凄く驚いてしまった。

え？なんで？ナンデナノカナ、セツメイシヤガラナイトオハナシシヤガリマスヨ？

龍牙「そ、そんな怖い顔で聞くな（――；）説明するから」

俺は龍牙から今までの話を聞いた。（詳しくはwebで・・・じゃないくて白き修羅先生の作品見ないとわからないよ）

朝我「ホントに色々あったんだな」

龍牙「ほら、俺が説明したんだから、お前も説明しろよ。お前の今日までを・・・」

朝我「・・・ああ」

少し考え、そう答えて・・・俺は話した。

朝我「俺の世界では、『高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、ヴィータ』の4人が――死亡した」

龍牙「な――!?!」

俺の一言に、龍牙は驚きを隠せずにいた。

それでも俺は話を続ける。

朝我「その後、俺はこの時代に飛んで……今、ジュエルシードを集めてる」

龍牙「ジュエルシード……」

龍牙にとっては懐かしくそして色々な事の始まりだった・・・ジュエルシード。

朝我「俺・・・知らなかった。なのはもフェイトもはやても・・・皆、幸せに生きてきた訳じゃないんだってこと・・・大切なものを失い続けてきたことを・・・」

龍牙「・・・そうか」

俺の表情を見てか、それとも俺の話を聞いてか、龍牙はそれ以上聞いてこなかった。

朝我・龍牙「・・・」

お互いにより良い空気では無くなり、無言状態になる。

だが、その空気を碎いたのは龍牙だった。

龍牙「気晴らしに、戦わないか？」

朝我「え？」

龍牙「どうせこの世界で本気とかあまり出してないんだろ？気分転換に一発どうだ？」

ニヤリと、でもなにか考えている訳でもなくて、ただ純粹に手合わせした表情を彼をした。

だから俺も、それを受け入れた。

朝我「ああ。良いだろう！」

そう言って俺と龍牙は空へ飛んだ。

雲の上に立つ様に浮き、俺たちは一定の距離を保って向き合う。

俺は左手に小さな魔法陣をだして唱える。

朝我『牡籥かけ闔す総光の門——七惑七星が招きたr』長いわあ
ああ!!!!!!!!!!』うわっ!?!』

龍牙は待ちきれなかったのか、唱えてる最中の俺に殴りかかった。

俺はギリギリで避けて距離をとる。

朝我「ちよっと待て!!!!せめて武器を出させろよ!!!!」

龍牙「うっさい!! お前の祝詞長すぎて読者が飽きるんだよ!!!!」

そう言いながら龍牙は物凄い速度で殴りかかる。

俺はそれを避け続ける。

朝我「読者とか気にしてたら・・・俺が負けるだろアホ!!!!!!!!!!」

そう言って俺は龍牙の右拳を左手で掴んで右手で殴りかかった。

龍牙はそれを左拳を放ってぶつけ合う。

そしてお互いに距離をとって俺は再び魔法陣をだす。

朝我「由来艸阜の勢——文曲零零、急ぎて律令の如く成せ——」

龍牙「だから、長いって!!!!」

そう言って龍牙は俺に殴りかかった。

だが俺は龍牙の拳を避けながら祝詞を唱えた。

龍牙「何!?!」

朝我『——千歳の儔、雷切!』

そして俺は雷切を取り出し、龍牙に切りかかる。

龍牙「せいっ！！！！」

朝我「!？」

だが龍牙は拳に魔力とは別の何かを纏わせて刃と拳をぶつけた。

そして龍牙は体を回転させて回し蹴りを放ったので、俺は素早く後ろに下がって刀を構え直す。

朝我「龍牙。お前の出してるそれ・・・なんだよ？」

龍牙「俺の纏ってるこれは魔力じゃなくて『覇気』だ。覇気は変幻自在でな・・・こんな風に・・・」

そう言って龍牙は覇気を獣の様な形状にして、俺に放った。

龍牙

『

機神双獣撃^{きしんそうじゅうげき}

』

！

！

』

迫る獣に対し、俺は抜刀術の構えをとり、蒼き雷を集めた。

朝我「――『千鳥一閃』――!」

巨大な雷と巨大な覇気がぶつかりあった。

朝我「・・・」

俺は髪の毛が丸焦げ・・・

龍牙「・・・」

龍牙は髪の毛全部が電気でボツサばさに跳ねていた。

龍牙「・・・どうだ？ 気晴らしになったか？」

朝我「まあな。少しは本気出せたし・・・偶には良いな。本気ってのも」

龍牙「そうだろ？ なのはとかはいつだって全力全開で困るけどな」

朝我「全くだ」

そう言って笑い合う。

龍牙「そんじゃ、俺は仕事に戻るかな」

朝我「ああ。頑張れよ」

龍牙「それはこっちのセリフだ。変えなきゃいけない・・・未来があるんだろ？」

朝我「・・・」

龍牙「だったら悩んでる暇なんて、無いだろ？本当は過去なんて変えていいもんじゃない。それをお前は変えようとしてる、変えることが出来る。だったら迷う必要なんてないだろ？お前のやりたいようにやればいい」

その言葉が、深いほど俺の中に響いた。

龍牙「お前の創りたい未来を作ればいい。世界みらいは、お前の行動次第でいくらだって変えることが出来るんだから。ただ、どうすればいいかって考える時間が短いんだ。だとしたら、お前が今まで経験してきたことの全てを思い出せば良い。後は・・・体が勝手に動いてくれるから」

朝我「・・・お前、その若さで何おっさん臭い事言ってるんだよ」

龍牙「うるせえ」

そう言って龍牙は去って行った。

朝我「・・・ま、頭ではわかってるんだけどな・・・」

そう言って俺が家に帰る頃には、世界は夜になっていた。

現在を変えて、未来を新たに作る。

それが朝我が目指していること。

迷ってなんかいられない。

失った悲しみがあるから。

失った苦しみがああるから。

だから、迷う必要はない。

朝我「さて・・・行くか」

そう言って、ジュエルシードを探しに向かう。

“二人の少女”と、過去に囚われた一人の悲しき女性を救う為に――

コラボの章 白き修羅&IKA（後書き）

IK A 「更新遅かったですけどいかがでしょう!!」 （どや顔）

相良 「うわ・・ウザ」

朝我 「これは確かに・・・ウザいな」

IK A 「朝我にも言われたよ」「――〇」

助ける理由 助けたい理由 前編

フェイト Side

フェイト「うつ・・・っ・・・ぐあ・・・」

高次空間内に浮かぶ要塞『時の庭園』の玉座の間に、私はいた。

???? 「たったの四つ。これは・・・あまりにも酷いわ」

そう言って、私は魔力のロープで両手を縛られ、宙に吊された私を見据える。

フェイト「ぐ・・・ごめん、なさい・・・母、さん」

この人が私の、母さん。

プレシア「フェイト、あなたは私の娘。大魔導士『プレシア・テスタロッサ』の一人娘」

私の正面に立った母さんは、私の顎を持ち上げ、瞳を覗き込む。

プレシア「不可能なことなどあっては駄目。どんなことでも。そう、どんなことでも、成し遂げなければならないの」

母さんは私の心に刷り込むかのように、ただひたすら言葉を紡ぎ続ける。

プレシア「こんなに待たせておいて、この程度の成果では、母さんは笑顔であなたを迎える訳にはいかないの。わかるわね？ フェイト」
フェイト「・・・はい、わかります」

プレシア「だから、覚えて欲しいの」

その声と同時に、母さんの握る杖が、鞭へと姿を変える。

プレシア「もう二度と、母さんを失望させないように」

そう言って母さんは鞭で私の全身を傷つけ始める。

それは、私への罰。

私は、母さんにやられることで、罪を償うしかない。

私と母さんの目的の邪魔になっているのは、間違いなくあの男・・・
朝我だ。

あの人に、私は一度も勝てた事がない。

それに、あの人を本気にさせることもできないなんて・・・

このままじゃ、母さんの期待に答えられない。

プレシア「起きなさい」

いつの間にか気を失ってしまっていたのか、その一声に私の意識は覚醒する。

プレシア「ロストログアは、母さんの夢を叶える為に、どうしても必要なの」

フェイト「・・・はい・・・」

私は、母さんの目的を知らない。

知る必要がないのかもしれない。

けれど、私は取り戻したいんだ。

“あの日々を”
この日々を

朝我 Side

朝我「レイジングハートはもう大丈夫なのか？」

なのは「うん。もう全開で動けるよ！」

それは何よりだ。

レイジングハートもレイジングハートで凹んでたからな。

朝我「って事は・・・そろそろジュエルシードが動くか・・・」

ユーノ「朝我。その予想は当たりだよ、今さっきジュエルシードの反応があった」

ほら来た、予想通り。

文字通りシナリオ通りってところか。

朝我「よし。行くぞ！」

なのは「うん！」

そう言って俺達はジュエルシードのもとに向かう。

今回のジュエルシードは大木だった。

木に埋め込まれたジュエルシードに呼応し、枝を腕のように振り回

している。

そこには既にフェイトがいて、無謀にも一人で戦っていた。

朝我「フェイト!!!!」

俺は火車切広光を出して俺たちに迫る枝を切り燃やしながらフェイトのもとに向かう。

フェイト「朝我!?!」

フェイトは驚いて俺を見る。

だが、その隙に枝がフェイトの死角から迫る。

フェイト「っ!?!」

気づいたときには既に避けるには間に合わない。

朝我「フェイト!!!!」

今のままじゃフェイトの命が!!

・・・でも――

朝我「絶対に助ける。俺が――必ず!!!!!!」

そう言って俺は火車切広光を左手の魔法陣に納め、その魔法陣から新たな刀を出すために祝詞を唱える。

朝我『かぎ牡籥とくかけ闔とくす総光の門——』

俺は静かに、瞬間魔力換装を発動させながら唱える。

朝我「七惑七星が招きたる、ゆらいそふう由来艸阜の勢——」

そして魔法陣から柄が姿を表す。

蒼く染まるその柄を、俺は掴む。

朝我『破軍零零、向いて我が手に帰還せよ――』

フェイト「!？」

その瞬間、フェイトのと俺はいた場所がお互いにチェンジされた。

俺は迫る枝を切り裂く。

蒼き刃が、姿を現して――

朝我『千歳の儔、――蜻蛉切とんぼぎり――』

四尺もの長く、青みがかかった刃に、蒼き柄の刀。

刃はまるで鏡の様に、周りの景色を写し、刃が見えづらい。

フェイト「今……何が……」

何が起ったのか理解出来ないフェイトに理解できそうに話す。

朝我「俺のこの刀、蜻蛉切は刃に写った場所と俺の居場所を交換する事が出来る。それが第一の能力」

説明していると6本の枝が俺を覆う様に迫る。

フェイト「危ない!!!!!!」

フェイトが声をかける。

朝我「安心しろ。蜻蛉切のもう一つの能力を見せてやる」

そう言って俺は刃に迫り来る全ての枝を写させた。

そして――放つ。

朝我『結べ——蜻蛉斬り！……！』

その刹那、全ての枝は切り裂かれる。

だが俺は、まるで何事もなかったかのように立っていた。

フェイト「何が・・・」

なのは「凄い・・・」

朝我「――蜻蛉帰り――」

フェイト「っ!?!」

そして俺はフェイトの背後に現れ、背中を合せて武器を構える。

朝我「これが蜻蛉切の2つの能力だ」

まず一番最初にフェイトと俺の場所を入れ替えて、最後に俺がフェイトのもとに向かった技は『蜻蛉帰り』

蜻蛉切の刃に写ったものと俺の位置の入れ替えと、俺自身を入れ替えた場所へ帰らせる技。

簡単にいえば転移魔法に近いものだ。

そして攻撃に使った『蜻蛉斬り』は、刃に写った対象を全て切り裂く事が出来る技。

刃に写るものであればなんでも切ることが出来るが、幽霊や魔力を切り裂く事はできない。

更にはロストログアを切り裂く事も出来ない。

性能が良い刀なのだが、転移何かの繰り返しをし過ぎると体力を多く消費してしまう。

朝我「さて、説明は済んだ。後は――奴を切り裂くぞ」

フェイト「……うん！」

俺とフェイトは背中を合せ、武器を構えて、大木に向かって切りかかる。

フェイト「プラズマランサー・・・ファイア!!!!!!!!!!」

そう言ってフェイトは雷の槍を5発放つ。

俺は槍の先頭を突き進む。

大量に迫る枝。

俺は蜻蛉切の刃に枝ではなく俺自身を写す。

朝我『——蜻蛉歸り——』

俺は数秒前にいた場所に戻ってそのまま突っ込む。

全ての枝は雷の槍とぶつかり合って消滅する。

俺はその隙に蜻蛉切の刃にジュエルシールドを巻き込んだ大木そのものを写して放つ。

朝我『止めだ——結べ、蜻蛉斬り——!!!!』

刹那、大木は全て粉々になるまで切り裂かれて消滅する。

そしてジュエルシードだけがその場に残った。

朝我「……」

俺はジュエルシードと蜻蛉切を魔方陣の中に納めて、フェイトを見つめる。

フェイト「……」

そしてなのはが遅れてユーノを肩に乗せて来る。

なのははフェイトを見つめる。

フェイトもなのはを見つめる。

俺は二人の間に入るように立ち、話す。

朝我「フェイト。俺たちに、全てを話してくれないか？」

フェイト「それは、出来ない。私はただ、譲れない想いがあるから」
譲れない想い……九歳^{フェイト}の少女の決意は、とても大きなものを感じた。

なのはも、自分の想いを伝える。

なのは「私達だって譲れない。だって——知りたいから。フェイトちゃんの想い・・・駄目？」

フェイト「・・・」

フェイトは、その質問に答えるように無言でバルディッシュを鎌にしてなのはに向ける。

なのは「・・・分かったよ。私が勝ったら、聞かせてもらうから」

フェイト「・・・」

俺は二人の邪魔をしないように、少し二人から離れる。

俺は、フェイトを救いたい。

けれど、俺にフェイトの想いを開かせる力がない。

それは、10年経っても親友の想いが消えなかったなのはしかない。
い。

俺には・・・出来なかった事だから。

なのは・フェイト「
「
・
・
・
・
・
・
・
」
」

そして二人は同時に突っ込む。

——『ストップだ!!!!!!!!!!』

だが二人の対決は、二人の中心部に出来た水色の魔法陣をだす一人の黒いBJを着た少年によって妨害される。

朝我「あいつは……」

転移魔法によって突如として現れたその少年は、左手でバルディッシュを掴み、右手に握った杖でレイジングハートを止めた。

鋭い視線で俺達三人を見据えるこの少年は——執務官。

朝我「遂に……来たか」

俺は・・・決断することになる。

クロノ「時空管理局執務官『クロノ・ハラオウン』だ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

管理局の人間は、^{おれ}フエイトの味方をするか、管理局の味方をするか。

どちらかを——決断しなければならなくなったのだ。

助ける理由 助けたい理由 前編（後書き）

今回登場した武器、蜻蛉切の説明。

そもそも蜻蛉切は刀ではなく『槍』ですが、この作品はオリ武器として、刀にしてみました。

技は・・・ホライゾンのパクリです。

蜻蛉切は基本的にはカウンター専用の刀なのですが、今回は大木の放つ枝の数が半端なく多いので、攻撃しながら使用しました。

助ける理由 助けたい理由 後編

朝我 Side

クロノ「全く、何を考えているんだ君達は？」

二人のデバイスを受け止めながら、呆れたように溜め息をついてそう言った。

クロノ「ロストログアの前で戦闘行動なんて、この街を消すつもりか？」

朝我「別にそのつもりで戦った訳じゃない。こちらにも“事情”があってな」

クロノ「その事情に、この街を巻き込もうとしていたんだ」

確かに、その通りだ。

この戦いは二人の想いをかけた戦い。

そこに街を巻き込む必要はない。

・・・だけど、俺は・・・

クロノ「まずは2人共武器を引くんだ。このまま戦闘行動を続けるなら、僕は君達を倒さないといけない！」

その言葉に答えるようになのは達は地面に降り立つ。

クロノの話を聞こうと口を開いたその瞬間――橙色の閃光が、降り注いだ。

クロノが咄嗟にシールドを張ってそれを防ぐ。

閃光の雨が収まり、空を見上げた俺達の視界に映ったのは、フェイトを主とする使い魔

アルフ「フェイト、撤退するよ!!そこから離れて!!!!!!」

橙色の魔力を集束させ、フェイトの邪魔をするものを排除しようとするアルフだった。

フェイトは飛び上がる。

クロノはそれに反応して杖を向けるが、アルフの再度の攻撃に距離を取らざるを得なくなる。

フェイト「・・・」

フェイトはジュエルシールドに手を伸ばす。

それを見たのはは即座にフェイトのもとに迫るが、間に合わない。

クロノ「はっ!!!!!!!!!!」

フェイト「っ!？」

だが、クロノが放った水色の弾丸が、フェイトに当たり、フェイトは地面に落下する。

朝我「フェイト——!！」

だが、俺はここで迷った。

今、フェイトに手を伸ばせば、俺は管理局を裏切ることになる。

それは、正しい選択なのか？

俺は管理局の人間で、管理局の味方でなければならない。

けれど俺は・・・俺は・・・

ずっと迷っていたんだ。

この答えが分からなくて・・・

——『今の私は、本当の真実を知らずに生きてる。そしてこの先、後悔する結末が待ってる。だから・・・だから、運命を変えて、朝我！』

朝我
『
瞬間魔力換装』
！
！！
！！

俺は――フェイトの手を掴んだ。

なのは「フェイトちゃん!!!!!! 朝我さん!!!!!!」

アルフ「フェイト!!!!!!」

なのはとアルフは心配そうに声をかける。

朝我「大丈夫だ! フェイトは無事だ」

そして俺は雷切を右手に持って、気絶しているフェイトをゆっくりと地面に仰向けで寝かせてクロノを睨む。

クロノ「……なんのつもりだ?」

朝我「何故フェイトに攻撃をした?」

クロノ「先に僕の質問に答えろ『五月蠅い。俺の質問から答えろ』・
・執務官として、それがベストだと判断した」

ベスト……な。

朝我「少なくとも、9歳の女の子に攻撃をして落下させた時点で――
――ベストなんて思わない」

そう言って俺は雷切に魔力を込める。

雷切はそれに答える様に蒼き雷を纏う。

クロノ「・・・戦うと言うなら、僕も容赦はしない」

そう言ってクロノはデバイスを俺に構える。

なのは「朝我さん・・・」

なのはは心配そうに俺を見る。

朝我「大丈夫だよ。すぐ“帰ってくる”」

そう言って俺は左手にいつもの魔法陣とは違う、血のように赤い魔法陣を出して――唱えた。

朝我

『

—

『
赤い夜
』
アイ・スベース

—

』

その瞬間、世界はガラスが割れた様に碎け、俺とクロノの2名は誰もいない、真っ赤な夜の世界に立っていた。

クロノ「なっ！？こ、ここは！？」

クロノは状況を理解出来ない様子で周囲を見渡す。

朝我「この世界は俺が選んだ者しか入ることの出来ない特殊な場所。この赤い夜は時間軸が存在しないため、もとの世界の一瞬の世界だと思えばいい」

クロノ「……ここが、誰も……街も巻き込まない場所か」

朝我「……」

普段俺が使わなかったのは、ジュエルシードの範囲が広すぎて特定出来ない為、どこまでを赤い夜に入れば良いのか分からなかったからだ。

朝我「さて・・・始めようか。お話を・・・な」

そう言って俺は左手に魔法陣を出して雷切をしまい、新たな刀をだす準備をする。

クロノ「・・・」

クロノは水色の魔法陣をだし、弾丸を6つ程出した。

きつと様子見だろう。

朝我「様子見なんてしてる余裕・・・お前にあげるとでも？」

そう言って俺は唱える。

朝我『牡籥かけ闔す総光の門――』

朝我『七惑七星が招きたる、由来艸阜の勢――』

クロノは徐々に露になる刀へ恐れたのか、全ての弾丸を容赦なく放った。

朝我『巨門零零、急ぎて律令の如く成せ――』

だがクロノの放った弾丸は全て俺の右手にもたれている刀によって切り裂かれる。

朝我『千歳の儔』
——
小烏丸天国』
——
』

こがらすまるあまくに

俺の右手にもたれるは、漆黒の直刀。

クロノ「君が使うその武器・・・一体なんだ!？」

朝我「・・・魔力を変換して力に変える刀。ただ、それだけだ」
そう言って俺はクロノに切りかかる。

朝我「さあ、お話の時間だ!!!!!!」

クロノ「っ!？」

俺は一瞬にしてクロノの懐に入り込み、下から上に刀を振るう。

クロノ「くっ!!!!!!」

クロノは咄嗟に自分のデバイスを盾にするように構えて俺の一閃を防ぐ。

だが俺の力に耐え切れず、上空に飛ばされる。

朝我「ふっ!!!!!!」

俺は抜刀術の構えから一気に踏み込んでクロノに一撃を放つ。

朝我『草木一切、天帝のものなれば
いつくか鬼の棲^{すみ}なる
べき』一の閃』

クロノ「ぐあああああ!!!!!!」

一閃はクロノに直撃し、地面に真っ逆さまに落下していく。

俺は追撃をかけるため、勢い良くクロノに向かって落下する。

朝我「よくも……フェイトを傷つけてくれたな……その罪は、とても重い!!!!!!」

そう言って俺は刀に魔力を込める。

止めをさすために。

——『止めてください!』

朝我・クロノ「!？」

だが、俺の目の前に一本の矢は放たれた。

朝我「なっ——!？」

俺は驚く。

——『兄ちゃん！そこまなのだ！！！！』

朝我「何で……」

なんで……ここにいるんだ！？

黒く長い髪に、薙刀を持つ少女と、赤い髪に赤いマフラーをして蛇矛を持つ子供。

そして――

――『もう、十分ですよ』

ピンク色の長い髪をし、一本の剣を持つ少女。

朝我「桃香……愛紗……鈴々」

3人と、3人を中心に4人の女達と、一人の男性が――そこに
いた。

助ける理由 助けたい理由 後編（後書き）

はい。とうとう恋姫のあの方々登場です。

蜀の登場ですが、その他キャラは出る予定です。

赤い夜・・・これは基本的に11eyesが元ネタですが、これは時間軸が存在しない朝我零専用フィールドであるだけです。

ジュエルシードをはじめとするロストログアはこのフィールドでは存在できないので今回はクロノとお話用に発動しました。

次回は何故蜀の方々が赤い夜に入れたかを説明します。

管理局と一つの決断（前書き）

今回、新オリキャラ登場します！

あと前回の宣言通り、色々説明します。

管理局と一つの決断

朝我 Side

朝我「なんで・・・皆が」

クロノ「誰だ君たちは!？」

その質問に赤が混じった様な黒い色の髪の少年が答える。

夜我「俺は『よるがれい夜我零』。そして引き連れたは名高い武将の血族。『蜀』の武将の血族の者を連れて、我が戦友の戦に加勢しに参った」
そう言って夜我は俺を見て、俺に言う。

夜我「もう、そこまで良いだろう?これ以上は、ただの暴力だ」

朝我「・・・」

俺は頭が冷め、刀を魔法陣の中に納めた。

朝我『――解除――』

そう言うと、赤い夜はガラスが砕け散る様に壊れ、元の世界に戻っ

た。

クロノ「っ・・・戻ったのか」

なのは「朝我さん!!!!!!」

なのはが俺を呼ぶ。

フェイトが居ないところを見ると、アルフが連れて逃げたんだな。

朝我「なのは、俺は大丈夫だ。さて・・・」

そして俺は夜我のもとに向い、夜我と話しを始める。

朝我「何故、俺のいるここに来た？」

夜我「・・・」

夜我はなのはを一度見てから俺を見直して話しを始める。

夜我「お前が失った者を考えれば、お前が何をするかくらい・・・分かるに決まってるだろ」

朝我「・・・ごめん」

素直に謝った。勝手に消えてしまった事を。

夜我「謝るのは俺じゃなくて、桃香達じゃないのか？」

朝我「そうだな」

そう言って俺は桃香達の前に立って、謝った。

朝我「ごめん。勝手にいなくなってる」

桃香「・・・」

すると桃香はゆっくりと俺のもとに近づく。

俺は、叩かれるのだと思った。

覚悟はしていた。

だけど・・・

桃香「朝我さん!!」

朝我「え・・・」

桃香は、俺に抱きついてきた。

俺の胸に顔を埋め、泣きながら話す。

桃香「・・・心配、したんですから・・・」

朝我「桃香・・・」

俺は反省の意味も込めて、桃香を抱きしめて、頭を撫でながら言った。

朝我「ごめん。桃香」

桃香「・・・無事で、良かったです」

愛紗達は俺と桃香の光景を見て、安心したように微笑む。

なのは「あの・・・朝我さん」

朝我「ん？」

なのはが恐る恐る近づいて俺に質問する。

なのは「その人達は？」

朝我「・・・」

あ・・・どう説明するべきなんだろう？

未来から来たって言う訳にもいかないしな・・・

夜我も同じ事で悩んでいる顔をしている。

クロノ「皆、その話は後にして、そろそろ僕の話しを聞いてもらおうか」

お、ナイスタイミングでクロノが出た。

朝我「そうだな。取り敢えず、お前らの話を聞いておこう」

クロノ「聞きたい事は沢山あるが、詳しいことは僕たちのもとで話しをしてもらいたい」

ということは、管理局の戦艦にでも乗るのか・・・

????「皆さん。どうも」

全員「「!?!?!」」

突如、クロノの隣にモニターが現れ、そこから緑色の長い髪をした女性が姿を現した。

なのは「だ、誰？」

夜我「あの人は・・・」

朝我「ああ。リンディ・ハラウンだな」

そう言うとクロノは驚いた様子で俺を見る。

クロノ「君たち、艦長を知ってるのか!?!」

朝我「知ってるよ。俺達は・・・な」

夜我「・・・」

そう答えて、リンディは話しを進める。

リンディ「自己紹介の必要は無さそうね。では、早速私達の戦艦『アースラ』に来てもらいます」

朝我「構いません。ですが、この人数ですが・・・そちらは大丈夫ですか？」

リンディ「心配はいりません。こちらは広いですから」

なら安心して入れるかな。

朝我「分かりました。では今からそちらに向かいます」

リンディ「ええ。では」

そう言ってモニターは消えた。

クロノ「じゃ、着いてきてくれ」

朝我「ああ」

そう言って俺達はクロノに続く。

そして俺達は場所が変わり、とても広い空間に送られ、歩き出すクロノの後についていく。

なのは「ここは？」

朝我「時空管理局の次元航行船の中だ。乗るのは久しぶりだな」

なのは「??????」

夜我「朝我、なのはが何も理解出来てないようだが？」

朝我「え?・・・あ」

そうだった、この時代のなのは魔法に入ったばかりだったな。

いきなり時空管理局やら次元飛行船とか言われて理解できる小学3年生もいないか・・・

朝我「ごめん、取り敢えず説明はユーノと一緒に説明させてもらおうよ」

そう言うときユーノは俺の頭の上に乗っかって説明を始める。

ユーノ「えっと・・・簡単に言うと、いくつもある『次元世界』を自由に移動する為の『船』だよ」

なのは「・・・」

あ、なのはがフリーズした・・・

鈴々「動物が喋ったのだ!?!」

とか考えてると鈴々がユーノに興味を示したようだ。

朝我「あゝ・・・悪い、ここからはユーノの代わりに俺と夜我で説明するか」

そう言うとき俺はユーノを掴んで鈴々に渡した。

鈴々「わー！とっても可愛いのだ！！」

翠「ホントだ、可愛いな！」

一本に結んだ茶髪の少女『翠』もそう言ってユーノに興味を示していた。

残りのメンバーは俺と夜我の話しに集中しているようだ。

朝我「そんじゃなのは。取り敢えず説明の続きだけど、『世界はひとつじゃない』って知ってるか？」

なのは「え・・・うん、うん。星がいっぱいあるから・・・何となく」

なるほどね、火星とか彗星とかそういうので理解したのか。

夜我「星を世界と例えて説明すれば、この戦艦はその星全てに干渉出来るって事なんだが、それで理解できるか？」

なのは「うん、うん、なんとなく・・・」

俺と夜我はなのはの反応に苦笑いしながら言う。

朝我「まあ今は全てを理解しなくてもいい」

夜我「9歳には早すぎる話だったからな」

そう言うとなのはは不満そうな顔をしながら歩く。

まあいつかわかるから・・・今は悩んで欲しいな。

星「それで、主」

俺を主と呼ぶ青い髪に白い服を着る少女は『星』

朝我「ん？」

星「そちらのお子様は、主の娘ですか？」

朝我「は？」

意味不明だ。俺の娘がなのは？ありえん。

朝我「俺は19歳だ。なのはは9歳。10歳で俺が子供を作るわけないだろ」

星「冗談です」

ですよね。星はよくR-18レベルの会話をしだしそうになるから困ったものだ。

クロノ「BJは解除しても良いぞ？」

なのは「あ、はい」

そう言うとなのはは私服へと姿を戻した。

クロノ「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

ユーノ「ああ、そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

というとユーノは鈴々と翠の手から離れて地面に着地すると緑色の光に包まれた。

そして光から現れたのは金髪の少年だった。

ユーノ「二人にこの姿見せるの、久しぶりになるのかな」

「え……ええええええ！?!?!?!?!?!?!」

朝我「五月蠅い」

夜我「驚きすぎだ」

なのはがオーバーリアクションをとる。

ユ一ノ「あれ？なののは……初めてだったけ？」

なのは「は、初めてだよ……！」

朝我・夜我「ハア……」

ちゃんと説明しとけよ。そして覚えてろよと心の底から思い、溜息をつく俺と夜我だった。

鈴々「動物が人になったのだ！」

翠「へえ、そんなことも出来るんだな」

桃香「わ、私にはさっぱりなんですけど・・・（――；）」

3人も驚いているが、星と愛紗は『おお』と言うだけで特になにもない。

他の彼女達も驚いている様子だな。

クロノ「君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているので、出来れば早めに話を聞きたいんだが」

なのは「ご、ごめんなさい」

朝我「そうだな。悪かった」

そう言って俺達は再び歩き出す。

朝我「というか、紫苑と朱里はここに来てても大丈夫なのか？」

あと二人、紫色の髪で俺たちにとっては母親の様な存在の人が『紫苑』

鈴々と同じくらいの小柄の身長で金髪の髪に帽子をかぶった少女が『朱里』

紫苑「ええ。私達は問題ないですよ」

朱里「ここに来る人達は、それぞれ準備を整えてから来ましたから」

朝我「・・・そうか」

結局、俺のせいで皆を巻き込んでしまうことになったな。

朝我「・・・悪い。責任は、きっちり取るからな」

紫苑「それは、お体ででしょうか？」

朱里「はわわ！！そ、そんなにやこと！！！」

朝我「紫苑。朱里が慌ててるぞ」

そう言って俺は朱里と紫苑から逃げた。

クロノ「艦長、連れてきました」

そして俺達はリンディのもとに行く。

なのは「へ・・・」

夜我「あ……」

朝我「こ、これは……」

全員絶句した。

はつきり言うと、かなりシュールな光景が広がっていた。

アースラとい戦艦は洋式。

靴を履いたまま中を歩くし、壁も床も金属製。

だがこの部屋は壁際に数々の盆栽が飾られ、床には座敷が敷かれる上に茶道の道具一式が揃い、あげくの果てには鹿威しまで置いてあった。

愛紗「和なのは分かるのですが……これは……」

桃香「これはこれで凄いね……あはは……」

桃香、無理に笑う必要はないぞ。

星「まあ、人それぞれと言うことで……」

いや、無理に正当化させる必要もないって。

リンディ「お疲れ様。皆様どうぞどうぞ、楽にして」

朝我「あ……はい……」

なのは「失礼します・・・」

夜我「ああ・・・」

ユーノ「はい・・・」

俺たちは恐る恐る座る。

朝我「桃香達は少しここで待っていてくれ」

桃香「はい」

愛紗「分かりました」

そう言って俺たち4人がリンディさんのもとに向かう。

リンディ「初めましてね。私はこの次元航行船アースラの艦長をしています。自己紹介はそれくらいでいいわね」

そう言っでリンディが頭を下げ、礼儀正しく挨拶する。

なのは「えと、高町なのはです」

ユーノ「ユーノ・スクライアです」

朝我「朝我零。よろしく」

夜我「夜我零だ」

リンディ「そう、それじゃなのはさんにユーノ君に朝我君と夜我君。

詳しい事情、聞かせて貰える？」

朝我「……始まりはきつと、俺が初めてユーノに出会った所からだろうな」

そう言って俺が全てを話した。

ジュエルシードの話を聞いてリンディは納得したようすで話す。

リンディ「なるほど。貴方がジュエルシードを見つけたんですね？」

ユーノ「はい。僕の一族は発掘などが主な活動だったのでそれで、僕が責任持って回収しよう」と

リンディ「立派ね」

クロノ「だが、無謀でもある」

クロノのバツサリとした言葉に、俺はムカツキを覚える。

朝我「良いだろ、無謀で。お前みたいに安全な方向にしか物事を考えられないチキンよりは、自分の責任はしっかりと取ろうとしたユーノの方が、カッコイイに決まってる」

そう言うとユーノは恥ずかしいのか頬をポリポリとかいてクロノは

チキンと言われた事に驚いていた。

夜我「まあだが、管理局も人手不足。無駄な犠牲者は出したくないから・・・こんな軟弱な思考になったのだろうか」

夜我の言葉に俺達は納得したように頷く。

リンディ「それは否定できないわね・・・」

そしてなのはがとうとう質問を俺達にしてくる。

なのは「あの・・・そもそもロストログアって何なんですか？」

朝我・ユーノ・夜我「「・・・え？」」「」

なのは「？」

朝我「な・・・なのは。お前・・・そんなことも知らないですつとあんな激しい戦いをしてきたのか？」

なのは「う、うん」

夜我「・・・これはこれで才能だな」

ユーノ「そう、だね」

朝我「（ハ、）ハア・・・」

てなわけで再びなのはに説明。

夜我「遺失世界の遺産って俺たちはそう言えばわかるんだけど、それだけじゃなのはに分らないよな・・・」

朝我「次元空間の中には、いくつもの世界があってな、それぞれに生まれて育っていく世界、その中に、極稀に進化し過ぎる世界が存在する。医学の技術が進歩しすぎた世界。や魔法の技術が進歩しすぎた世界。進化し過ぎたそれらが、自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された、失われた世界の危険な技術の遺産。それらを総称して、ロストログアと呼ぶ」

なのは「・・・」

朝我「ま、簡単に言えばその世界に存在するその『世界の技術の結晶』俺たち魔法の住人が生み出した技術の結晶と言えば『デバイス』とかかな？」

なのは「なるほど。分かった気がします」

朝我「ああ。まあ最初はそれでいいさ」

説明が終わった所でリンディと話を続ける。

リンディ「あなた達が探しているロストログア、ジュエルシードは次元干渉型のエネルギーの結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さ

え巻き起こす危険物」

朝我「それを証明するかのように、この前次元震が発生した」

リンディ「ええ。ですからこれよりロストログア、ジュエルシードの回収については、時空管理局が全権を持ちます」

朝我「な・・・！？」

夜我「ほう・・・」

なのは・ユーノ「え・・・」

なのはとユーノは驚き、俺と夜我は『そう来たか・・・』と思った。

クロノ「今回のことは忘れ、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

なのは「で、でも・・・」

続けて言ったクロノに必死に食い下がるなのは。

クロノ「これはランクSS+の危険なロストログア、しかも、次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入して貰うレベルの話じゃない」

なのは「・・・」

なのははようやく、自分が関わっている事件の重大さに気づいたみたいだな。

・・・だけど。

朝我「今頃引き下がってたのは、納得いかないな」

そう言って俺は立ち上がって出口に向かって歩き出す。

朝我「俺は“俺の救いたい人の為”に戦う。ジュエルシールドは、そのきっかけでしかない」

そう言って俺は桃香達を連れて部屋を後にする。

夜我 Side

夜我「ま、あいつはそう決断したんだ」

あいつが部屋を出て、残されたオレらが話しを進める。

リンディ「彼に・・・なにがあったの？」

クロノ「あの瞳め・・・誰かを失った人の瞳をしていたが・・・」

そうか、この人たちも、失っているんだったな。

夜我「あいつは、好きな人を失った。それも・・・何人も」

なのは「え・・・」

クロノ「なるほど・・・」

リンディ「詳しく聞かせてもらえるかしら？」

夜我「断る。“いま現在”全てを話せば、あいつは全てを・・・また失う事になるかもしれないからな」

そう言って俺もその部屋から出ていこうとする。

夜我「俺は朝我の戦友として、あいつと共に戦う。邪魔をすれば――
――斬る」

そう言い残して、俺は部屋を後にする。

夜我「そうだ。俺はもう二度と、あいつの――あの時の様な姿を――見たくないから」

そう言って俺は朝我達と、また歩き出す。

3人の進む道

なのは Side

ユーノ「だから僕もなのはも、そちらに協力させて頂きたいと」

リンディ「協力・・・ねえ」

私とユーノ君はリンディさんにそう言って、説明をする。

ユーノ「僕はともかく、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収・あの子達との戦闘。どちらにしてもそちらとしては便利に使えるはずです」

ユーノ君がリンディさんを納得させる話を続ける。

リンディ「ふむ。なかなか考えてますね。それならまあ、いいでしょう」

クロノ「か、母さ・・・艦長!!」

何とか承諾を得ることができました。

リンディ「手伝って貰いましょう。こちらとしても、切り札は温存したいもの。ね? “クロノ執務官”」

そう言うときクロノ君は渋々納得してくれました。

リンディ「その代わり、条件は二つよ。両名共、身柄を一時時空管理局の預かりとすること・指示を必ず守ること」

なのは「わかりました」

そして通信は切れました。

リンディ Side

リンディ「それにしても、彼はいなかったわね」

クロノ「はい」

朝我零・・・彼の瞳は、本当に悲しそうだった。

一体、どんな辛い世界を生きてきたのだろうか？

きっとそれは、私達にはとても重い世界。

こんな私たちも予想できない・・・そんな世界。

リンディ「もしかしたらなのはさん達と共に事件を解決させれば、彼の真実に近づけるんじゃないかしら？」

クロノ「分かりません。ですが・・・」

クロノも分かっているみたいね。

リンディ「ええ。この事件、ただのロストログアを巡った戦いではない」

手遅れになる前に、手を打たないと・・・

フェイト Side

アルフ「ダメだよ・・・時空管理局まで出て来たんじゃない、もうどうにもならないよ！逃げようよ、二人でどっかにさ？」

アルフから、そんな弱気な発言が出る。

フェイト「それは・・・ダメだよ」

傷付いた私の治療を終えたアルフ。

アルフ「だって、雑魚クラスならともかく・・・あいつは一流の魔導師だ！！！！本気で捜査されたら、ここだっていつ特定される。あ

の鬼婆だって、訳わかんないことばかり言う上、フェイトに酷いことばかりする」

フェイト「母さんのこと、悪く言わないで」

アルフの本音だと思うけど、いくらアルフでも許せない。

アルフ「言うよ!!!だって・・・だってあたしは、フェイトのことが心配。フェイトが悲しんでるとあたしも悲しいし、フェイトが泣いてると、あたしも泣けてくるんだ!!!フェイトが泣くのも悲しむのも、あたしは嫌なんだよ!!!!!!」

私、そんなに心配かけてたんだ・・・

フェイト「・・・大丈夫だよ。アルフが辛いなら私、もう泣かないし、悲しまないから」

アルフ「っ!」

そう言うのと、アルフは苦しそうに言う。

アルフ「あたしは、フェイトに幸せに笑って欲しいだけなのに! ! ! ! !」

そんなアルフの想いが、私は嬉しかった。

フェイト「ありがとうアルフ。でもね?私、母さんの願いを叶えてあげたいの。母さんの為だけじゃない。きっと、自分の為に――
――。だから、あと少し、最後までもう少しだから、私と一緒に頑張ってくれる?」

アルフ「・・・うん」

フェイト「ありがとう。アルフ」

そうだ。あと・・・少し。

あと少しで、母さんの願いが叶うんだ。

その為なら、例え誰が敵でも・・・負けられない。

朝我 Side

朝我「はああああ!!!!!!」

愛紗「はああああ!!!!!!」

俺と愛紗は赤い夜の中で鍛錬に明け暮れていた。

ジュエルシードの反応が無いため、暇なのだ。

俺は雷切をだし、愛紗は『青龍偃月刀』と呼ばれる薙刀を出して戦っていた。

朝我「はあ、はあ・・・」

愛紗「やはり、流石ですね」

朝我「いや、まだまだだよ」

そう言って汗を右腕で拭いながら再び刀を構える。

桃香「二人ともう!頑張れう!」

鈴々「お兄ちゃん!愛紗!頑張れうなのだう!!!!!!」

朱里「はわわ!ふ、二人とも、気をつけてくださいう!!!!!!」

3人の応援をよそに、俺と愛紗は刃をぶつけ合う。

愛紗「はあああああ！！！！」

朝我「せいっ！！！！」

薙刀の刃先と雷切の剣先がぶつかり合い、大きな衝撃を出す。

そして少し距離をとって、武器を構える。

愛紗「ご主人様。本日はこの辺でよろしいかと」

そう言って愛紗は武器を納める。

朝我「そうだな」

そう言って俺も刀を納めた。

そして赤い夜も解除した。

朝我「さて・・・と。夜我はどうした？」

桃香「あの青い宝石探しに行きましたよ？」

朝我「ジュエルシードな。いい加減覚えろ」

桃香「え・・・えっとお・・・じゅ、ジュエルペ○ト？」

朝我・愛紗・鈴々・朱里「「「う・います・うのだ「違」」」」

別のタイトル出たぞ!?

桃香「わ、分かんないもん〜（ ; ω ; ）」

朝我「（ ㄥ ） ハア…」

変わってないな・・・この天然な性格。

夜我「悪い。遅くなった」

朝我「お、帰ってきたか」

噂をすればなんとやらと言わんばかりに夜我が戻ってきた。

朝我「どこまで行ってたんだ？」

夜我「ジュエルシードを探しがてら、泊まれる家を探してたんだ」

朝我「おお・・・見つかったか？」

夜我「ああ。既に翠達は中で荷物整理してる。ちょっと手伝ってくれ」

おいおい、どんだけ荷物あるんだよ・・・

朝我「分かった。愛紗、鈴々！行くぞ！」

愛紗「はい！」

鈴々「分かったのだ!!」

そう言って俺と愛紗と鈴々と夜我は知り出す。

桃香「いってらっしゃい……って、私と朱里ちゃんはど
うするの!?!」

朝我「二人も走れ!」

朱里「う、運動は苦手です!!」

桃香「ちよつと待ってえええ、(ㇿ ;)ノ」

そう言って俺達は新たな住処に移動するのだった。

その間にも、ジュエルシード事件は動き出す。

この先、更に激しい戦いが・・・俺たちを待っている。

純白の一閃

朝我 Side

朱里「王手です」

朝我「負けた・・・これで0勝10敗・・・orz」

新たな家に住み、翌日、夜我と愛紗と星の3人がジュエルシードを探している間、俺と朱里は将棋をしていた。

主人公ともあろう俺が一回も勝てないと言うのはどういうことだ？

朱里「ご主人様は『先の先を読む』『裏の裏をかく』と言う事が出来ていませんから」

朝我「裏の裏って表だぞ？」

朱里「ですから、裏と言う非常識だけに囚われず、表と言う常識もしっかりと見る必要があるということです」

なるほどな。そう言うのも大切か・・・

朝我「よし。もう一戦だ」

朱里「さ、流石に少し休みましょうよ・・・」

朝我「え・・・あ、そうか」

何だかんだで10回も戦ってれば疲れるよな。

朝我「ごめんごめん。それじゃ休憩だな」

そう言って俺は将棋一式を片付ける。

紫苑「二人とも、お茶ですよ」

その間に紫苑は俺と朱里がいたテーブルの上に湯のみを持ってきた。中にはあったかいお茶が入っている。

朱里「ありがとうございます」

朝我「ありがとう、紫苑」

将棋一式を片付けた後、席に戻った俺は紫苑が煎れたお茶を飲む。

朝我「ふう・・・和む・・・」

だが、お茶を飲むと思い出すのは・・・リンディが口に使っていたどう考えても甘ったるいであろうお茶っぽい飲み物。

朝我「・・・」

ふと、テーブルの端に置かれていた角砂糖の小さな山。

朝我「（入れたら――どんな味がするんだ？）」

試したい欲求が俺の中で溢れていた。

朝我「・・・」

そして俺はゆっくりと右手を砂糖に伸ばす。

紫苑「止めなさい」

朝我「ごめんなさい」

俺は即座に席に戻る。

だって紫苑がゼロ距離で弓の矢を俺に向けるから・・・

朱里「ご主人様・・・それはちよつとどうかと・・・」

朝我「はい。ほんとごめんなさい」

素直に謝ってお茶を啜る。

——すると俺の右ポケットが振動しだす。

朝我「電話だ・・・えと・・・夜我か」

黒いスライド式の携帯を取り出して電話に出る。

朝我「もしもし？夜我、どうした？」

夜我「いい情報だ。ジュエルシードのありかが分かった。場所は既にメールで送ってあるからそこに来てくれ。俺達は先に行ってる」

朝我「ありがとう。今すぐ向かう」

そう言って俺は電話を切って朱里と紫苑に言う。

朝我「二人とも、今ジュエルシードが見つかった。今から向かうぞ」

朱里・紫苑「はい」

そう言って俺達は家を出る。

夜我 Side

俺たちは森の中にある小さな湖に辿り着いた。

湖に現れたのは超巨大な鰻。

湖の水を全身に纏っていて、その姿は水の龍にも見える。

夜我「あれ・・・多分今日の夕食だな」

愛紗「本当ですか!？」

星「あれでひれ酒でも飲むのもありか・・・」

そんなこんなで俺達は武器をだす。

夜我「愛紗、星。行くぞ!」

愛紗「はい!」

星「行くぞ!!」

そう言って愛紗と星は左右から攻撃を開始する。

愛紗・星「はああああああ!!!!」

槍と薙刀が左右から降り下ろされる。

だがそれは、水を切り裂くだけでまたもとに戻ってしまった。

愛紗「何!?!」

星「ふむ・・・水が盾にもなっているのか・・・」

二人は奴から少し離れる。

夜我「水を纏って時点で奴は完全防御が完成したとなると・・・」

雷で感電させるか、炎で蒸発させるかの二つか・・・

両者ともにそれは朝我しか出来ない仕事か・・・

・・・いや、他にも手はあるか。

夜我「二人とも、少し下がってて」

愛紗「・・・分かりました」

星「・・・」

二人は俺の後ろに下がる。

そして俺は右手に緑色の小さな魔法陣を出して唱える。

夜我『かぎ牡籥とぎかけ闇す総闇の門』

朝我と同じ祝詞。

夜我『七惑七星が招きたる、
由来^{ゆらいそふう}艸阜^{そうふう}の勢——』

すると俺の背後に白い巫女服を着た女性が現れる。

夜我『月下零零、
切らずして月夜に舞い上がれ』

そして俺は純白の柄を掴む。

夜我『千歳の儔——姫鶴一文字——』

俺の手には、白い鞘に白い柄の刀があった。

そして俺の背後にまるで霊の様に透けた美女は俺に言う。

？「夜我様、本日はどのような加護を求めますか？」

夜我「“鶴”俺に飛翔の翼と切り裂く力を」

鶴と呼ばれた白く長い神をした巫女は両手を広げ、天に唱える。

鶴『我が聖約の主に、飛翔の一閃を――』

そう言うと、俺の全身を純白の光が包み込む。

鶴「では夜我様。ご武運を」

そう言って鶴は光に包まれ、刀に吸い込まれる。

夜我「さて……いざっ！――！！」

俺は刀を両手で持って力強く踏み込み、前方に突っ込む。

そして純白の光を刃に乗せて、降りおろす。

夜我

『
—

『白^{びやくいちもんじ}
—文字』

—
』

そして純白に染まる斬撃は雲まで伸び、その一閃は真っ直ぐに降りおろされ、水を纏った鰻を一刀両断にする。

夜我「ふう・・・これで終わりか？」

愛紗「流石ですね」

星「うむ。問題ない」

そう言って俺たちは集まり、斬り裂いた後を見る。

夜我「・・・な!？」

だが、切り裂かれた後、二つに分かれて再び水の鰻に戻る。

愛紗「2体に増えた!?!」

星「何故だ!?!」

夜我「・・・まさか、ジュエルシードの影響を受けた鰻は複数いるのか!?!」

それが集合して一体の巨大な鰻へとなった・・・

夜我「ったく、3人の同時攻撃でまた別れたら厄介だな・・・」

やっぱり・・・あいつが必要なのか・・・

鰻『■■■■■■~~~~!!!!!!』

鰻は全身に纏った水を高圧水流にして俺たちに放った。

夜我「まずい!!!!!!」

そう言って俺は二人の前に立って、抜刀術の構えをとる。

夜我『――『白龍・一閃』――!!!!』

鞘から出ていく瞬間、膨大な純白の光が放たれる。

その一閃は、相手の放った水流とぶつかり合う。

夜我「ぐっ!!・・・ジュエルシードの力か・・・」

普通の高圧水流の比じゃないレベルの威力だ。

流石ジュエルシード・・・ロストログアと呼ばれるだけの危険度だ・
・

愛紗「夜我殿!!!!」

星「大丈夫か!?!」

夜我「ぐ・・・ちょっときつい・・・」

そう言うと二人は俺の背中を支えてくれた。

夜我「・・・ありがとう」

そう言って俺は右手の刀と、左手の鞘にも魔力を込め、2刀流にして放つ。

夜我「はあああああ!!!!!!!!!!」

そしてなんとか相手の攻撃を切り裂いた。

夜我「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

愛紗「なんて力・・・」

星「予想以上だな・・・」

確かにそうだ。

まさかここまで押されるなんて・・・やっぱり相性なのか・・・

夜我「ちっ・・・」

俺は立ち上がり、再び刀を構える。

まだ、戦いは始まったばかりだ。

そして純白の光を刃に纏わせ、刀を構える。

——『悪い！遅くなった！！』

夜我「・・・やっと来たか・・・」

聞こえる、戦友の声。

朝我「すまない。だが、もうどうにかなるさ」

夜我「ふっ・・・そうみたいだな」

朝我は朱里を連れてきてる。

朱里「私が、皆さんを勝たせます」

助かる一言だ。

ま、朱里の戦略があれば・・・行けるな。

朱里「夜我さん、敵の情報を教えてください」

夜我「ああ。奴は数体の鰻がジュエルシードに飲み込まれた成れの果てだ。湖の水全てを纏っている上に、切れば増える」

朱里「なるほど・・・」

朱里は目を瞑って、考える。

朱里「朝我さん。夜我さん。私が策を考えている間に時間を稼いでくれますか？」

夜我「もちろん」

朝我「任せろ、夜我・・・行くぞ！」

夜我「ああ！」

そう言って朝我は火車切広光を持って、俺と共に向かった。

朝我「紫苑！弓で援護してくれ！」

紫苑「はい！」

そう言って紫苑は矢を連続で放つ。

朝我「行くぞ・・・」

夜我「喰らえ・・・」

朝我『炎龍』
夜我『白龍』

そして俺は純白の一閃を。

朝我は炎の一閃を。

朝我・夜我　「――――」　「閃」――――！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！

同時に放たれた一閃は巨大な鰻をまっぷたつにする。

俺の切った奴は分裂してもとに戻る。

だが、朝我のは燃え尽きて焦げ散った。

朱里「・・・」

そして朱里は策が整ったのか、瞳を開け、俺と朝我に言う。

朱里「お二人とも、私の指示通りに動いてください」

そして――諸葛亮の血族、朱里の戦略が――俺たちに告げられる。

阿部 W 「やらないか？」
阿部 V 「やらないか？」
阿部 U 「やらないか？」
阿部 T 「やらないか？」
阿部 S 「やらないか？」
阿部 R 「やらないか？」
阿部 Q 「やらないか？」
阿部 P 「やらないか？」
阿部 O 「やらないか？」
阿部 M 「やらないか？」
阿部 N 「やらないか？」
阿部 L 「やらないか？」
阿部 K 「やらないか？」
阿部 G 「やらないか？」
阿部 I 「やらないか？」

阿部X 「やらないか？」

阿部Y 「やらないか？」

阿部Z 「やらないか？」

—— 阿部高和と戦っていた ——

朝我「ジュエルシードの影響で増えたんだ!!!!」

夜我「ジュエルシード怖いわ!!!!!!!!!!」

そんな事を言いながら俺達は刀を持って切り裂いて行く。

阿部A「あああ／／／／」

阿部B「も、もっとだあ／／／／」

朝我・夜我「「ぎゃあああああああああ！……！」」

別に触られてもいないのに精神的ダメージが多い。

朝我「――千鳥一閃――！！！」

夜我「――白一文字――！！！」

強力な一閃を同時に放つ。

阿部C「あ、ああああ／／／／／」

阿部D「す、すごく、良いです／／／／／」

朝我・夜我「「やめろおおおおお！……！！！」」

これの繰り返しだ。

ある日、朱里が本を読んでいて突然大量の鼻血を吹いて倒れていた。

夜我「なんの本を読んでたんだ？」

タイトル『阿部さんとハーレム、やらないか？』

夜我「・・・・・・・・・・」

朝我「？」

夜我が突如固まったのでその本のタイトルを読んだ。

タイトル『阿部さんとハーレム、やらないか？』

朝我「火車切広光!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そしてこの本は灰になりましたとき。

阿部「やらないか？」

朝我・夜我「やらんわ!!!!!!!!!!!!!!」
「」

番外編 ちょ……ちよつと待てえええええ!!!! (後書き)

月森 和樹先生から貰ったので使ってみました。

朝我・夜我 「「殺す気か!?!」」

相良 「朱里の夢じゃなかったら終わってたな」

I K A 「貰ったら使うのが俺のポリシーだ!!」

阿部 「やらないか?」

朝我・夜我・相良 「「また出たああああああ!!!!!!!!!!」」

勝利の裏に策あり（前書き）

今回は長いです。

更に新たな刀がまた登場。

・・・一体どれだけ刀あるんだお前ら・・・

勝利の裏に策あり

朝我 Side

朝我「朱里、俺たちはどうすればいい？」

俺達は朱里を護る様に円形に囲み、中心にいる朱里の策を聴いた。

朱里「この戦いで鍵を握るのは、朝我あしめじんさまです。ご主人様の炎の刀・・・あれで止めをさすしかありません」

朝我「分かった」

朱里「夜我さんは巨大な一撃で地面を削って敵を追い込んでください」

夜我「任せろ」

朱里「愛紗さんと星さんは朝我さんの一撃まで防衛してください」

愛紗「分かった！」

星「心得た」

朱里「紫苑さんは私の前で皆さんの援護をお願いします」

紫苑「ええ。分かったわ」

そして朱里は羽毛扇を持ち、言う。

朱里『では――始めてください！……！』

そう言って俺達は朱里の言った戦術どおりに動く。

朝我『――』

俺は火車切広光を右手で持ち、抜刀術の構えをとり、瞳を閉じて止まる。

朝我『我が災厄の焰、我求めしは裁きの焰なり――』

そして俺は焰を全身に纏わせ、唱え続ける。

夜我 Side

俺は走り出す。

そして新たな刀を呼び出す。

夜我『かぎ牡籥とんかけ闔す総闇の門』

2体の巨大鰻が放つ高圧水流を紙一重で避けながら唱える。

夜我『七惑七星が招きたる、由来^{ゆらいそふう}艸阜の勢——』

そして左手から現れる小さな魔法陣から徐々に柄の部分が出てくる。

夜我
『三我みつがれいれい零零、
夜を照らせし三日月となれ
』

微かに緑色が混ざった黒い柄が徐々に姿を現した。

夜我『千歳の儔——おおてんたみつよ大典太光世——』

そして2尺半程の長い刀が俺の右手に持たれる。

刀に魔力を込めると緑色の光が刀身を纏う。

夜我「・・・行くぞ!!」

俺は刃を地面に向けたまま走り出す。

刃は地面を切り裂き、その速度は徐々に増していく。

そして敵の周囲を高速移動して、相手の動きを止める。

夜我「今だ!! 星! 愛紗!!」

星・愛紗「はい!!!」

そう言って星と愛紗は敵の真上からまるで龍の様に突っ込んでくる。

愛紗



青龍



せいりゅう

星



子龍



しりゅう

愛紗・星

『

』

――

『逆鱗刃』
いびきりんじん

――

』

』

二頭の龍は巨大な敵を喰らい、そのまま一つに纏めて天に上げる。

そして龍は姿を消し、俺が発生させた竜巻に飲まれた敵は舞い上がり、朝我の丁度真上に落下していくのだった。

朝我 Side

夜我「――朝我……！」

仲間が、呼んでいる。

星「――主……！」

俺を、呼んでいる。

愛紗
「――ご主人様……！」

俺を、頼りにしている。

朱里「——ご主人様!!!!!!!!!!!!!!」

皆が、俺の為に作ってくれた勝利への戦^{みち}略を——

紫苑「――ご主人様……!!……!!……!!」

朝我
『
獄炎閃・裂斬極焰刃
』

刹那、焰の無数の斬撃が360°から一体に纏まった巨大な鰻を包み込んで、切り裂いた。

そして巨大な爆発が発生して、ジュエルシールドが二つ・・・刀を納める魔法陣の中に入った。

朝我「・・・」

火車切広光も納め、俺は皆に笑顔で言う。

朝我「終わりだ。皆、お疲れ！」

そう言って俺達は家に帰る。

俺には出来ない事がある。

頭が良くない俺の変わりに、戦略をたてて、その通りに動いてくれる人がいる。

だから俺は、俺の本領で戦えるんだ。

朝我・夜我「ほ、ほんとに夕飯が鰻づくし・・・」

この日から3日間、毎日鰻料理だったのは余談である。

勝利の裏に策あり（後書き）

『おおてんたみつよ
大典太光世』

積み重ねた死体の二体の胴体を切断し三体目の背骨で止まったといわれている刀。

柄は微かに緑色が混ざった黒。

2尺半程の長い刀。

魔力を込めると緑色の光に変化する。

この刀で発動させた技は『3回』までしか発動出来ず、3回発動すると刀は崩壊する。

ただし崩壊して24時間でもとに戻る。

キャラ設定 2

朝我 零

> i 3 6 4 3 4 — 3 6 1 8 <

1、刀

『火車切広光』

シンプルに炎・焰を発現する刀。

使用者の感情や魔力量によってその火力は変動する。

『雷切』

雷を発現させる刀。

遠距離・近距離のどちらにも対応しているため、よく使われる。

『小烏丸天国』

闇を発現させる刀。

刀の中で特に攻撃威力の高い刀となっている。

『蜻蛉切』

刃が濡れた様に、まるで鏡のようになってるのが特徴。

この刀身に写された人・物質・物体・気体・液体などの攻撃を『反射・転移・切り裂く』の3つが可能になる。

基本的にはカウンターに使用される刀。

夜我 零

基本的に容姿は朝我と変わらない。

ただし性格や声は全然違う。

1、刀

『姫鶴一文字』

白き刀。

発現した瞬間、『鶴』と呼ばれる巫女が現れ、夜我に求める加護を与える。

この加護を使うと『切られた者回復』なども可能になる。

ちなみに鶴は夜我に強い想いがあるらしい。

『大典太光世』

積み重ねた死体の二体の胴体を切断し三体目の背骨で止まったといわれている刀。

柄は微かに緑色が混ざった黒。

2尺半程の長い刀。

魔力を込めると緑色の光に変化する。

この刀で発動させた技は『3回』までしか発動出来ず、3回発動すると刀は崩壊する。

ただし崩壊して24時間でもとに戻る。

更におまけ情報。

桃香・愛紗・鈴々・朱里・星・紫苑・翠達は恋姫のキャラ達ですが、決して劉備達本人では無い。

その血族として生まれた者として扱っているのである意味オリキヤラ。

まあ二次創作なのでオリだろうが原だろうがどっちでも良いけどね。

たった一つの命だから

なのは Side

朝我さん達とは別にジュエルシードの搜索を初めて10日が経ちました。

私達が回収できたジュエルシードは2つ。

少ないけど、フェイトちゃんも朝我さんも集めていると言うことは、いつかきつと・・・一度に全て揃う日がくる。

フェイトちゃんやジュエルシードを探すべく、エイミィさんが搜索範囲を広げたり、クロノ君があちこち奔走して頑張ってくれているから、大丈夫だと思うけど。

ユーノ「大分数も減ってきたし、もしかしたらこの先見つけるのは結構長く掛かるかもね」

ユーノ君の話しに私は納得する。

私はジュエルシードの事やフェイトちゃんの事を考えると、ふとあの人の事が気になりました。

――『あいつは、好きな人を失った。それも・・・何人も』

夜我さんが言った、朝我さんの過去。

好きな人がいた事に私は驚いた。

誰なんだろうって、凄く気になる。

けれど、聞いちゃいけない。

だって、その人達を失ったんだもんね。

失いたくなかった人を失う辛さは、よくわかる。

それが多ければ多いほど、傷は大きくなるってことだって・・・分かる。

だから、今は聞かない。

今の私に、朝我さんの過去に触れる権利はないから。

けれど願うのは――あの人が少しでも安らげるようになれること。

今はまだ事件があるけど、事件が終わったら、ちゃんと話して・
・癒してあげたい。

私に出来る事は分からないけど・・・いつか、きっと――

『エマージェンシー!!』 搜索域の海上にて、大型の魔力反応を感じ!
知!』

そのアラートを聞いた私達は、すぐにブリッジに向かった。

ブリッジに向かった。

何か・・・嫌な予感がする。

朝我 Side

朝我「・・・ここも駄目か・・・」

俺は愛紗・鈴々・朱里・紫苑の4人を連れてジュエルシードの搜索を行っていた。

海鳴から少しずつ距離を離れるように搜索していた。

朱里「他の二つの勢力もジュエルシードを見つけている筈です。で

すから少ない数を見つけるのは難しい筈です」

朝我「だな。海鳴周辺だけでも広いと言うのに、残りわずかの物を見つけるのは簡単じゃないよな」

分かってるけど、やっぱり急かしてしまうのは・・・短気なのだろうか？

愛紗「短気は損気と言う言の葉があります。慎重に」

朝我「・・・そうだな。ありがとう、愛紗」

愛紗の言葉に俺は少し落ち着き、再び搜索を開始する。

紫苑「夜我様からの連絡はまだなのですか？」

朝我「ああ。1時間置きに連絡をって言っているからそろそろ来るかな・・・」

そう言って俺は携帯を取り出しておく。

俺と夜我は二手に別れての搜索。

夜我が無茶しないようにと、1時間置きに連絡しろと言っておいてる。

鈴々「お兄ちゃんは心配性なのだ」

朝我「夜我が俺に心配かけすぎるだけだ」

そう言うとは（・▽・）ニヤニヤしながら俺を見て歩き出す。

朝我「な・・・なんだよ？」

愛紗「いえ、別に♪」

鈴々「なんでもないのだ♪」

朝我「い、いや、なんかあるだろ!？」

紫苑「さて、なんのことでしょうね？」

朱里「なんでしょう？」

そう言って5人は先に進む。

朝我「ちょ、ちょっと!置いてくなって!」

そう言って俺は慌てて追いかけると、携帯が小刻みに振動した。

朝我「!？」

俺はすぐに開いて電話に出た。

朝我「もしもし?夜我か!？」

と思ったが、声は男ではなく、女の子の声だった。

なのは《もしもし朝我さん！？なのはです！》

朝我「なのは・・・どうしたんだ？」

なのは《今すぐアースラに来てもらって良いですか！？大変なんです！！》

朝我「・・・分かった」

そう言って俺は電話を切って、すぐにアースラに向かった。

そしてアースラにたどり着いた俺達はすぐさまブリッジに向かう。

そこにつくと巨大なモニターを全員が見ていた。

朝我「なのは！ユーノ！」

なのは「朝我さん！」

ユーノ「朝我！」

そう言って二人が俺の隣に来る。

俺はそのままリンディとクロノのもとに来る。

クロノ「来たか」

リンディ「貴方がたを呼んだのは他でもないわ。ジュエルシードよ。それも・・・強大な」

そう言ってリンディとクロノはモニターに目を向けた。

俺達もモニターを見る。

朝我「なっ!?!?・・・こ・・・これ・・・」

俺達は目を疑う映像を見た。

フェイト「――アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる
天神よ、今導きのもと降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼ
ル――」

海鳴市の沖合から離れた場所でフェイトが足元に極大サイズの魔法陣を展開し、バルディッシュを手には詠唱を始めていた。

雷が魔法陣を這い回り、黒雲が雨を降らせ始める。

アルフ「（ジュエルシードは多分海の中。だから、海に電気の魔力流を叩き込んで、強制発動させて位置を特定する。そのプランは間違っていないけど・・・でも・・・でも・・・）」

フェイト「――撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス――」

詠唱を終えると同時、宙に九個の巨大な黄色い球体が浮かぶ。

そこに一つ目が開き、放たれた雷が輪の用に連なり、魔力を集束させていく。

フェイト「はあああああああああ！！」

フェイトがバルディッシュを魔法陣の中心に突き入れた瞬間、雷が弾け、轟雷が海に降り注ぐ。

フェイト「はあっ、はあっ、はあ・・・見付けた!!!」

撃ち込まれた巨大な魔力に呼応し、ジュエルシードが発言した。

青白く輝く竜巻が六個発生し、大気を掻き乱す。

アルフ「（これだけの魔力を撃ち込んで、更に全てを封印するなんて。こんなの、フェイトの魔力でも、絶対に限界を越えてる!!!）」

フェイト「空間結界とサポートをお願い!!!」

アルフ「ああ、任せといて!!!」

アルフ「（だからこそ誰が来ようが、何が起きようが、あたしが絶対守ってみせる）」

六個の竜巻が収束し、巨大な一つの竜巻へと姿を変える。

フェイト「行くよバルディッシュ!!! 頑張ろう!!!」

そう言ったフェイトは一人で竜巻に向かっていった。

朝我「あの馬鹿・・・」

リンディ「なんとも呆れた無茶を・・・」

ブリッジに飛び込むと同時に、迎えたのはリンディのそんな声だった。

モニターに映された竜巻と巨大な魔力の気配、そしてフェイトを見た瞬間、俺は全てを理解した。

あんな無茶、生きて帰るつもりなんて無いってやつがすることだ！！

クロノ「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは、個人が出せる魔力の限界を越えている」

朱里「あんなに無茶をするなんて・・・正気の沙汰ではありません」

クロノや朱里の言うとおりだ。

冷静な判断・・・と言うには程遠く、作戦・・・と言う言葉では納得できないほどの無謀さ。

あのままじゃ・・・フェイトは・・・

なのは「私達がすぐに現場に!!」

朝我「ああ!」

そう言っただけ俺達は移動しようとした。

クロノ「その必要はないよ。自滅しなくても、力を使い果たした所で叩けばいい」

移動しようとした俺たちに、クロノが非情に告げた。

なのは「でも!!!!!!」

クロノ「今の内に捕獲の準備を!」

そう言うのと艦内の者が準備を始めようとした。

朝我『——牡籥かけ闔す総光の門——七惑七星が招きたる、
由来艸阜の勢——文曲零零、急ぎて律令の如く成せ——千
歳の壽——雷切!!!!!!!!!!』

全員「「「「「!」」」」」

その瞬間、俺の右手に持たれる刀を中心に放電された蒼き雷が機器
に当たるか当たらないかの位置で止まっていた。

クロノ「何!?!——っ!?!」

更に愛紗と鈴々がクロノの首に刃を向ける。

リンディ「……」

リンディの背後は、紫苑の矢が。

朝我「抵抗はやめろ。さもなくば、この戦艦と艦長及び執務官の命は無い!!!!」

なのは「朝我さん!?!」

朝我「なのは、フェイトの所に行ってくれ。俺も後で向かう」

なのは「……」

なのはは心配そうな表情で俺を見る。

俺はそんななのはを安心させるために、ユーノに言う。

朝我「ユーノ、なのはを——頼んだ」

ユーノ「……分かった!」

俺の想いを悟ってくれたのか、ユーノは真剣な表情で俺にそう言い返した。

朝我「・・・なのは!!」

なのは「？」

ユーノと共に転送ポートの上に立つなのはに言った。

朝我「なのは、お前の想いを・・・フェイトに伝えてあげろ。お前の想いは、フェイトを・・・変える筈だから!!」

なのは「・・・うん!」

そう言って、なのはとユーノは向かった。

朝我「頼んだ。後で・・・向かうから」

そう言って俺はクロノ達を睨みながら言う。

朝我「お前らは、あいつの姿を見て・・・何とも思わないのか?」

そう聞くと、リンディが答える。

リンディ「これが一番の選択よ。そして、これが私達管理局の決断であって・・・どんなに残酷でも、これが現実よ」

朝我「これが現実・・・か。どうやらお前らの目は節穴だらけみたいだな」

そう言って俺は雷切で放出させた雷でハッキングをかけ、先程の映像を出していった。

朝我「お前らには見えないのか? フェイトの――瞳の奥」

そう言っただけ俺達はフェイトの真剣そうな表情と共に、その瞳を見る。

朝我「あの瞳は、誰よりも強い想いの表れだ。あいつは無茶をしても、取り戻したい“何か”があるんだ。命を捨てても・・・命を無駄にしても、取り戻したい・・・そんな想いがあるんだ。そんなことにも気づけず、ただ『無茶をした馬鹿』と判断して処理しようとしているお前らは、ほんとに屑野郎どもだな」

クロノ「・・・それでも、罪になることは変わらない。それに、一番確実に捕まえる事が出来る方法だろうか？」

朝我「例えフェイトの行動が罪になろうとも、それを背負いながらも・・・あんなに真剣に、一途に努力する姿が——お前らには汚く見えるか？」

クロノ「・・・」

朝我「あんなにボロボロになって、ズタズタになって、それでも取り戻したい・・・手に入れた奇跡がある。たった9歳の女の子が、命張ってるんだぞ！？たった一つの命・・・無駄にしても頑張ってるんだぞ！？それを罪！？確実に捕まえる！？ふざけんな！！そんな侮辱以外の何物でもない汚い手段で終わらせようなんて・・・絶対に俺たちがさせない！！！！！！！！！！」

そう言って俺は雷切を納め、一人で転送ポートに乗る。

朝我「愛紗、鈴々、朱里、紫苑。ここは任せた」

愛紗「御意」

鈴々「了解なのだ！」

朱里「はい！」

紫苑「かしこまりました」

そう言って見送られながら、俺はフェイトのもとに転送される。

朝我「誰かの為に頑張る奴・・・そいつに手を差し伸べたくなるのは、人として当然だ。そうだな——フェイト」

俺は助ける事が出来なかった、10年後のフェイトに向かって・・・
そう言った。

託された雷刃（前書き）

今回はオリジナルの戦いになります。

更に朝我が本気モードに！？

というかチートモードに入ります。

なんか・・・これこそチートと言う感じのチートになるかと（――
――；）

託された雷刃

朝我 Side

俺はなのは、フェイト、アルフ、ユーノのいる場所に向かうと、4人は驚くことに共闘していた。

アルフとユーノが離れた距離でチェーンバインドをかけて巨大な竜巻を縛る。

なのはが遠距離で砲撃、フェイトが攻めていた。

だが、竜巻の力は強大で鎖が解けそうな程だった。

朝我「ぐっ・・・なんて暴風だ・・・」

巨大な竜巻は、大きな津波や大雨・・・暴風も発生させている。

油断したら吹き飛ばされるな・・・まさかジュエルシールドがここまですごい力を放つとは・・・

俺は雷切を手にはフェイトのもとに向かう。

朝我「フェイト」

フェイト「朝我・・・」

朝我「大丈夫か？」

フェイト「うん・・・あの子が、魔力をくれたから」

なのはが、フェイトに魔力を与えたいらしい。

でも、これでなのはの魔力も減った。

さて・・・ここまで強い奴、どう倒すか・・・

朝我「フェイト、俺がおとりになって敵をかく乱させる。その隙に一撃を」

フェイト「・・・」

フェイトは無言で頷く。

朝我

『

『瞬間魔力換装』
プリューゲル・フリッツ

』

そう言う俺は光を超える速度で海面から竜巻とは逆向きに回転しながら上昇していく。

朝我「ぐううう!!!」

竜巻に逆らうと言うことはつまり、竜巻と戦うのと同じ。

俺は雷切で竜巻を切りつけながら回転、上昇していく。

そして俺が雲まで上昇し、フェイトとなのはが同時に砲撃を放つ。

フェイト「サンダー・・・」

なのは「デイベイン・・・」

フェイト「レイジイイイイイイイイイ！……！！！！！！」

なのは「バスタアアアアアアアアアアアア！……！！！！！！」

その瞬間、力を増した雷が降り注ぎ、桜色の砲撃が竜巻を撃ち抜いた。

なのは「やった・・・」

フェイト「・・・」

二人は喜び、俺も一息つく。

だが――

ユーノ「!?!?なのは!?!?!?!?!」

アルフ「フェイト!?!?!?!?!」

なのは・フェイト「!?!?!?!?!」

消えた消滅した筈の竜巻が再び発生。

海水を纏いながら竜巻はなのはとフェイトに向かって槍のように向かった。

なのは「っ!?!?」

フェイト「間に合わない・・・」

ソ
ニ
ツ
ク
・
ム
ー
ブ

なのは・フェイト「!？」

ユーノ・アルフ「!？」

4人は、驚くべき光景を見た。

そこにいたのは、黒いマントに黒い長袖と白い縦のラインが入った
ズボンを履き、

——『雷刃の刀・エクレール』——

両手にもたれた、黒いフォルムの蒼い雷の魔力刀。

そして普段は黒い髪だったはずの彼は、青みを帯びた金髪になっていた。

なのは「朝我さん!!!」

フェイト「朝我……」

朝我「……これは……」

俺は、自分の姿を見て驚いた。

突如変化した姿。

なんの前触れもなく発生した雷。

一体これは……

でも……感じる、懐かしい魔力。

これは——フェイトの魔力だ。

朝我「まさか・・・」

俺は一つの仮説にたどり着くが、現状を打破してからそれは考えることにし、俺は竜巻に向かう。

朝我

『

『瞬間魔力雷刃換装』
プリューゲル・アクセル・ムーブ

』

』

刹那、蒼き閃光が竜巻を複数回切り刻む。

なのは「っ!？」

フェイト「速い!？」

ユーノ「でも・・・速すぎる・・・」

アルフ「あの光・・・まるでフェイトじゃないか!？」

4人が驚く程の速度を俺はだし、竜巻が消える程まで切り裂く。

そして切り裂きながら再び雲まで上昇、そして俺は二刀の刃に蒼と黄色の雷を纏わせ、真上から一気に振り落とす。

朝我『
稲妻切り裂く神の一閃』
トライデント・トル・スラッシャー

二刀の一閃は交わり、竜巻を、海を、落雷を、雲を、切り裂いた。

そして発生する、巨大な爆発。

俺達は黄色き閃光に包まれる。

朝我「・・・フェイト」

俺は目の前にいる10年後のフェイトと話しをしていた。

朝我「この姿・・・この魔力。なんでフェイトの力が俺に・・・」

フェイト「多分・・・これだよ」

そう言ってフェイトは俺の魔法陣の中からジュエルシードを出した。

3つの・・・ジュエルシード。

朝我「これが？」

フェイト「覚えてる？ジュエルシードは、願いを叶えるって」

朝我「ああ・・・まさか!？」

フェイト「うん。多分・・・私の、朝我を助けたって気持ちがあった結果だと思う」

フェイトの・・・想いか。

ジュエルシードも、そんな風に想いを叶えてくれるんだな。

朝我「ありがとう。力・・・貸してくれて」

フェイト「ううん。感謝するのは私の方。なのはと私を助けてくれて・・・ありがとうね」

素直に感謝されると、少し照れるな。

朝我「・・・お前の力、これからも使わせて貰うよ」

フェイト「うん。これくらいしか、私にはできないのは残念だけど・・・」

朝我「いや、十分だ。だから――見ててくれ。俺たちを・・・これからも」

フェイト「うん」

そう言って、フェイトは光と共に消えていった。

そして残ったのは、俺達と残り全てのジュエルシールドだった。

託された雷刃（後書き）

『雷刃武装・セットアップ』

朝我のBJに十としてフェイトの羽織っていた白いマントを羽織り、更に髪が青みを帯びる蒼。

これはフェイトの黄色い雷と朝我の蒼き雷が混ざった影響である。

この時朝我の魔力ランクは朝我のSランクとフェイトのS+ランクが掛け合わせり、魔力ランク測定不能（魔力ランクEX）となる。

『雷刃の刀・エクレール』

雷切とバルディッシュが混ざり、蒼い雷刃と黄色い雷刃の二刀流の刀となる。

『瞬間魔力雷刃換装』
ブリュッセル・アクセル・ムーブ

瞬間魔力換装とフェイトのソニックムーブを掛け合わせて生み出された超高速魔力移動である。
ブリュッセル・フリッツ

『稲妻切り裂く神の一閃』
トライデント・トール・スラッシュ

S t Sのフェイトの『トライデント・スマッシュ』を一刀の刃に。

朝我の『千鳥一閃』を一刀の刃に。

二刀の一閃を交わらせ、対象に向かって放つ最強雷刃技。

その一閃は、まさに雷の神の如し。

届かない手（前書き）

あ、クリスマス番外編の件ですが、全く進んでいませんすみません
m (m

届かない手

リンディ Side

激しい光でモニターが見えなかったけれど、光が消え、現状が明らかになる。

空に浮かぶ、ジュエルシードが6つ。

まさか・・・彼一人で倒したっていうの!?

愛紗「流石はご主人様」

彼女達が喜ぶ様子を見ると、彼がどれほど信頼されているかは分かる。

リンディ「まさか・・・これほど強いなんて・・・」

?? 「あいつが強いのは当然だ。なんせ失ったのは――一人じゃないのだからな」

リンディ・クロノ「!?!」

私達の背後に突然現れた朝我さんそっくりの少年。

朱里「夜我さん・・・」

夜我「よっ。お前らの魔力を追いかけて来んだけど、まさかここに

来るとはな・・・まあいい。愛紗達はもう離れていいぞ」

そう言うのと私達に武器を向けていた彼女達は夜我さんの隣に並ぶ。

クロノ「君達は、自分たちが何をしてたのかわかってるのか!？」

夜我「別に。俺達は悪いと思ってても反省はしない。これが・・・悪くても正しいと思ってるからな」

そう言って彼らはモニターに目を向けた。

夜我「あいつの為なら、どんな無茶でもしてやるさ。あいつが・・・あいつしか、変えられないんだ」

そういうと、モニターに大きな変化が発生する。

全員「「「「!？」」「」「」」

朝我 Side

なのは「私・・・友達に、なりたいんだ」

そう言ってなのはフェイトに左手を差し出す。

曇っていた空に、一筋の光が差し、光はなのはを照らし・・・そして、徐々にフェイトに近づいて行った。

俺は武装を解除して、二人のその光景を見つめていた。

『次元干渉、別次元から、本艦及び戦闘区域に向けて、魔力攻撃来
ます!!!』

全員 「「「「!?!?!?!」」」」」」

朝我 「魔法攻撃・・・なっ!?!」

その瞬間、曇天の空に、雷が現れた。

渦巻く雲の中に広がる闇。

そこから、紫色をした雷が降り注いだ。

フェイト 「か・・・母さん・・・」

朝我 「母さん・・・」

瞬間、紫色の雷がフェイトに向かって襲い掛かる。

朝我 「!?!? 蜻蛉切!?!?!?!?!」

刹那、俺とフェイトの位置は入れ替わり、フェイトに向かっていた紫色の雷は俺に襲いかかった。

朝我「ぐっ・・・あああああああああ！！！！！！」

巨大な電気の弾ける様な音を出しながら、俺に強力な雷が襲いかかる。

なのは「朝我さん！！・・・きゃっ！！！！」

なのはは俺に近づこうとするが、様々な位置から襲い来る雷に身動きが取れずにいた。

朝我「なのは、俺は良いから自分を守れ!!」

なのは「・・・うん!」

そう言ってなのはは自分の真上にプロテクションを張り、迫り来る雷を防いでいた。

フェイト「朝我!？」

朝我「フェイトも、俺はいいから・・・自分を優先しろ!」

そう言うフェイトは自分に迫る雷を避け続ける。

そしてしばらくして、雷は止んだ。

なのは「朝我さん!!!!」

朝我「ぐっ・・・うう・・・」

俺は全身に火傷の痕が残り、水面の上で膝をついていた。

ユーノ「待ってて!今すぐ治療を!」

そう言ってユーノは俺に治癒魔法をかける。

緑色の光が、俺を包み込んでいく。

朝我「すまない。迷惑かける」

ユーノ「迷惑なもんか。人を護るために出来た、男の傷だよ」

朝我「・・・」

少し照れることを言われ、俺は頬をポリポリかいてしまう。

フェイト「っ!?!」

だがそれだけでは終わらなかった。

フェイトの足元に紫色の巨大な魔法陣が展開され、光を放ち始める。

ユーノ「あれは・・・転送魔法!？」

なのは「え!？」

フェイト「母さん、何を・・・っ!？」

アルフ「くっそ、あの鬼婆!!!!!!!!!!!」

朝我「!?!?フェイト!!!!!!!!!!」

俺はユーノの治癒を途中で中断させ、瞬間魔力^{プリユーゲル・プリッツ}換装でフェイトのもとに向かった。

朝我「フェイト……フェイトオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「！！！」

俺は全力で腕を伸ばす。

フエイト「朝我……！！」

フェイトは俺の手に気づき、腕を伸ばす。

フェイトの苦しそうな・・・悲しそうな・・・何かを怖がる表情を見て、俺は必死に手を伸ばす。

フ
エ
イ
ト
「
朝
g
」

だが、フェイトは紫色の光に包まれ、3つのジュエルシードと共に姿を消した。

俺は空を掴み、バランスを崩して水面の上に落下する。

朝我「っぐ・・・・・・・・くっそ・・・・・・・・」

俺はうつ伏せに倒れながら、掴むことのできなかった右手を見つめる。

アルフ「ぐっ!!!!」

アルフは悔やみながらも、空に浮かぶ残り3つのジュエルシードに手を伸ばす。

朝我「っく！！！」

俺は蜻蛉切を再び握り、刃にアルフを写す。

朝我『——蜻蛉歸り——！！！！』

「アルファなっ!？」

そして俺とアルフの位置は入れ替わり、俺はジュエルシードを手にする。

「それを——渡せええええええええええ!!」

そう言ってアルフは俺に殴りかかる。

なのは「朝我さん!!」

ユーノ「朝我!!」

二人が俺に声をかける。

それもそのはず、俺の体力は既に限界を超えてる。

先程の雷と、瞬間魔力換装・ブリュッゲル・ブリッツ・そして先の戦いで消耗した体力。

更には蜻蛉帰りの連続使用。

体に負荷を与えすぎた。

朝我「（避けられないか・・・っ!）」

俺は目を閉じて、覚悟した。

なのは「デイベイン——バスター……!!」

アルフ「っ!？」

だが、なのはが咄嗟に俺とアルフの間に砲撃を放ち、アルフを警戒させる。

ユーノも魔法陣を展開させて構える。

俺もギリギリながら刀を構えて、絶対的不利を証明する。

アルフ「・・・・くっ!!!!!」

アルフは悔やみながらも去っていった。

朝我「つく・・・そ・・・」

なのは「朝我さん!!!!!!」

そして疲れ果てた俺の意識は――ここで途切れた。

届かない手（後書き）

『ブリュッゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装』 『蜻蛉帰り』 の短所。

ブリュッゲル・ブリッツ 瞬間魔力換装

一瞬だけ己の魔力を爆発的に高め、自らに取り込み固定することによって自身が弾丸のようになって移動することが出来る身体能力の強化魔法。

時空間すらも歪めるほどの魔力爆発が発生するほどで、そのスピードは光速をも凌駕するが、魔力消耗が激しいので長時間の使用には向かない。

更に魔力爆発による衝撃や、身体の限界を超える速度での移動なので、多用すると体力も減る。

『蜻蛉帰り』

刀身・刃などに写されたものと自分の現在位置を入れ替える技。

だが発動した瞬間、自分の現在位置の変化に対応するために脳が情報整理するために脳に大きな負荷がかかるので連続使用は10回が限界である。

I K A 「こんな感じだった予定ですが、さっさと紹介しとけばよかったですね」

罪を背負う事の意味（前書き）

今回は朝我の過去を少しお話します。

近いうちにまた何かコラボか番外編をやろっかな〜と計画中（それはともかく寒い）

罪を背負う事の意味

No Side

戦いから3時間程が経ち、朝我はアースラの病室の個室で寝ていた。そこには戦いの後に駆けつけた桃香達は病室の壁に背をあずけて立っていた。

なのはとユーノは椅子に座って朝我を見つめていた。

夜我「皆……って、揃ってるみたいだな」

しばらくして、夜我はクロノとリンディの2名を連れて病室に入る。

なのは「あの……朝我さんは……」

心配そうな表情で夜我達に質問するなのはに、夜我は安心するようにと優しい笑顔で言う。

夜我「安心しろ。命に別状はない。ただ、今までの疲れが一気にやってきた……ってところだろ」

そう言うとき夜我は朝我の額にデコピンを食らわせてから言う。

夜我「まったく、毎日ろくに寝ないでジュエルシード、ジュエルシード・・・三度の飯よりジュエルシードじゃ、体がボロボロになって当然。それも先の戦いは激しすぎた」

ユーノ「どう言うこと？」

夜我「簡単なことだ。こいつは、身も心もボロボロだったんだ」

その一言に皆は心配そうな表情で朝我を見つめ直す。

桃香「朝我さん・・・」

愛紗「あの時と・・・今も変わらなかったのですね」

鈴々「お兄ちゃん・・・無茶し過ぎなのだ」

そう言うのと、皆も同じ表情をする。

それだけ、朝我の事が心配なのだろう。

クロノ「でだ。話してくれないか？彼に・・・何があったんだ？」

夜我「・・・。そうだな、少しだけ・・・話してやるよ」

そう言って夜我は、朝我の過去を・・・話し出す。

夜我 Side

夜我「朝我は好きな人を助けられなかった。護れなかったんだ」

俺は六課にいた頃の朝我の話をした。

夜我「あいつは不器用で無愛想だった。そのせいで友人と呼べる友人はいなくてさ、チーム戦とか点でダメで、いつも単独行動しかなかった。更にあの時の朝我の魔力ランクはAA。周りにはオーバーSランクの同期が何人もいたから、あいつは孤立していた」

クロノ「ちょっと待て！オーバーSが多数いる部隊なんて聞いたことがない！！」

夜我「その辺は無視してくれ。それに、これは“今の話しじゃない”」

そう言って再び話しを続ける。

夜我「そんなあいつに、ずっと話しかけて・・・接してくれる人が
何人かいた。それが・・・あいつの好きだった人達だ」

くあの時く

??? 「また、一人でいるの？」

そう言って声をかける栗色の髪の女性。

「……?」
「一緒に昼ごはん?」

そう言って来る金髪の女性。

「……?」
「せや、今度家来るか?」

そう言って声をかけてくる茶髪の女性もいた。

朝我「俺、――の事、好きです」

あいつは好きになった想いを伝えた。

けれど想いは届かず・・・

??? 「えへへ・・・嬉しい・・・けど・・・ごめんね」

???? 「気持ちは嬉しいけど・・・私とじゃ、無理だよ」

??? 「ごめん・・・嫌いなわけじゃないけど、受け取れんよ」

そう言って3人に振られた。

そして“ある事件”によって、3人は死亡した。

回想終了。

夜我「あの時の朝我は・・・見てるのが辛かった。悲しみにくれ、何も食わず、寝ることもなく、ただ与えられた業務だけをこなす・・・まさに機械のようになって・・・段々やせ細っていった」

なのは「え・・・」

なのはやユーノ達は、驚きの表情で俺を見る。

だが俺はそれを他所に話しを続ける。

夜我「弱々しくなっていたあいつの姿。ほんとにあいつはあの3人に事が好きだったんだなって思った」

そう言うのと、なのはの表情が少し変化した。

・・・なるほど、なのはの想いは変化してたか。

もし・・・この時代のなのはが朝我に告白したら・・・どう答えるのだろうか・・・

夜我「それを一度に失ったからこそ、あいつの悲しみやその傷は大きかったんだ」

俺は忘れない、あの時の・・・朝我の悲しみに暮れる姿を。

く再びあの時く

3人の葬式には、両親も駆けつけた。

俺や桃香達も勿論行つて。3人を送った。

だが・・・朝我はその日、ボロボロだった。

3人のうちの一人の家族・・・兄に殴られていたんだ。

兄「お前が・・・お前のせいで・・・なのはは!!!!!!!!!!」

朝我「ぐっ・・・がっ!・・・ぐふっ!!・・・」

降りしきる雨の中、黒い服を着た二人の姿。

そしてボロボロになっていく朝我。

だけど朝我は・・・表情一つ変えず、ただ彼女の兄の拳を受け続けた。

俺は止めに入ろうとしたが、朝我は俺に念話で『手を出すな』と言って、兄が止めるまで続けた。

朝我は、まるで自ら傷つくことを望んでいたかのようにだった。

まあそれしか、自分を満足させることが出来なかったんだろうな。

それからしばらく、あいつは3人の関係者・・・同僚とか上司とか部下とか家族の人全てに会いに行って謝罪の日々を送った。

当然、あいつを受け入れてくれる人なんて極僅かの人のみで、大半は朝我に『人殺し』『お前のせいで死んだんだ』『お前の様な足で纏いがいたから』『この役たたず』って言ってたらしい。

回想終了。

夜我「あいつは、背負ってきた全てを償う為に向かったけど、やっぱり償いきれないんだ」

なのは「そんな・・・」

なのはは悲しそうな表情をする。

夜我「なのは、これが・・・『失う』って言うことの責任だ。後悔する数が多い程、背負うものも多くて、一人で償うには重すぎる荷を背負わないといけなくなる。それを、今のうちに覚えとけ」

なのは「・・・はい」

クロノ「なるほど・・・だから、あんな目をするのか」

リンディ「それだけ、大切な人だったのね」

夜我「そうだ。だからあいつは、やり直す為にここにいるんだ」

ユーノ「やり直すって・・・」

??「おい・・・」

全員「「「「!?!?!?!」」」」」」

皆がその声に、驚きの声をあげる。

夜我「朝我……」

朝我が、目を覚ました。

朝我「おい……何勝手に喋ってんだよ」

夜我「悪いな。だけど、全ては話してない」

朝我「そういう問題じゃ……無いだろ」

そう言って上半身だけを起き上がらせる。

朝我「今の話しは気にするな。忘れてくれ」

そう言って朝我は起き上がろうとする。

なのは「朝我さん!?!」

クロノ「無茶をするな。まだ回復していない体で……」

朝我「五月蠅い。無茶してでも・・・やりたいんだ『ふざけないでください!!!!!!!!!!!!!!』っ!？」

その瞬間、朝我の頬を力いっぱい叩く、なのは手の音が響きわたった。

朝我「なの・・・は」

朝我はヒリヒリと痛む叩かれた場所を抑える。

なのは「忘れることなんて・・・出来ないよ。今日まで、一緒に戦って・・・頑張ってきたんだもん！今更大切な事を聞いて忘れるなんて・・・出来ないよ・・・」

そう言って朝我の胸に顔を埋めて泣き出す。

朝我「・・・だけど、なのはには関係ない」

なのは「関係無くても・・・私は力になりたいの！！私は、朝我さんの力に・・・になりたいの！！」

夜我「っ・・・」

俺は、懐かしさを感じた。

それは、六課にいた頃のなのはに言われたあの言葉。

『夜我君。ごめん、朝ちゃんの事・・・振ったんだ』

『・・・そうか』

『うん。それで・・・朝ちゃん、きっと凹んでるから・・・助けてあげて』

『俺が？出来るかな・・・』

『お願い。私には・・・出来ないから、だから・・・朝ちゃんの――
――傍にいてあげて』

夜我「・・・」

朝我「・・・すまないな、それじゃ・・・少しだけ」

そう言って朝我は、なのはを抱きしめた。

二人の距離が、近づいた光景だった。

罪を背負う事の意味（後書き）

今回はまあ朝我の過去を夜我が勝手に話してしまったと言うことですね。

S t Sなのはの想いや初期なのはの想いは変わらないですよね。

わがままだったり・・・全力全開だったり・・・

次回と後一話終えて“多分”決戦となります。

託される言の葉と、彼女なりの答え（前書き）

今回はちょっと長い回になるかと思いますので、多分飽きる人が続出！？

・・・うん。最近寒くて脳みそもカッチカチの可能性（――；）

託される言の葉と、彼女なりの答え

フェイト Side

プレシア「フェイト…、起きなさい」

私は母さんのもとに戻された直後、母さんからのお仕置きを何時間にも渡って受けた。

だけどそれは、私が悪いから・・・

母さんの声で、私はまどろみから覚める。

フェイト「はい、母さん」

見上げると、母さんがジュエルシードを広げて、言った。

プレシア「あなたが手に入れてきたジュエルシードが九個。これじゃまだ足りないの。最低でもあと五個、出来ればそれ以上。急いで手に入れて来て——母さんの為に」

フェイト「・・・はい」

起き上がると、私は気になることを言った。

フェイト「アルフは・・・？」

プレシア「ああ、あの子なら逃げ出したわ。『怖いからもう嫌だ』

って」

その言葉を聞いて、悲しさと同時に嬉しさが込み上げてくる。

アルフにはいつも苦勞掛けてばかりだったから、別の場所で幸せに暮らしてくれるのなら、それでもいい。

ここから先は、アルフまで巻き込むわけにはいかないから・・・

プレシア「必要ならもっと良い使い魔を用意するわ。忘れないで、あなたの本当の味方は母さんだけ。いいわね・・・フェイト」

フェイト「・・・はい」

そう言って私は、再び部屋を出て行った。

夜我 Side

夜我「クロノ、話してなんだ？」

翌日、俺はクロノとエイミィの2名に呼ばれた。

朝我は病室で桃香達に監視されてる・・・ご愁傷さまっと。

クロノ「ああ、丁度今・・・『フェイト・テストロッサ』の情報が手に入ったから説明しよう」と

夜我「それだったら朝我達も呼べばいいじゃん」

クロノ「いや、今はまだ・・・彼らに伝えるのはどうかと判断したから、まずは君に伝えてから判断してもらおうと思ったんだ」

なるほど・・・それほど重要だってことか・・・。

俺も、朝我も知らない・・・フェイトの過去と、フェイトと言う一人の少女の正体。

クロノ「まず、『テストロッサ』と言う名で判明したよ。彼女の母の名は『プレシア・テストロッサ』と言う人だ。26年前は中央技術開発局の第三局長でしたが、当時彼女個人で開発していた次元航行エネルギー駆動炉の実験を行い、失敗。結果的に、中規模次元震を起こしたことによって、中央を抜けて地方へと異動になったのである」

夜我「だがその後、行方不明になった・・・とか？」

そう言うときクロノ達は無言で頷く。

夜我「・・・それ以外の家族の情報は？」

エイミィ「駄目。そのへんは何も無いの」

夜我「そうですか・・・分かりました。ありがとうございました」

そう言って俺は部屋を出る。

夜我「・・・まさか・・・な」

俺は、ある仮説を立てていた。

『結果的に、中規模次元震を起こしたことによって、中央を抜けて地方へと異動になったとある』

この中規模次元震・・・ここで何かがあったのではないか？

例えば・・・誰かを失ったとか・・・

ジュエルシードは願いを叶えると言われている。

それを多く集めれば、大きな結果が出るはずだ。

だが、それが証明されたのは、まだ朝我一人を置いて他にはいない。

朝我が発動した・・・あの武装。

あれ以外、ジュエルシールドが叶える願いなんて・・・誰かを傷つけることしかできない。

だとしたら・・・ジュエルシールドは他の存在意義があったのでは？

例えば・・・そう、起こり得ない奇跡を起こす・・・とか。

まさか・・・な。

俺はやはり、一つの仮説をたてて・・・その仮説を疑ってならない。

夜我「もしかしたらジュエルシードは・・・存在しないはずの・・・
“あの場所”への道なのか!？」

そう思った俺は、クロノ達が教えてくれた情報を、朝我達には教えないと決め、再び歩きだした。

朝我 Side

朝我「はあ・・・暇だあ」

愛紗「体が良くなるまでの辛抱です」

朝我「もう大丈夫だってば」

桃香「とか言って、また無茶すると困るんです！」

朱里「そうですよお。ご主人様は今後の戦いの鍵を握ってるんですから、休む時はしっかりと休んでいただかないとお」

そう言われると、自分と言う存在の大切さを感じる。

朝我「あれ、そう言えばなのは？」

星「彼女なら鈴々と翠の2人と共に一度地球に戻られました」

朝我「そうか・・・何にもなければ良いんだけどな・・・」

正直言うと、俺は焦っていた。

今、フェイトは無事なのかと・・・無事であって欲しいと、心の底から願っていた。

届かなかった手・・・それだけが、俺を苦しめたけど・・・

——『関係無くても・・・私は力になりたいの!! 私
は、朝我
さんの力に・・・なりたいの!!』

朝我「・・・変わらないんだな」

桃香「え？」

朝我「あ、いや・・・なんでもない。ただの独り言」

そう言って、俺は天井を見上げる。

桃香「なんか、嬉しそうですね」

朝我「え？」

愛紗「と言いますか、ご主人様・・・変わりましたね」

朝我「何が？」

星「確かに・・・なんというか、角が消えて丸くなったような・・・
そんな様な感じだな」

いや。さっぱり分からない。

紫苑「あの子に抱きつかれて嬉しかったのですか？」

朝我「ちょっ！別にそんなじゃない！」

そう言って弁解するが、桃香や愛紗は疑いの眼差しで俺を見る。

桃香「・・・そうなんですか」

朝我「桃香！？ち、違うからな！！別に下心があったわけじゃなくてだな！！！」

愛紗「ですが、あの時のご主人様の行動は、如何なものかと」

朝我「そ、それはあ・・・」

徐々に（何故か）追い込まれていく俺。

朝我「こ、この話はもう良いだろ！！」

桃香・愛紗「「良く（ない・ありません）！！」」

そう言って俺は1時間かけて二人を落ち着かせる努力をした。

・・・って、朱里達は止めるの手伝ってくれたって良いだろ・・・

なのは Side

すずか「なのはちゃん!! 良かったあゝ元気で!!」

昼休みと同時、すずかちゃんが駆け寄ってきて喜んでいた。

なのは「うん。ありがとう、すずかちゃん。・・・アリサちゃんも」

そう言っアアサちゃんを見ると、腕を組んで顔を背けていた。

アアサ「ま、まあ、元氣みたいでよかったわ」

なのは「にゃはは・・・」

すずか「あはは・・・」

そんな久しぶりに見る態度に、私は今までの緊張が溶けたみたいに笑った。

なのは「とりあえず戻って来れたんだけど、まだやらなくちゃいけないことがあるから戻らないといけないんだ」

私は近い内にアースラに戻らないといけない。

それは、ジュエルシードの事・・・フェイトちゃんの事があるから、またすぐにもどることになっちゃう。

それでも、この事件が解決すれば・・・また平和な日常に戻るはずなんだ。

すずか「・・・大変だね」

アアサ「でも、決めたんでしょ？」

すずかちゃんが心配げに、アアサちゃんが諦めたように問い掛ける。

なのは「うん、大丈夫」

もう、後には戻れない。

そんな世界まで、来てしまった。

朝我さんは、こんな今を望まない為に、私を何度も説得した。

けれど、これは私が選んだ・・・決断したこと。

間違いとは思っていない。

すずか「放課後少しくらいなら遊べる？」

なのは「うん！」

アリサ「それじゃ集合場所は家にしましょう。新しいゲームもあるし」

アリサ「そういえば、夕べ怪我してる犬を拾ったの」

なのは・すずか「「犬？」」

アリサちゃんがそう言って、私とすずかちゃんは聴き直した。

アリサ「うん。変わった子なんだけど、凄くいい子。よかったら会ってあげて」

なのは「うん」

私は放課後を楽しみにしながら、勢いよく頷いた。

そして私はフェレット姿のユーノ君を連れてアリサちゃんの後をついていく。

すずか「で、アリサが夕べ拾った子ってのは？」

アリサ「あ、ほら着いた。この子よ」

私達を守る檻の前からの声に、視線をそちらに向けると。

なのは・ユーノ「「!?!」」

私とユーノ君は、アリサちゃんが言っていたその『犬』を見て驚いた。

なのは《アルフさん?》

アルフ《・・・あんた達か》

私達は念話で話しを始める。

なのは《フエイトちゃんは?》

アリサ「あれ?元氣なくなっちゃった。どした?大丈夫?」

すずか「傷が痛むのかな?そつとしといてあげようか」

なのは「あ、ユーノ君が興味あるみたいだね」

そう言って私はユーノ君を置いてアリサちゃんたちと一緒に部屋に戻りました。

でも念話は繋いだまま。

ユーノ君は前にアリサちゃん達に紹介してるので、今言われても驚きません。

アルフ《あんたがここに居るってことは、管理局の連中も見てるんだろうね?》

クロノ《時空管理局、クロノ・ハラオウンだ》

そう言うときクロノ君が念話に入ってきました。

《どうも事情が深そうだ。正直に話してくれば、悪いようにはしない。君のことも、君の主、フェイト・テストロッサのことも……》

アルフ《話すよ……全部》

素直にアルフさんは答えました。

アルフ《だけど約束して。フェイトを助けるって。あの子は何も……何も悪くないんだよ》

そう言うときアルフさんは素直に全てを答えた。

朝我 Side

クロノ「朝我、全部聞いたか？」

朝我「ああ。そういう事かよ・・・」

アースラの中で、俺はアルフの話を聞いた。

クロノ「君達の話と、現場の状況、そして彼女の使い魔、アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾はないみたいだ」

朝我「まああの状態で嘘なんてつく訳ないけどな」

そうやって俺は率直な質問をする。

朝我「プレシア・テストロッサは逮捕出来るか？」

クロノ「勿論可能だ。今までの証言、アースラを攻撃。これだけあれば、逮捕の理由にはお釣りが来る」

クロノも怒っているのか、言葉の端々に怒りを滲ませながら即答する。

朝我「なるほど・・・な」

俺は軽く体調が良くなったかを確認するために両腕を振ったりして確認する。

うん、問題はなさそうだ。

クロノ「僕たちは艦長の指示があり次第、プレシアの逮捕をすることになる。君達は、どうする？」

君たちとは、俺や夜我そして・・・なのはとユーノへの質問だ。

朝我「俺は決まってる。“今回は”管理局の味方をする」

夜我「俺は朝我についていく・・・それだけだ」

朝我「お、来たか」

俺たちの間に夜我也入ってきた。

朝我「後は・・・なのは」

なのは「私の想いは、決まってるよ。フエイトちゃんを――助
けたいの」

朝我「・・・ああ」

それは、俺も同じ気持ち。

だけど、ホントの意味で助けてあげられるのは・・・なのはしかない。

俺は、役不足だ。

朝我「なのは、頼んだ。俺はなのはの不可能を持ってく。だからな

のは、可能だけを持って、あいつを助けてやってくれ!!」

なのは「・・・うん!!」

そして――翌日。

海鳴臨界公園にて、なのはは・・・待っていた。

フェイト「・・・」

悲しい運命を背負う――独りの少女を。

なのは「ただ捨てればいいってわけじゃないよね・・・逃げればいいってわけじゃ、もっとない」

なのはレイジングハートから持てる全てのジュエルシードを出す
と、フェイトも同じようにだす。

なのは「きっかけは、きつとジュエルシード。だから賭けよう、お互いが持ってる、全部のジュエルシードを！」

そう言って再びジュエルシードをお互いのデバイスに仕舞う。

なのは「それからだよ。全部――それから。私たちの全ては、
まだ始まってもない」

そして彼女達は、BJを着る。

なのは「だから、本当の自分を始めるために、始めよう」

そしてお互いにデバイスを構え、空を飛ぶ。

なのは『――最初で最後の本気の勝負――!!!!!!!!!!』

託される言の葉と、彼女なりの答え（後書き）

とうとうこの回まで来ましたね。

来年のなのはの映画までにはA、Sに入って良いところまで行きたい
なって目標ですよはい。

戦う者と、戦いを見る者（前書き）

ようやくここまで来た！！（一ヶ月ちよつと）

劇場版でも大人気なのはの評判が一瞬だけ下がったあの決戦！

前売りを10枚ほど買って何度も僕は見ましたが・・・やはりあれは鳥肌たつ。

戦う者と、戦いを見る者

フェイト Side

ここはどこまでも晴れ渡る青空。

そこに広がる草原に、仲良く並ぶ人影が二つ。

・・・そうか、ここは・・・

目の前で花の髪飾りを作る女性を見て、私は理解した。

これは、昔の夢。目の前にいるのは母さん。

いつも優しくかった、私の母さん。

私の名前を優しく呼んでくれた、母さん。

プレシア「出来たわ。ねえ、とても綺麗でしょう――」

アリシア」

え・・・アリシア？

違うよ母さん、私は――フェイトだよ？

プレシア「さあいらっしやい。――アリシア」

母さんの呼び掛けに、私が近寄っていく。

その頭に髪飾りを載せた母さんは、桜の様に柔らかく微笑んだ。

プレシア「ほら、可愛いわ。ねえ――アリシア」

母さんの笑顔を見た私は、ただ無言で微笑む。

まあ・・・良いの・・・かな？

母さんが笑ってくれるなら。

私の名前を呼ばれないくらい、大したことじゃない。

そう言って私は、求めていた笑顔の母さんに、満面の笑で返した。

フエイト「・・・全て、幻想ゆめだね」

そう言って私は白いBJを着た桜色の光を放つ女の子を見つめる。

私に何度も何度も声をかけてくれた子。

フエイト「（それでも私は・・・あの笑顔の母さんが・・・大好きだから）」

そう言って私はバルディッシュを構えた。

（絶対に――負けない！）

朝我 Side

朝我「・・・」

俺はなのはとフェイトの戦いをクロノ達と共に見ていた。

エイミィ「しかし、ちょっと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて」

クロノ「なのはが勝つに越したことはないけど、あの二人の勝負自体。どちらに転んでもあんまり関係ないからね」

そう言いながらクロノはエイミィのアホ毛の手入れを手伝う。

朝我「なのはが戦闘で時間を稼いでくれている内に、フェイトの帰還先追跡の準備をしておくだったよな？」

クロノ「ああ。・・・頼りにしてるんだからね。逃がさないですよ？」

取り出したヘアスプレーを吹き、エイミィの髪をブラシで整えながら呟く。

エイミィ「おお！任せといて！！」

と、胸を張って言うが、整えたはずのアホ毛が再びその姿を露にする。

エイミィ「あら・・・」

朝我「（ム、ム）ハア・・・」

夜我「かっこつかねえな・・・」

そう言って俺と夜我は盛大に溜息をつく。

エイミィ「でもあのこと、彼女に伝えなくていいの？プレシア・テスタロッサの家族と、あの事故のこと」

そう言う、クロノは今まで以上になのは達を真剣に見る。

クロノ「勝ってくれるに、越したことはないんだ。今は、なのはを迷わせたくない」

朝我「・・・そう、だな」

夜我「・・・」

俺達は再び、なのは達を見る。

朝我「今は・・・願うしか・・・無いんだよな、俺は」

そう言って、自分の無力さを・・・悔やみながらなのはを見ているのだった。

フ ェ イ ト S i d e

フ ェ イ ト 「（・・・強い）

それが、素直な答えだった。

あの子と初めて出会った時、凄く弱かった。

正直、私の相手ではないほど・・・

けれど、今日の前にいるあの子は・・・私と互角に戦っている。

こんなに短い期間で、こんなに強く成長するなんて・・・思っ
てみ
な
か
っ
た。

――『友達に、なりたいんだ』

私なんかの為に・・・ここまで強くなってくるなんて・・・

フェイト「（・・・考えるな）」

そう言っただけ私は再びあの子を見つめる。

フェイト「（やられる前に・・・やる!!!!）」

バルディッシュを構えた私は、足元に極大の魔法陣を描いた。

なのは「――!？」

バルディッシュを構えると同時、足元に極大の魔法陣が展開される。

なのは「っ!？」

私は動こうとした瞬間、周囲に現れては消える魔法陣が展開されて、私は動くが出来なくされてしまった。

私の周囲に雷が集束し、いくつもの弾丸を生み出していく。

なのは「ぐっ・・・」

どうかしようとした瞬間、両手を光り輝く輪で拘束される。

アルフ《ライトニングバインド——!>? やばい、フェイトは本
気だ!!!》

ユ一ノ《なのは！今からそっちに・・・》

なのは「駄目!!!!!!!!!!!!」

アルフ《でも、フェイトのそれは本当にやばいんだよ! !》

「なのほ」でも……これは、私とフェイトちゃんの問題だから……

フェイト「――アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし
天神、今導きのもと撃ち掛かれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル
――」

詠唱を終えた私は、あの子を見る。

これだけの魔法を展開しているにも関わらず、あの子は私を真っ直
ぐに見つめていた。

フェイト「フォトンランサー・フアランクスシフト!!!! 撃ち碎け
――ファイア!!!!!!」

私の声に応え、雷の槍が四方八方から襲い掛かる。

あの子に激突し爆煙を上げるが、それでも私は執拗に雷を叩き込む。

フェイト「はあ、はあ、はあ・・・」

最後の一発を、駄目押しとばかりに叩き込んだ。

そして爆風が去るのを待った。

No Side

なのは「うち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

そう言ってなのは爆風の中から現れ、レイジングハートを構え、魔力を集める。

なのは「次はこっちの――」

レイジングハート「ディバイン――」

なのは「――番だよ!!!!」

レイジングハート「――バスター」

そう言ってなのははフェイトちゃんに砲撃を放つ。

フェイト「ぐっ!!!!」

フェイトはプロテクションで直撃を防ごうとする。

フェイト「直撃・・・でも、耐えきる。あの子も、耐えたんだから・・・！」

そう言ってフェイトは全力で防ぐ。

フェイト「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

何とか防ぎきるが、まだそれだけでは終わらなかった。

フェイト「!？」

上を向くと、なのはは空気中に散らばった魔力を一点に集結させていた。

なのは「受けてみて、デイベインバスターのバリエーション!!!」

レイジングハート「スターライト・ブレイカー」

その声とともに、まるで小さな流星の様に、なのはのもとに桜光が集まる。

そして小さい球体が、徐々に徐々にその大きさを増していく。

フェイト「・・・っ!？」

フェイトは動こうとするが、先ほどのなのはの様に、バインドにかかって身動きが取れなくなった。

なのは「これが私の、全力全開!!!!!!!!!!」

そしてなのは―――その想いを、全力で放つ。

なのは「スターライト・ブレイカアアアアアアアア！」！！！！！！

そして溜にたまった膨大な魔力は一直線にフェイトに向かっていく。

バインドで身動きの取れないフェイトは、そのまま直撃を受けることとなる。

朝我「・・・」

夜我「あ、おい・・・朝我！」

突然、朝我はアースラから出ていった。

それを追いかける夜我。

そう、決着が着いた。

高町なのはが、決戦に勝った瞬間だった。

戦う者と、戦いを見る者（後書き）

今回は内容に一切の深みが無いですね（普段からないけど）

ああ・・・今日は10日。

クリスマスまであと二週間くらいかあ・・・

裏切りの運命（前書き）

この勢いだったら来年までにはA、Sに入ってるかなあ・・・

まあStsまで行ったらvividとかforceをやるかやらないか分からない。

裏切りの運命

朝我 Side

朝我「なのは、フェイト」

なのは「あ・・・朝我、さん」

朝我「おっと・・・」

なのは達のもとにつくと、なのはは安心したのか、俺の胸に倒れた。

なのは「ご、ごめんなさい／＼／＼／」

朝我「いや、お疲れ様。夜我！」

夜我「大丈夫、気絶してるだけみたいだ」

夜我はフェイトを抱きかかえてくれている。

フェイト「う・・・ん・・・」

なのは「フェイトちゃん・・・」

フェイトは目を覚ますと、バルディッシュを持ってなのはに言う。

フェイト「・・・私、負けたんだね」

なのは「うん」

フェイト「それじゃ・・・」

そう言うバルディッシュの中からジュエルシード全てが出てきた。

夜我「飛べるか？」

フェイト「・・・」

フェイトは無言で頷き、夜我の腕から降りるように飛ぶ。

クロノ《なのは、朝我、夜我。ジュエルシードを確保してそれから彼女を・・・》

エイミー「待って——来た!!!!!!」

朝我・夜我「っ!?!」

すると空に浮かぶ雲が渦を巻、渦の中心から再び紫色の雷が襲い来る。

朝我 『
———
『瞬間魔力換装』
———
』

俺は誰よりも速く反応して皆を抱えてその場から離れる。

朝我 「つく……エイミィ!!」

エイミー《既に見つけてるよ！転送を始めるから！》

そう言うのと俺達の足元に発生した転送魔法陣をだして、アースラに転送された。

リンディ『武装局員、転送ポートから出動！！任務は、『プレシア・テストロッサの身柄確保』です！』

そう言うのと多くの武装局員の返事と共に、転送されていた。

No Side

プレシア「がはっ!!」

大量の血を床に吐きながら、どうにか奪取したジュエルシードを見遣る。

プレシア「次元魔法は・・・もう私の身体が持たないわね」

口元を拭い、隣に飾られた円形の水晶に視線を送る。

プレシア「それに、今のでこの場所も掴まれた。――フェイト、あの子じゃダメだわ・・・」

そう言いながら血の付いた手を見る。

プレシア「そろそろ・・・潮時か・・・」

朝我 Side

俺たちは驚きを隠せない状況だった。

プレシアのもとに何人もの局員が向かった。

だが、プレシアの抵抗によって全滅。

今はこちらに再び転送されようとしていた。

そしてプレシアは大きなカプセルの中に入る金髪の少女を見ながら俺たちに言う。

プレシア『私のアリシアに————近寄らないで！……！……！』

朝我「アリシア・・・？」

夜我「フェイトにしか見えないな・・・」

そう、その子の姿はフェイトと瓜二つ。

眠りにについている様子は、まさに眠れる姫。

フェイト「アリ・・・シア・・・」

朝我「・・・」

フェイトの姿は、手に手錠がかけられ、白い服に変わり、バルデツシュが待機モードで手に持たれる。

そして戦いの後だからか、はたまたアリシアと言う少女の登場からか、弱々しいものとなっている。

プレシア「もう駄目ね、時間がないわ。たった九個のロストログアでは“アルハザード”に辿り着けるかどうかはわからないけど・・・」

愛おしげにカプセルを撫で回しながら、プレシアは呟く。

プレシア「でももういいわ・・・終わりにする。この子を亡くしてから時間を・・・」

こちらに視線を向け、何かに取り付かれたかのように独白を続ける
プレシア。

プレシア「この子の身代わりの“人形”を、娘扱いするの」

全員「「「「「「!?’」」」」」」

全員が驚く。

朝我「人形……だど？」

プレシア「そうよ。人形とはそこにいるあなたのことよ——フ
ェイト」

プレシア「せっかく『アリシアの記憶』をあげたのにそっくりなのは
見た目だけ。役立たずでちっとも使えない——私のお人形」

お前の人形？

エイミィ「最初の事故の時にね、プレシアの実の娘——『アリ
シア・テストロッサ』を亡くしているの。彼女が最後に行っていた
研究は、使い魔とは異なる、『使い魔を超える人造生命の生成』」

エイミィが悲しそうな表情でそう言った。

夜我「そして、死者蘇生の秘術。『フェイト』って名前は当時、彼女の研究につけられた開発コードだ」

朝我「なっ・・・！？」

そんな・・・それじゃ・・・フェイトは・・・

・・・いや、その前に！！！！

朝我「おい夜我、何故その話を俺にしなかった！？」

俺は今、その事実を初めて聞いた。

プレシアが実験の失敗をした・・・それまでは聞いていたが、それ以外は何も聞いていない。

夜我「すまない。だが、話したらお前が何をするかくらい・・・誰だって見当はつく」

朝我「・・・っ」

確かに、俺だったらすぐにプレシアの場所をつきとめ、攻めていただろう。

プレシア「よく調べたわね。そうよ、その通り。だけど、駄目ね。ちっとも上手くないかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったも

のの代わりにはならないわ」

朝我「っ!?!」

当たり前前にことに気付いたように、プレシアの話は続く。

プレシア「“アリシア”はもっと優しく笑ってくれたわ。“アリシア”は時々我が儘も言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた。“アリシア”は、いつでも私に優しくかった」

朝我「・・・」

プレシア「フェイト。やっぱりあなたは、アリシアの偽物よ。せっかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった」

なのは「やめて・・・やめてよおお!!!!!!」

なのはが涙ながらに訴えるが、それでもプレシアは止まらない。

プレシア「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だからあなたはもう要らないわ。どこへなりと消えなさい!!!!!!」

朝我・夜我「「いい加減にしろ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」

俺と夜我は、怒りの限界だった。

朝我「何勝手に私物にしてんだてめえ!! フェイトはお前の『物』じゃねえ!!! フェイトはフェイトだ!! フェイトの存在はフェイト自身のものであって、誰の物でもないんだ!!!! ましてやフェイトは人形なんかじゃない!!!!」

夜我「お前の身勝手に生命そのものまで巻き込みやがって・・・てめえ、一つの過去の為にどれだけのものを犠牲にすれば気が済むんだ!!!!!!」

プレシア「五月蠅い!!!! 私・・・私の何を知ってるというの!？」

朝我「知るかよ!!!! いや、知りたくもない!!!! 『家族』を誰一人として幸せに出来てねえじゃねえかよ!!!!!!」

プレシア「フェイトは、私の人形であって・・・家族じゃないわ。血もつながっていないのよ」

朝我「違う。血が繋がるから家族じゃない!! 苗字があるから家族じゃない!!!! 生み出されたから家族じゃない!!!!!!」

俺は思い出しながら言う。

六課にいたころ、俺を家族の様に接してくれた・・・優しき部隊長達の姿を。

朝我「家族に嘘も真実もない！！家族は一緒にいるから家族なんだ！！！！男と女が結ばれて夫婦！そして生まれる息子や娘が出来て一つの家族！！息子や娘が結婚してまた家族！！その家族が結婚して家族だ！！！！そして家族と家族が集まってこの世界が生まれてんだ！！！！」

俺はフェイトを抱き寄せながらそう言う。

俺にとって、今のフェイトも・・・なのはも、ユーノも・・・家族だ。

朝我「今ここにいるフェイトは・・・この世に生まれた時点で、人として生きる権利を得たんだ。いくらだって友達を作ってもいい、人を好きになってもいい、恋人を作ってもいい、将来、結婚してもいいんだ。そして――家族を作っても・・・家族になっても良いんだ!!!!」

フェイト「!？」

フェイトは驚いてように俺を見る。

抱かれているせいか、少し頬が赤いが、俺は気づかずにプレシアを睨む。

夜我も、俺と同じように怒りで口調が悪くなっている。

そして俺は、一番の想いを伝える。

朝我「俺はこの世の全てがフェイトを否定しても、フェイトは大切な一人の女だって言ってやる！！だって、フェイトは人だから・・・一人の9歳の女の子なんだから！！！！」

だがプレシアは、無表情になって言う。

プレシア『ならいいことを教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっとね、私はあなたが――』

プレシアは一際歪んだ笑みを浮かべ――

プレシア『大嫌いだったのよ』

それは、誰もが分かっていて、誰もが聴きたくなかった事実。

だからこそ、誰も口にしなかった事実。

そして、誰も信じないでしようとした事実。

だが、その事実は・・・もっとも聞いてはいけない、独りの運命の女の子の耳に入ってしまった。

フェイト「・・・」

フェイトの瞳から光が消え、ゆっくりと倒れていく。

朝我「フェイトっ!?!」

間一髪、床に触れる前に抱き留めたが、その手からバルディッシュがこぼれ落ち、

バルデッシュは、碎けてしまった。

それはまるで——フェイトの心の様に。

俺の中には、プレシアへの怒りしか・・・無かった。

エイミィ「た、大変大変!!! ちょっと見てください!!!! 屋敷内に魔力反応が多数!!!」

夜我「何!?!」

モニターをみると、そこには多数の敵と呼べる機械の様な兵隊がいた。

エイミィ「庭園敷地内に魔力反応、いずれもAクラス!!!! 総数・・・
・どンドン増えています!!!」

夜我「あれは・・・」

朝我「・・・」

俺達は、決断した。

朝我「夜我。愛紗達と共にプレシアのもとに。俺はフェイトを一度病室まで運ぶ」

夜我「心得た」

朝我「クロノ達は・・・頼む」

クロノ「分かってる。行くぞ」

そう言ってなのはとユーノはクロノとともに向かっていく。

なのは「朝我さん」

朝我「なんだ？」

なのは「フェイトちゃんのこと・・・後は、お願いします」

朝我「っ!？」

それは、なのはとフェイトの決戦の前に、俺がなのはに伝えたこと。

なのは「私は、あれしか方法が無かったけど、朝我さんには朝我さんの方法があるはずだから・・・」

そう言ってなのはクロノ達の後をついて行った。

朝我「俺なりの・・・」

そう言って俺はフェイトをアルフと共に病室に連れていった。

運命を変えてくれる人（前書き）

早くもこの回まで来ましたねえ！

皆さんのご意見ご感想もあって、結構いい具合に出来てるのでは？
（え

そんなこんなで風邪が増えつつあるこの冬を乗り越えながら小説を書きますかね。

運命を変えてくれる人

朝我 Side

アルフ「フェイト……」

朝我「……」

俺たちはフェイトを病室に連れて寝かせる。

目は光を失い、この世に絶望している目だった。

朝我「俺も……こんな感じだったのかな……」

アルフ「? どうかしたのかい?」

朝我「いや……俺も前までは、今のフェイトのようだったのかなって思ってたさ」

アルフ「……何が……」

朝我「その話は事件が終わってからだ。今は……フェイトに話がある」

そう言っただけ俺はフェイトを見つめる。

アルフ「……それじゃ、私は行くよ。邪魔になりそうだしね」

朝我「・・・そうしてくれると、少し助かる」

流石、フェイトの相棒だけあるな。

考えてくれて・・・一番の方法を選んだ。

アルフ「・・・フェイトの事・・・お願い」

そう言って、アルフは病室を出た。

朝我「さて・・・と、フェイト・・・大丈夫か？」

フェイト「・・・」

フェイトは返事をしない。それだけ・・・ショックなんだ。

俺に出来る・・・フェイトを助ける方法か。

なのは・・・俺は、どうすればいいかな？

——迷わなくて良いよ。

朝我「!？」

不意に聞こえた、懐かしい声。

なのは《朝ちゃん。朝ちゃんの伝えたいこと・・・正直に伝えるべきだよ》

俺の背後に現れたのは、六課にいたのはだった。

朝我「・・・出来るかな」

なのは《・・・言葉は誤解を生む。けれど、誤解を生まない様にすることだって出来るし、もし言葉に迷ったら、行動すればいいと思うよ。私は、言葉では伝えられないから、行動で伝えたもん》

朝我「・・・そう、か。ありがとう」

なのは《ううん。頑張って・・・フェイトちゃんを、助けてあげてね》

そう言って、なのはは再び姿を消した。

朝我「・・・」

俺はフェイトの額に手を添えながら言う。

朝我「フェイト。俺には、家族を裏切られた気持ちが・・・よく分からない。だけど、失った悲しみなら、苦しい程分かる。俺も・・・結構失ってるからな」

苦笑いしながらそう言うと、フェイトは掠れる声で俺に質問した。

フェイト「それじゃ・・・どうして、笑ってるの・・・」

朝我「・・・それは、皆が・・・俺の傍にいてくれたからだよ」

く回想く

俺が大切な人を失ってしばらく、俺は寝ることを忘れた。

食事をすると言うことを忘れた。

ただ仕事をすると言うことしかしなかった・・・まさに機械、人形
のようだった筈だ。

そんな俺の事を心配して、いつも傍にいてくれたのは・・・桃香や、夜我達だった。

夜我「朝我！今日も張り切って頑張るぞ！！！」

そう言って俺の背中を押してくれた。

桃香「今日は私が料理を作りますね！今日の為に覚えたんですよ！
！楽しみにしてください！！！」

そう言って俺に美味しい料理を作ってくれた。

愛紗「たまには私と共に鍛錬などいかがですか？」

そう言って俺の体を動かしてくれた。

鈴々「お兄ちゃん！今日は鈴々と一緒に遊ぶのだ！！！」

翠「お、あたしも混ざっていいか!？」

そう言って俺を外に出させた。

紫苑「ご主人様、本日は私と共にお酒でもいかがですか？」

星「私も共にメンマと共に一杯」

そう言って俺に酒を飲ませて俺を強引に酔わせて眠らせてくれた。

朱里「ご主人様。この書類は私がやりますよ!」

そう言って俺への負担を減らすために努力してくれた。

皆皆、俺なんかの為に、必死で頑張ってくれた。

だから俺は・・・出ることができたんだ。

漆黒の闇の世界から・・・抜け出す事が出来たんだ。

（回想終了）

朝我「人は弱い。だから、誰か・・・支えてくれる人が必要なんだ。
フェイトに、アルフがいたようにな」

フェイト「アル・・・フ」

少しずつ、フェイトの瞳から光が戻ってきた。

朝我「さっき、俺は家族の話をしたよな？俺さ、実は両親いないんだ」

フェイト「え・・・」

朝我「俺、『ストリートチルドレン』でさ、この『朝我零』って名前も、実は“ある人”からの貰い物なんだ」

フェイト「・・・」

フェイトは起き上がって、俺の話を聞いていた。

本当は、なのは達の援軍に行きたい。

けれど、その前に・・・変えたかった、一人の少女の運命を変える。

だから俺は話しを続けた。

朝我「夜我也俺と同じストリートチルドレンで、俺と対立していたんだけど、まあそれから色々あって現在にいたるんだ」

フェイト「どうして・・・仲良くなったの？」

朝我「簡単だ。たった一人、たった一人でも、俺達に声をかけてくれた人がいたんだ。俺たちに、手を差し出して、声をかけて・・・俺達の世界を変えてくれ人がいたんだ。フェイトにもいただろ？」

フェイト「・・・あ」

フェイトは、思い出す。

何度も何度も、手を差し出して・・・声をかけてくれた・・・桜光の少女のことを。

友達になりたいと声をかけてくれる人がいた。

朝我「あいつは今、お前の運命をぶっ飛ばしに行ってる。それは、エゴなのかもしれない。だって、フェイトには何も言わずにやってくるから。後は・・・フェイト。お前だけだよ」

そう言って俺は、フェイトに手を差し出す。

朝我「俺は、フェイト。お前の運命を変える。なのはも、ユーノやアルフだって協力してくれる。だから・・・俺のこの手を取るか、取らないかだ」

フェイト「・・・・」

そしてフェイトはしばし迷う。

フェイトは迷いの中、最後の質問をする。

フェイト「ねえ、私の全ては・・・終わったの？」

その質問に朝我は即答する。

朝我「ああ。終わったよ」

フェイト「・・・そっか」

また暗い表情をするが、朝我は「だけど・・・」と言ってから、再び話しを続ける。

朝我「ここからが、この瞬間が、また新たな始まりだ」

そう言って俺はフェイトの頭に手を乗せていう。

フェイト「これ・・・」

朝我「さっきの会話中にずっと魔力流して修理を促してた。これでいけるだろ?」

バルデツシュ「ありがとうございます」

朝我「礼はいい。さあ・・・行くぞ!」

フェイト「うん!!」

そう言ってフェイトはBJを着て、俺と共にアースラを出た。

そう、運命を断ち切る為。

新しい自分を始めるため。

そして――伝えるべき想いを伝えるため。

様々な終焉に向けて（前書き）

やべ・・・ものすごい勢いで投稿してたよ（――；）

各方面から『少しは自重しろ』とか言われそう（――；）

様々な終焉に向けて

夜我 Side

俺は愛紗達を連れて時空の庭園に行き、迫り来る敵を薙ぎ払っていく。

俺は姫鶴一文字を手に、大量の敵を切り裂く。

夜我

1

1

『銀』

しろがね



純白に染まる斬撃が傀儡兵を10体ほど切り裂く。

なのは「デイベインシューター・・・シュート!!!!!!!!!!」

なのはは桜光の弾丸を放って一体一体倒していく。

ユーノやアルフはバインドで敵の動きを防ぐ。

クロノは一人単独で奥に進んでいる・・・速く行かないとな。

夜我「!?!?なのは!?!」

ユーノ「なのは!?!?!」

なのは「え・・・」

油断した。

なのはの背後から一体の傀儡兵が迫っていた。

——サンダーレイジ——！！！！！！

だがその傀儡兵は、突如やってきた雷によって破壊された。

夜我「!?!」

ユーノ「この光……」

アルフ「フェイト!!!!」

アルフの喜ぶ声が、上に表れる、金髪の髪の少女。

フェイト「・・・」

なのは「フェイトちゃん!!」

フェイトはなのはのもとに向かう。

なのは・フェイト「!?!」

だが、壁を突き破って肩にバレルを展開して砲撃を放とうとする傀儡兵が現れた。

更に背後から3体の傀儡兵。

朝我

『

—

『獄炎閃・裂斬極焰刃』

—

』

なのはとフェイトに迫る3体の傀儡兵は強力な焰の一閃によって撃破された。

そしてなのはとフェイトに肩と肩を合わせるように立つ、一人の少年。

なのは「朝我さん!!」

フェイト「・・・ありがとう」

朝我「どういたしまして。前の敵は二人に任せた」

なのは・フェイト「うん」

そう言って朝我は目にも止まらぬ速度で残りの傀儡を倒していく。

夜我「俺も、負けてられないな!!」

愛紗「私も!!!」

鈴々「鈴々も同じなのだ!!」

星「負けてはおれぬな!」

紫苑「全力で援護します!」

翠「行くぞ!!」

そう言って俺たちも共に戦っていく。

なのは・フェイト「せーのっ……!!……!!……!!」
「」

夜我「うえ・・・」

その瞬間、巨大な砲撃が放たれた。

朝我「お・・・おお・・・」

夜我「これはまた・・・」

俺と朝我は、なのはとフェイトとは全力全開でやり合わないよう
しようとして、心から誓うのだった。

それから二手に分かれ、なのはとユーノ。

俺はフェイトやアルフ、愛紗達と共に向かった。

向かうのは、プレシアの場所。

フェイトは、伝えたいことがあるからと言って、この道を選んだ。

朝我「!？」

だが、前に更に大量の傀儡兵が現れた。

夜我「朝我！フェイトを連れて先に行け！」

朝我「・・・良いのか？」

愛紗「ご安心を。私達も共に戦います」

朝我「・・・分かった。任せた」

そう言って俺はフェイトとアルフの3人で先に進んだ。

夜我「さて・・・行きますか」

愛紗「はい!!」

そして俺達はプレシアのもとに着く。

そこには既に次元震を抑えているリンディ。

俺達はプレシア達の前に出る。

ユーノ《こちらユーノ・スクライア、駆動炉を無事封印！なのはも今そっちに向かってます！》

流石なのは達だ。任せておいて正解だな。

リンディ《忘れられし都アルハザード、そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧な、ただの伝説です！》

プレシア「違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が碎かれた時、その狭間に滑落していく輝き。道は、確かにそこにある」

アルハザードか・・・懐かしいな。

俺はなのは達を失った時、プレシアと同じくアルハザードについて調べて、実際に行こうかと努力しまくった。

だが結局見つからず、悲しみに暮れた。

後悔しかなかった。

プレシア。お前・・・俺と同じ運命を辿るつもりなのか!?

リンディ《随分と分の悪い賭けね。あなたはそこに行って、一体何を
するの? 失った時間と、犯した過ちを取り戻すの?》

プレシア「そうよ。私は取り戻す。私とアリシアの――過去と未来を」

朝我「っ!?!」

俺は、プレシアの言葉を否定出来なかった。

俺も・・・今を変えて・・・未来を変えるためにここにいる。

プレシア「取り戻すの。こんなはずじゃなかった、世界の全てを!」

クロノ「ふざけるな!!!」

朝我「!?!」

その時、クロノが俺たちの前に現れる。

クロノ「世界はいつだって、『こんなはずじゃないこと』ばかりだよ!!! ずっと昔からいつだって、誰だって皆そうなんだ!!!」

朝我「クロノ・・・」

クロノ「こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向か

うかは個人の自由だ。だけど自分の勝手な悲しみに、無関係の人間まで巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない!!!!」

朝我「っ・・・」

その言葉は、プレシアに伝えている筈なのに、何故か俺の胸にグサリと刺さる様に響いた。

それは、未来に何も伝えずに置いて来た仲間への想い。

この時代に夜我達を迎えて、巻き込んでしまった事。

俺は、俺自身の悲しみに皆を巻き込んでしまっているんじゃないか。そう思ってしまったてならない。

朝我「おい、プレシア。ちょっと良いか？」

プレシア「・・・」

プレシアは俺の声に反応してこちらを向き、真っ先にフェイトを睨んだ。

だけど、その事は後にして・・・まずは、フェイトの想いを聞きたい、そして、伝えてあげたい。

フェイト「っ・・・」

フェイトは先ほどのプレシアの発言と今の態度に少し怯えている。

だから俺は、フェイトの右手をそっと握ってあげた。

フェイト「あ／／／／／」

朝我「俺がいるから、安心しろ」

フェイト「・・・うん」

そう言ってフェイトは俺より一步前にでて、プレシアに話す。

フェイト「あなたに言いたいことがあって来ました」

そう、俺はこの日の為に、必死に頑張ってきた。

運命を・・・そして未来を変える、その一つ。

フェイト「私は、アリシア・テストロッサじゃありません。あなたが作った、ただの人形なのかもしれません」

それが、最初の想い。

フェイト「だけど私は——フェイト・テストロッサは、あなたに生み出して貰った。あなたに育てて貰った。あなたの——娘です」

プレシア「ふ・・・ふふ、はは・・・あーっはっはっ！……！！」

だがプレシアは高笑いして言う。

プレシア「だから何？今更あなたを娘と思えというの？」

ここで俺は、『それでも、お前はフェイトの母だ』と言いたかった。

だけど、これはフェイトとプレシアの・・・家族の問題だから・・・俺が交わってはいけない。

参加しては・・・いけない。

フェイト「あなたが――それを望むなら」

その言葉にフェイトはそう答えて続ける。

フェイト「それを望むなら私は、世界中の誰からも、どんな出来事からも――あなたを守る」

それはきつと、例え嫌われようとも・・・分かっているでも伝えた気持ちの一つ。

一度は嫌われた。拒絶された。否定された。

けれど、生んでくれた母親への愛は、例え作られた記憶だとしても・・・フェイトの胸にあるから。

だからこそ、この場で・・・今、その想いを・・・伝えているんだ。

フェイト「私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが――私の母さんだから」

そしてフェイトは、フェイト・テストロッサとしての答えと想いを、プレシアに伝えた。

プレシア「……………」

しばらくの沈黙の後、プレシアは答える。

プレシア「……………くだらないわ」

だが、声は拒絶だった。

朝我「ほんとに下らないか？」

プレシア「……………何が言いたい……………」

朝我「プレシア。ほんとはお前、気づいてるんじゃないか？ フェイトは……………例えば血が繋がってなくても、お前の娘だって事。お前の……………唯一無二の、大切な……………アリシアの妹だってこと」

プレシア「!？」

その瞬間、初めてプレシアの表情が大きく変化した。

俺は追い打ちをかけるように言葉を続ける。

朝我「アリシアは、お前にお願ひしたんじゃないのか？ 『妹が欲しい』って」

プレシア「!？ なんで・・・それを・・・!？」

ほんとに・・・そうだったのか。

朝我「・・・アリシアが、俺に教えてくれたよ」

ここに来る少し前に遡る。

俺は途中、10年後のフェイトが俺に話しを掛けてきた。

朝我「え・・・約束？」

フェイト「うん。アリシアの記憶が私の中にあるのは知ってると思うけど、実はアリシアの記憶の中に『大切な約束』があったんだ」

朝我「その約束って？」

フェイト「——『妹が欲しい』だって」

朝我「妹・・・！？それって!？」

フェイト「うん。私の事」

そして今。

朝我「大切な約束、今叶ったじゃねえか。もう・・・こんな事をする必要はない。お前は、妹が残した最後の約束・・・護って、妹を大切にしてやれよ」

プレシア「・・・」

徐々に女の涙の表情に変わっていく、プレシア。

次元の狭間に落ちていく涙。

クロノ「マズい!!!!」

クロノが叫んだ瞬間、庭園の揺れが加速する。

次元を揺らす震動が、周囲に波紋を呼び起こす。

エイミィ『艦長、ダメです!! 庭園が崩れます、戻ってください!! この規模の崩壊なら、次元断層も起こりませんから!!!! クロノ君達も脱出して!!!! 崩壊まで、もう時間がないの!!!!』

エイミィの声に周囲の緊張感が高まる。床や壁、天井が崩れ始め、虚数空間に飲み込まれていく。

クロノ「了解した。皆!!」

クロノの言葉に、俺達は反応するが、フェイトとプレシアは違った。

二人は動かず、プレシアは話し出す。

プレシア「それでも・・・私は向かう、アルハザードへ! そして全てを取り戻す!!!!!! 過去も、未来も——たった一つの幸福

も!!!!!!!!!!」

母さんがそう叫び、虚数空間・・・次元の狭間に飛び込んで行った。

フェイト「母さん!!!!!!!!!!!!!!」

フェイトは必死に手を伸ばす。

だが、手は届かず、アルフが落ちそうになったフェイトをキャッチする。

でも、フェイトの手は・・・伸ばしたままで、それでも必死にもがくように手を伸ばした。

だけど・・・届かない。

俺は――俺と同じように、届かない手を・・・見てるだけなの
か！？

あの時――なのはを救えなかった。

手が届かなかった。

その悲しみを、後悔を——フェイトにまで経験させるつもりなのか！？

朝我「……っざけんな」

俺は、走り出す。

クロノ「朝我！」

そして俺たちのもとにたどり着いたなのは、ユーノ、夜我や愛紗達
が、俺に声をかける。

なのは「朝我さん!!!!!!!!!!」

夜我「朝我ああああ!!!!!!!!!!」

朝我「もう――間に合わないのは――うんざりなんだよお
おとおとおお……!」

そう言って、俺はプレシアのもとにダイブして、プレシアの手を掴む。

プレシア「なぜ・・・」

朝我「もう・・・届かないで悲しむの、嫌だからさ」

そうやって俺は、プレシアとアリシアの二人を連れて――次元
の狭間に堕ちていった。

なのは「あ……………」

フェイト「や……………」

夜我「……………つくそ……………」

愛紗「ご主人……………様……………」

鈴々「お兄……………ちゃん……………」

「はい、フェイト・グランド・エクス・ナノ。」

この日、俺・・・朝我零は、プレシア・テストロッサ。アリシア・テストロッサと共に、次元の狭間へ堕ちていった。

様々な終焉に向けて（後書き）

相良「え．．．朝我が．．．死んだ．．．」

ルチア「嘘．．．．」

I K A 「次回も．．．お楽しみに」

次回、魔法少女リリカルなのは 〽全てを変えることが出来るなら
〽 最終回

『別れた空に願う言の葉』

なのは・フェイト「それでも、あの空に．．．貴方がいると信じて」

最終回 別れた空に願う言の葉（前書き）

今回で第一章最終回です！！！！ほんとありがとうございます！！！！

しかも丁度35話！！（どこが丁度？）

その他の報告はあとがきにかかせていただきます。

それでは第一章最終回、どうぞ。

最終回 別れた空に願う言の葉

・・・数日後。

事件は集結し、私はユーノ君と共に、平和な日常に戻る。

ただ一つ違うのは、朝我さんが居なくなったこと。

結局あの事件の時、朝我さんは次元の狭間に落ちて・・・

それでも私は朝我さんが生きてるって信じてる。

だって、朝我さんが簡単に死ぬわけ・・・ないんだから。

なのは「え・・・」

そして朝、私に電話が来る。

電話の主は管理局。

良い情報で、今からフェイトちゃんとお話出来る時間があるから、すぐに来てくれとのこと。

私はユーノ君を連れて、急いで向かった。

なのは「なにっていいのか急に分からなくなっちゃったね」

フェイト「うん・・・あのね」

なのは「うん？」

フェイト「この前の返事友達になるっていう・・・」

なのは「うん……うん！」

フェイト「君が言うように友達になりたい！でもどうすればいいのかわからないよ」

そうだね……私も、最初は分からない。

なのは「簡単だよ。名前を呼んで、君とかあなたじゃなくて名前をよんで！わたしは高町なのはだよ」

フェイト「なの……は」

恥ずかしそうに、それでも一文字一文字を大切に……私の名前を読んでもくれた。

ちょっと照れるな……こうやって名前を呼んでもらって。

なのは「うん」

フェイト「なのは……」

なのは「うん！」

フェイト「なのは……！」

なのは「うん……！」

そう言って私達は抱きしめ合う。

フェイト「ありがとう。なのは」

なのは「うん……!!」

嬉しくて、嬉しくて、嬉しすぎて。

気が付けば私達は、涙を流していた。

フェイト「泣かないで、なのは。なのはが泣いてると、私も悲しいよ」

なのは「っ……フェイトちゃん!!」

私はフェイトちゃんをぎゅうつと……抱きしめる。

フェイト「なのはは温かいね」

クロノ「二人とも、そろそろ時間だ」

そう言ってクロノ君が声をかけてくる。

なのは「うん。……それじゃ、最後に……これ」

そう言って私はフェイトちゃんに、リボンを渡す。

フェイト「それじゃ・・私も」

そう言ってフェイトちゃんもリボンを私に渡した。

フェイト「ありがとう、なのは」

なのは「うん、フェイトちゃん」

そして私とフェイトちゃんは、最後の挨拶をする。

フェイト「きつとまた」

なのは「うん、きつとまた」

アルフ「ほら、預かり物」

そう言ってアルフさんは私の肩にユーノ君を置いてくれた。

なのは「ありがとう。アルフさんも元気だね」

アルフ「ああ、色々ありがとね、なのは。ユーノ」

ニツコリと微笑みながら、アルフさんが離れていった。

クロノ「それじゃ、僕も」

なのは「クロノ君もまたね」

クロノ「ああ」

軽く挨拶を交わすと、クロノ君も離れた。

そしてフェイトちゃんたちは転送されていく。

なのは「っ！」

フェイトちゃんは、小さく手を振ってくれた。

私は最初は驚いたけど、すぐに手を振り返した。

なのは「フェイトちゃん!!!! またね!!!!!!」

フェイト「なのはも!!!! また!!!!!!」

そう言って、フェイトちゃん達は消えていきました。

なのは「・・・」

ユーノ「なのは・・・」

なのは「帰ろ。ユーノ君」

ユーノ「うん」

そう言って私達は、日常に帰りました。

ただ、ただやっぱり忘れられないのは・・・私の人生の、最初の友達。

なのは「・・・また、会えるよね？」

あの人と私が、一緒に飛んでいた・・・この広い空に、そう言った。

夜我 Side

夜我「……」

俺は一度、桃香達を連れて10年後の未来に戻った。

それは、あいつが頑張った事によって……何か変化が起こっているのでは無いか？

と言う期待と、あいつの存在は今、どうなっているのかが気になったからだ。

そして戻る、機動六課。

夜我「ただいま戻りました」

スバル「あ……夜我……さん」

懐かしい……青い髪の女の子。

オレンジ色の髪の子や、ピンク色の少女に、赤い髪の男の子。

夜我「ただいま。スバル、ティアナ、キャロ、エリオ」

俺は4人の後輩に挨拶を終えると、早速本題に入る。

夜我「隊長達は復帰したか？」

ティアナ「シグナム副隊長やシャル先生は既に復帰してます。ただ――」

ここで俺は、衝撃的な事を聞く。

ティアナ「フェイト隊長がスターズの隊長やこの六課の部隊長を代理でやってるんで、疲れているみたいなんです」

夜我「え・・・」

今・・・フェイトって言ったか・・・

夜我「フェイトは今・・・どこにいる？」

ティアナ「フェイト隊長でしたら、部隊長室に」

夜我「分かった。ありがとう！」

そう言って俺は全速力で走って部隊長室に向かった。

そして俺は部隊長室に着くと、ノックもせずに入る。

夜我「失礼する！」

フェイト「あ……夜我」

夜我「な……!？」

そこには、正真正銘、10年後……つまり死んだはずのフェイトが、生きていたのだ。

フェイト「おかえりなさい。出張任務ご苦労さま」

夜我「あ、ああ」

俺は桃香達を連れて、出張任務と言う名目で10年前に飛んでいた。

フェイト「ごめん。聞きたいこととかあったりするんだけど、私も忙しくて……」

確かに、部隊長を務めるだけあって忙しそうだ。

って事はつまり・・・

——フェイト・テストロッサ・ハラオウンの未来が変わった。

夜我「・・・悪いフェイト。また出張任務に行くことになる」

フェイト「・・・そう、分かった。気を付けてね」

夜我「フェイトもな。偶には周りの奴ら、頼れよな」

そう言って俺は部隊長室を出て、六課が出る。

誰にも挨拶する必要なんて・・・ないからな。

俺は仲間を選別し、必要なメンバーを揃えて、再び発動する。

夜我「あいつが変えられなかった残りの今は――俺が変えてやるよ」

そう言って俺は全ての力を込めて、発動する。

夜我

『始まりの世界』
ダ・カーポ

俺が願うのは、別れてしまったあいつが、同じ空にいることを祈って。

そして物語は――A、Sへ。

最終回 別れた空に願う言の葉（後書き）

これで第一章は終わり、A、Sに入ります。

原作の内容に、オリジナルのストーリーも入り交じり、更に新たなキャラの登場も・・・

A、Sも楽しみにまっけてください！！！！

新たなプロローグ（前書き）

さて、今回よりA、S・・・闇の書編のスタートです！！

まあ色々な原作が混ざってる部分が出るかと思いますが、駄作ですのでそのへんはご理解頂きたい（――；）

新たなプロローグ

運命を変えるために時を超え、海鳴市へやってきた少年は、運命を変えるために自らの命を犠牲にして様々な無茶をした。

その結果、次元の狭間へと堕ちていった。

誰もが悲しみに暮れるが、事件はまたやってくる。

それは、彼が変えたかった、もう一つの過去。

もし変えることが出来るのなら、未来は今まで以上に大きく変化する。

そう、この一年と言う時間は、一つの分岐点^{ターニングポイント}なのだ。

彼が行方不明になったその年の冬、新たな物語が始まる。

結果を変えるために飛んだ彼らは、過去をどの様に・・・変えるのか？

そして彼は運命を、未来を変えるために様々な奇跡を起こす。

新たな仲間と、新たな刀。

そして戦うのは、か弱き主の運命を変える為に戦う騎士達。

運命を変える者同士の戦いの結末とは・・・

新たなプロローグ（後書き）

てな感じで始まります、新たな物語。

次回からは朝我Sideと夜我Sideの両方を中心に初めて行きます！

家族として、親として

——ここは、どこだ？——

——視界が真っ暗だ——

——体が言うことを聞かない——

――俺は、死んだのか――

――いや、死ぬわけにはいかない、まだ・・まだ、死ねない――

――まだ・・・変えなきゃいけない運命があるんだ!!――

俺は――護るんだ……！救うんだ……！そして――
――変えるんだ……！――

『目覚めなさい』

――誰だ……

『私達は、もう大丈夫。だから、起きなさい』

——大人の・・・女性の声が聞こえる。

『貴方の、大切な人が・・・待ってるんですよ?』

——大切な人・・・!?

朝我「っ!？」

俺は、目を覚ました。

????? 「目を覚ましたみたいね」

朝我「え・・・!？」

俺は目覚めた直後、俺に声をかけた人に驚きを隠せなかった。

朝我「プレシア・・・テストロッサ」

そこにいたのは、フェイトの運命の中心にいた人物。

そして、フェイトの母親である、プレシア・テストロッサだった。

だが俺の覚えているプレシアと違って、優しい表情で・・・母って印象を持つプレシアだった。

プレシア「ようやく目覚めたようね」

朝我「あ．．．えと．．．プレシア．．．なのか？」

プレシア「ええ。“あの”プレシアよ」

自覚はあるようで、フェイトを傷つけていた自分だと言った。

朝我「ここは．．．」

辺りを見回すと、そこは病室だった。

個室となっていて、俺は白いベットで眠っていたらしい．．．．．
．．．って．．．．．

朝我「あ．．．れ．．．」

何故か毛布から出ている上半身がスースーするなと思ったら．．．

朝我「な、何で上半身裸なわけ!？」

しかも毛布で隠れていた下半身も毛布を広げずにこそそこそ確認すると下着一枚も纏っていない状態だった。

プレシア「あ、ごめんなさい。服、今持ってくるわね」

そう言ってプレシアは部屋を出た。

朝我「．．．」

そして取り残される俺は、窓を開けて毛布を下半身を隠すように巻いて見る。

朝我「こ……これは……」

俺は、見る目を疑った。

そこに広がるのは、ミッドよりも文化が進んだのを思わせるような建築物や、魔法陣を展開して走行する車やバイク。

そしてスバルの使うウィングロードを思わせる道が無数に広がり、そこを人々や車などが行き来していた。

朝我「まさか……ここは……!?!」

俺は、一つの結果を思いついた。

朝我「ここは――アルハザード!？」

プレシアが、ただ一人を救うためにたどり着きたかった世界。

だが・・・ジュエルシードが少なくて・・・いけなかったんじゃない・・・

すると、病室のドアが開く音が聞こえた。

プレシアか・・・

????? 「お母様! おは y・・・って・・・え?」

朝我「あ・・・」

そこに現れたのはプレシアではなく、金髪の長い髪のフェイトそっくりの少女。

そして彼女は数秒間、フリーズした後。

????? 「きゃあああああああああああああああ／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／」

朝我「お、おい!!」

その子は大きな悲鳴をあげて顔を真っ赤にし、恐ろしい速度で走り去っていった。

朝我「今の娘・・・まさか・・・」

フェイトと瓜二つ・・・

朝我「まさか・・・アリ、シア・・・」

このアルハザードで・・・取り戻せたのか？

朝我「・・・って」

今の問題はそこじゃないな。

もし彼女がアリシアとすれば、俺は今・・・彼女に相当失礼な事をしたことになる。

てか、上半身見ただけで顔真っ赤とか・・・ウブだね。

ああ・・・後で謝って置かないと。

プレシア「服持ってきたわよ？」

朝我「あ、ありがとうございます」

それから俺は服を着て、プレシアと話をする。

朝我「さっき、アリシアと会いましたよ」

プレシア「ああ・・・だからさっき・・・」

プレシアもアリシアの事は知っているらしく、俺を見て逃げたのだと納得したらしい。

プレシア「あの子、ピュアに育ってくれたから、そう言う免疫無いのよ」

ああ・・・今の世の中では必要不可欠な免疫なのになあ・・・

朝我「というか・・・アリシア、回復したんですね」

プレシア「ええ。あなたのおかげよ」

俺？

朝我「俺が何かしましたか？」

プレシア「これよ」

そう言ってプレシアは自らが持つ杖を出し、杖についている紫色の宝石からジュエルシードが現れた。

朝我「ジュエルシード・・・！？」

数が足りなかったんじゃないのか！？

プレシア「あなたも、ジュエルシードを持っていたわよね？」

朝我「・・・あ」

そうか、俺が持っていたジュエルシードが力を貸してくれたのか。

プレシア「あなたの持つジュエルシードは他のジュエルシードと違い、あなたの魔力の影響を受けているから、足りない分の全てを補っていたの」

朝我「!？」

つまり・・・俺のしたことは、無駄では無かったんだ。

プレシア「本当に・・・ありがとう」

俺の手を握って、感謝の気持ちを込めてそう言った。

朝我「いえ。俺はただ・・・変えたかっただけだから・・・」

プレシア「・・・何が、あったの？」

プレシアは、俺の事を聞いてきた。

朝我「・・・プレシアには、話しても良いかな」

そう言って俺は、今日までに至る経緯を話した。

10年後から来たと言うこと。

フェイト達が死んだ事。

だからこの世界に来て、運命を変えるために来たということ。

プレシア「そんな・・・事があったの」

朝我「はい。だから俺は、その運命を・・・未来を変えるために過去に来たんです」

プレシア「・・・」

何故俺は、プレシアに話したのだろうか？

ふとそう思ったが、すぐに解決した。

それは、プレシアも俺と同じだったからだ。

プレシアだって、取り戻したい時間があった。

俺と同じように・・・大切な人を失ったから、大切な人を救う為に精一杯だったんだ。

その結果・・・こんな犯罪まで行なってしまった。

プレシア「ごめんなさい・・・私、母親失格ね」

プレシアは俯いて、涙を流しながらそう言った。

朝我「・・・」

その姿に、俺は正直な想いを伝える。

朝我「確かに、今の貴方は母親失格だ」

プレシア「・・・」

俺は続けて、こういった。

朝我「だけど、貴方を母親だって想ってくれている人がいる。貴方を、大切な人だって・・・大切な家族だって思ってくれている人がいる。貴方が自分自身を母親の権利がないと言っても、俺たちが母親と認めなくても、彼女達は・・・フェイトやアリシアは、貴方を母親だって信じてる」

プレシア「・・・」

朝我「だから、俺はフェイト達が信じる貴方を信じる。それじゃ足りないか？」

プレシア「・・・いいえ。十分よ」

プレシアは目尻に溜まった涙を指で拭いていた。

だけど、俺はプレシアの代わりに涙を拭いた。

プレシア「え／／／／／／／／」

朝我「今だけは、フェイトもアリシアも見えないから・・・素直で良いと思う」

プレシア「・・・ああ・・・」

それからしばらくの間、プレシアは俺に抱きつき、吐き出したいだけ悲しみの感情を解き放った。

俺はその想いを抱きとめ、この人が泣き止みまですつと頭を撫でてあげた。

これしか・・・部外者^{おれには}できないから。

それからしばらくし、プレシアは泣き止んだのだが・・・

プレシア「うう／＼／＼／＼／＼／」

朝我「ど、どうしました？」

プレシアは俺が使っていた毛布で顔を隠していた。

プレシア「は、恥ずかしい所を見られたから少し／＼／＼／＼／」

朝我「あ・・・ああ、そうか」

まあ男に抱きついてだいの大人が号泣だもんな・・・

朝我「あ、安心しろ。記憶の奥底に閉じ込めておくから」

プレシア「覚えているつもりなのねえ・・・（；ω；、）」

ど、どうしろと？

朝我「ま、いざとなった時の脅しにはちょうどいいかもなあ」

ニヤリと俺はそう言うのとプレシアは可愛らしく頬を膨らませて俺に言う。

プレシア「あ、貴方・・・やっぱりいい人じゃない・・・」

朝我「あなたに言われたくない」

プレシア「むう・・・」

朝我「ふむ・・・」

俺とプレシアは何となく睨み合う。

???? 「あ、あの……」

朝我「あ……」

プレシア「アリシア？」

気づくとドアを開けてアリシアが部屋に入ってきた。

アリシアはプレシアの隣について話をする。

アリシア「さ、さっきはごめんなさいい！」

○」ペコリと45。で謝った。

朝我「いや、俺が裸だったのが悪かったんだ。別に謝る必要ない」

アリシア「はい……」

それでも反省しているみたいで、結構落ち込んでいるふうにも見える。

アリシア「私の命の恩人なのに……失礼なことしちゃったよ……」

・
」

朝我「え・・・恩人？」

アリシア「うん、お母様がね、お兄さんが助けてくれたんだって」

朝我「・・・そうか」

なんか・・・嬉しいな。

俺は、こうやって感謝されるために過去に飛んだわけじゃない。

けれど、今は・・・この世に来て良かったと思う。

朝我「それで、俺は戻れるのか？」

プレシア「ええ。だけどこのアルハザードと地球の時間軸は違うわ。もしかしたら、季節は変わりすぎているかも」

朝我「それでも、俺はいかないといけないんだ！」

そう、俺はまだ・・・変えなきゃいけない過去がある。

だから、迷っている時間なんてない。

プレシア「・・・分かったわ。私も一緒に」

朝我「ホントか!？」

アリシア「私も行く」

朝我「・・・ありがとう」

そう言って俺達は、地球に向かって転移を始めた。

家族として、親として（後書き）

さてさて始めましたA、S

いきなり解決した事も含めて、次回より本格的に原作と同じ様にスタートです!!

皆さん、応援宜しくです!!

新たな始まりは冬の夜に（前書き）

さてさて今回より本編が入っていきます！

新たな始まりは冬の夜に

夜我 Side

夜我「到着」

俺達は再び地球、海鳴市にある家にたどり着いた。

夜我「・・・」

家に戻っても、やはりあいつは戻ってきていない。

夜我「朝我・・・」

届かなかった手を届かせるために、自分を犠牲にした。

その姿は、無謀なのに・・・美しく見えてしまう。

それは、あいつの苦しかった日々を知っているから。

大切な人を何人も失い、悲しみに暮れていたあの時を・・・

夜我「・・・いや、悩んでも仕方ないか」

俺は台所の冷蔵庫の中身を確認した。

夜我「・・・」

中身は無い。

夜我「買い物か・・・朱里、紫苑、流琉、明命。買い物行くぞ」
俺はその4人を呼ぶと、4人は猫とじゃれながら現れた。

夜我「明命。お前また猫拾ってきたのか？」

明命「だって猫様ですよ!？」

いや、よくわからん。

明命「夜我様にはわかりませんか!？この猫様の可愛さが!!!!!!」
」

そう言って猫を俺の目の前に向けた。

夜我「無茶言うな。俺は猫に好かないんだ」

そう言って猫に人差し指を出すと猫が俺の人差し指をがぷりと噛み付いた。

夜我「~~~~~!!!!!!」

朝我だとなつくのにな・・・畜生。

夜我「はぁ・・・酷い目にあった・・・」

俺は4人に買い物を見せて、スーパーの外に出る。

夜我「はぁ・・・寒」

ここの着いた時には季節は冬になっていた。

年を越していない所を見ると、半年くらいの時差があったのか・・・スーパーのカレンダーを見るとクリスマスフェアがどうのこうのと

書いてあった。

つまり今は12月。

だが家にあいつが戻っていた跡がないということは・・・

夜我「ったく、俺たちに迷惑かけやがって・・・」

俺だけじゃなくて、桃香達だって悲しかった。

だけど・・・俺はあいつが生きてると信じてる。

それまでの間は、俺達が彼女達の未来を変えないとな。

夜我「・・・っ!？」

刹那、世界が変化した。

夜我「結界か!？」

しかも懐かしい魔力を感じる・・・

朱里「夜我さん!」

朱里達が慌てて俺のもとに来た。

紫苑「これって・・・」

夜我「結界だ。どうやら閉じ込められたみたいだ」

海鳴市での突然の結界・・・何かが動き出したと考えるのが妥当か。

夜我「明命、今すぐ家に戻って皆にそこを動くなと伝えてくれ」

明命「はい!」

そう言うのと明命は民家の屋根の上に飛び乗ってまるで忍者の様に走っていった。

夜我「俺達は迎撃だ。ここ近くで多数の魔力を感じるからな」

朱里・紫苑・流琉「「はい!」「」」

俺は3人を連れて冬の夜道を走り出す。

なのは Side

なのは「はあ、はあ、はあ・・・」

私は今、結界の中に閉じ込められ、突然襲いかかってきた赤い服の女の子に倒されて、ユーノ君の治癒魔法で回復しています。

今日、久しぶりにフェイトちゃんに会えて、本当に嬉しいけど・・・戦いでの再会なのは残念だな。

ユーノ「なのは、大丈夫？」

なのは「うん。それよりも、フェイトちゃんが・・・」

今、フェイトちゃんとアルフさんが戦ってくれてるけど、相手の騎士さんがすごく強くて・・・

ユーノ「このままじゃ・・・」

ユーノ君の不安そうな声。

なのは「フェイトちゃん・・・アルフさん・・・」

私は――怖かった。

全身の体温が抜けて行くほど・・・寒くて、怖かった。

また――失ってしまうの？

あの時、届かなかった手・
・
・

もう・・・二度と失いたくない!!!!!!

なのは「レイジングハート・・・辛いけど、行ける？」

そう言うと、ボロボロになったレイジングハートは答える。

レイジングハート「マスター程辛くはございません。行けます!」

なのは「・・・うん!!!!!!」

そう言って私はレイジングハートの先を空に向け、空気中の魔力を集める。

ユーノ「なのは!!!! 無茶だ!!!! その状態で放ったら、レイジングハートが!!!!」

レイジングハート「問題ありません」

なのは「大丈夫。それに、今の私には・・・これしかできないから」

これしかできない。

だから、これをやる。

そうしないと、一生後悔するから。

なのは「スターライト!!!!!!!!!!」

そして私は砲撃を放とうとした。

なのは「ブレイk——っ!？」

だけど、私の動きは止まった。

なのは「うつ……あぁ……」

突然、私の胸から人の手と・・・光る何かが現れて・・・

なのは「い・・・や・・・」

何これ・・・いや・・・いやだ・・・

全身の血がサーッと抜けていく感覚。

血の流れを直に感じる……

怖い……怖いよお……

『? ?』
『銀』しろがね

なのは「うつ・・・」

薄れる意識の中、最後に見たのは――

夜我「間に合ってよかった。少し休んでろ」

なのは「・・・ん」

そして私は意識を捨てた。

夜我 Side

夜我「・・・」

俺はなのはをゆっくりとその場に寝かせ、純白の刀を手に、前に出る。

夜我「さて――参る……!!」

そして俺は純白の光を纏い、冬の夜空を舞う。

騎士VS剣士（前書き）

学校が冬休みに入って小説に時間が使えるようになってちょっと嬉しいです。

まあネタが浮かばなければ何にもならないけれど。

騎士VS剣士

夜我 Side

夜我「姫鶴一文字」

俺は純白の刀を出すと、再び俺の背後に純白の美女が現れる。

鶴「この度は、どのような加護をお求めになられますか？」

夜我「俺は飛翔の翼とこの刃に、切り裂く純白の一閃を求める」

鶴「我が聖約の主に、飛翔の翼と純白の一閃を――」

そう言う俺の全身は純白の光を纏い、刀も純白の光を纏った。

夜我「鶴。いつもありがとう」

鶴「い、いえ、滅相もございません／＼」

夜我「・・・その加護、存分に使わせて貰う」

鶴「はい。武運を祈ります」

そう言って鶴は光に消えた。

夜我「・・・行くか」

そう言って俺は羽ばたいた。

夜我「な・・・フェイト!!」

フェイト「っ!?!」

フェイトのもとに着くと、フェイトは騎士甲冑を纏った一人の騎士によって飛ばされ、それを俺がキャッチした。

夜我「・・・バルディッシュが・・・」

バルディッシュはなのはのレイジングハートの様にボロボロになっていた。

これじゃ戦えない・・・

夜我「フェイト。悪いがなのはのもとに向かってくれ」

フェイト「え・・・でも・・・」

夜我「気づかないか? お前が“今ここにいること”がどれほど“迷惑”か」

フェイト「っ・・・」

フェイトは悔しそうに下唇を噛み、俺の言う通りなのはのもとへ向かった。

???? 「話は済んだか」

夜我「・・・」

俺はピンク色の凜とした女騎士を見る。

懐かしい・・・なんて懐かしい姿。

夜我「・・・シグナムだな」

シグナム「何・・・何故私の名を？」

夜我「ちよつとな。それより、お前は何故突如襲いかかってきた？」

シグナム「・・・」

そのことに関しては答える気がないらしい。

夜我「・・・ま、言葉は——これに乗せて振るおうか」

シグナム「・・・良いだろう」

そして俺とシグナムは、刃を構え、動きを止める。

お互いを見合い、一定の距離と呼吸数。

どちらか一方が動く事、それすなわち敗北を意味する。

夜我・シグナム「——いざっ……!!」

そして同時に踏み込み、刃を振り下ろす。

シグナム「はああああ!!!!」

夜我「はあああ!!!!」

二人の刃がぶつかり合う。

夜我「せいっ！！！！」

俺は右から左に刀を振るう。

シグナム「はああ！！！！！」

シグナムはそれを刀のしのぎで受け流す。

シグナム「ふっ！！！」

シグナムは受け流され、体勢を崩した俺の首を落とすために上から勢い良く振り落とした。

夜我「おらっ！！！！！」

俺は全身をコマの様に回転させ、シグナムの刀を自らの刀で防ぐ。

夜我「うううう・・・」

シグナム「はあああああ!!!!」

だがシグナムは渾身の力を込めてそのまましたにあるビルの屋上に俺をたたき落とした。

夜我「ぐっ……くっそ」

俺は叩きつけられるが、両足に鶴から貰った飛翔のちからで勢い良く再び空に飛んだ。

夜我「はぁ、はぁ、はぁ……」

今で背骨が何本からやられたか……BJがあってもこうなるはな……

シグナム「いい腕だ。更にその太刀筋、中々どうして見事だ」

夜我「それはどうも」

余裕そうな事言っているのはむかつかない……

だが、俺は六課でシグナムと戦って・・・一度も勝った事がない。

どんな刀を使っても、どんな技を使っても、俺はシグナムに勝ったことはない。

それだけ、シグナムの腕は確かだ。

夜我「くそ……だけど……」

俺は再び刀を構えて、言う。

夜我「負けるかよ!!!!!!」

そう言って俺は刃に純白の光を纏わせ、両足には飛翔の加護を付け、勢い良くシグナムに切りかかった。

そして構えるは、拔刀術の構え。

シグナム「……良いだろう。ならば私も……」

そう言ってシグナムは自らの刀を鞘に納め、カートリッジを2発ロードして、構える。

夜我『
銀しろがね……!!!!』

シグナム『
紫電一閃……!!!!』

二つの斬撃は夜空でぶつかり合い、大きな爆発を起こした。

夜我「まだだ！」

そう言って俺は空に向かって急上昇し、全身に純白の光を纏わせ、シグナム目掛けて急降下した。

シグナム「なんて魔力量だ……」

シグナムは驚くが、即座に冷静に今の状況を理解し、戦術を練る。

夜我「喰らえ……」

俺は純白の光に包まれ、光はその姿をまるで鶴の様に変え、そのままシグナムの真上から襲いかかる。

夜我『
白鶴飛翔・白百合』

止めと言わんばかりに膨大な力でシグナムを襲う。

シグナム「――甘い！」

夜我「なっ！？」

だが、シグナムは俺の突進をひらりと避け、鶴の背に乗った。

シグナム「一直線過ぎる一撃。確かに当たれば強力な一撃だが、攻略するのは容易にできる」

夜我「な．．．．に．．．．」

シグナム「これで終わりだ」

そして俺は背後からシグナムの一閃によって、地上に落とされた。

シグナム「良い騎士だ。だが、まだ甘い」

そう言って仰向けに倒れる俺の胸に手を当て・・・

シグナム「お前のリンカーコアを貰う」

その言葉を最後に、俺は意識を失った。

その後、シグナム達は退散し、俺はアースラの病室に運ばれること

になつた。

変化してく状況

夜我 Side

医者「・・・」

戦いから数時間後、俺となのはは医療班のおじさんに検査を受けた。

医者「さすが若いね、もうリンカーコアの回復が始まっている」

なのは「あ、ありがとうございます」

医者「君は・・・まあまあだね」

夜我「10歳違うだけでこんな扱いですか（――；）」

医者「冗談だよ。君も回復が始まってる。ただ、しばらくはほとんど魔法が使えないから、気をつけるんだよ」

なのは・夜我「はい、ありがとうございます」

魔法が使えない・・・か。

確かに、刀をだす魔法陣を何度も出そうとしても現れないし・・・

無力な時間か・・・

その後、病室をでるとフェイト・クロノの2人が待っていた。

夜我「なのは、行ってやれ」

なのは「うん。ありがとう」

そう言ってなのははフェイトのもとに行く。

夜我「クロノ、ちょっと良いか？」

クロノ「ああ」

俺はクロノを連れてなのはとフェイトから離れた。

なのは Side

フェイト「なのは、具合はどうだ？」

なのは「うん。全然平気」

半年ぶりの、フェイトちゃんとの会話。

なのは「フェイトちゃん・・・」

フェイト「なのは・・・」

ほんとは色んなことを話したいのに、言葉が続かない。

なのは「あ・・・あの、ごめんね。せつかくの再会がこんなで・・・
怪我、大丈夫？」

フェイト「ううん。こんなの、全然。それより、なのはは？」

なんとか思いついた話題を出して会話を成り立てようとするけど、
どこかぎこちない。

なのは「私も平気。フェイトちゃんや夜我さん達のお陰だよ」

あの時は、ほんとに助かったって思う。

でも・・・私は足を引っ張った。

フェイト「・・・」

フェイトちゃんは私がまだ心配なのか、表情は暗い。

なのは「フェイトちゃん・・・あっ」

フェイト「なのは!？」

立ち上がりうとしてふらついた私を、フェイトちゃんが支えてくれた。

なのは「にやはは、ごめんね。まだちょっとふらふらみたい・・・」

安心させようと思ったんだけど、まだ起き上がるのは無理みたい。

フェイト「なのは・・・」

なのは「助けてくれてありがとう、フェイトちゃん。それから、また会えて凄く嬉しいよ」

私の言葉に、やっとフェイトちゃんが笑ってくれた。

その笑を見た私の頬も緩む。

フェイト「うん。私も、なのはに会えて嬉しい」

そのままフェイトちゃんは、私を抱きしめてくれた。

恥ずかしかったけど、私も抱きしめ返してあげた。

これからは、一緒だよって・・・

夜我 Side

クロノ「それで、話しは？」

夜我「・・・フェイトのことだ」

きつと朝我も気になるであろう情報。

フェイトが地球に戻ってきたってことは、無罪で済んだのだろう。

クロノ「これから会う人がある。その人に会って話しをしたらフェイトは普通の女の子として生活できる」

夜我「ほんとか!？」

クロノ「こんな時に冗談は言わないさ」

良かった・・・

あいつも、あいつ自身が行なった事が無駄じゃなかったって証明できた。

クロノ「きつと彼も喜ぶだろう」

夜我「・・・ああ」

クロノも分かっているのだろう。

クロノ「彼や君達の事情は分からない。何故ジュエルシード事件にあそこまでこだわる様にしていたかも、僕たちには理解出来ない。けれど今回の事件は……」

夜我「いや、今回の事件も手伝わせてくれ」

クロノ「……何故だ？」

俺はクロノの勘違いを直す。

夜我「まず一つ、勘違いしないで欲しいのは、俺たち別にジュエルシード事件そのものには一切用がなかった。用があったのは「フェイト・テストロッサ」ただ一人だ」

クロノ「更に分からないな。そもそも何故君たちはフェイトを知っていた？管理局でも知り得なかった情報を、何故君たちが持っていた？」

その質問に俺は少しだけ真実を教えた。

夜我「俺達は――ある運命を断ち切る為にいる。それは――
――『死』――と言う運命だ」

そう言って俺はクロノの前から去っていった。

クロノ「死・・・運命・・・か」

シグナム Side

シャル「はやてちゃん、お風呂の支度出来ましたよ」

はやて「うん、ありがとう」

シャル「ヴィータちゃんも、一緒に入っちゃいなさいね」

ヴィータ「はい」

エプロンを外しながらのシャルの言葉に、ヴィータも素直に頷く。

シグナム「明日は朝から病院です。あまり夜更かしされませんよう
をお願いします」

はやて「うん」

シャル「では、よいしょと。シグナムはお風呂どうします?」

足が不自由な主はやてを抱き抱えたシャルが私を誘ってくる。

シグナム「私は今夜はいい。明日の朝にする」

シャル「そう」

そう言うのとシャルはあっさり勧誘を諦めた。

はやて「ほんならお先に」

シグナム「はい」

主はやて達が去っていくと、ザフィーラが私に声をかけた。

ザフィーラ「今日の戦闘か」

シグナム「・・・その通りだ」

見抜かれ、嘘をつくのをやめた私は服の裾をめくる。

そこには斬撃の跡がはつきりと残っていた。

ザフィーラ「お前の鎧を打ち抜いたか」

シグナム「澄んだ太刀筋だった」

あの金髪の娘・・・あの歳でこの実力。

シグナム「武器の差がなければ、少々苦戦したかもしれない」

彼らは我がベルカのデバイスではないため、それが勝利の鍵となった。

ザフィーラ「だが、それでもお前は負けないだろう？」

裾を戻しながら呟く私に、ザフィーラが静かに問い掛ける。

シグナム「ふ・・・そうだな」

私は問い掛けに笑で返す。

シグナム「――だが」

ザフィーラ「？」

私は来ていた長袖の両腕の袖を肩まで捲った。

ザフィーラ「っ!？」

私の両腕には、竜巻の中に飲み込まれたかのように渦を巻くように
無数の斬撃が残ってる。

ザフィーラ「何があった？」

シグナム「純白の光を纏った、一人の剣士にやられた」

澄んだ純白の鶴が迫ったとき、確かに私は避けたはずだった。

だが両腕はこのざまだ。

シグナム「あの剣士。狙いは私ではなく、レヴァンティンだったの
だろう」

恐らくあの剣士は私の剣を狙って攻撃をしていた。

その結果、持っていた腕に斬撃が当たったと言うわけか。

ザフィーラ「だが、お前ともあろうものが、ここまで・・・」

シグナム「そこは私の気の緩みだ。だが・・・どちらも次に会うと
き、更に強くなっているだろう」

ザフィーラ「・・・」

シグナム「だが・・・ヴォルケンリッターの名にかけて、私達は負
けない」

再び決意を固めた。

——ピュンポュン!!」

シグナム「む・・・客か？」

ザフィーラ「この時間とは珍しい」

シグナム「そうだな。行ってくる」

そう言って聞こえたインターホンの主を確認する。

シグナム「どちら様だ？」

朝我「あ、俺は朝我零。八神はやてに会いに来ました。はやて・・・いるかな？」

この、一人の男の登場が、この先の未来を大きく変える。

隣にいる迷い（前書き）

前回までのあらすじ。

たった1行しか登場しなかった主人公の朝我君。

今回は登場することができるのか！？

隣にいる迷い

シグナム Side

シグナム「少し待ってろ」

朝我「はい・・・」

私は突然やってきた朝我と名乗る者を玄関に待たせ、風呂場にいる主はやてのもとに向かった。

シグナム「主はやて。お客様です」

風呂場の中から主はやての返事が聞こえる。

はやて「誰や？」

シグナム「相手は朝我零と言う男性です」

そう言う主はやての声が喜びに満ちた。

はやて「ほんまか!?! せやったら中で待ってて貰ってええか?」

シグナム「分かりました。では失礼します」

そう言って私は玄関に行き、彼を中に入れる。

ソファに座り、私と彼は対面になり、会話を始める。

シグナム「朝我・・・と言ったな。主はやてとはどのような関係で？」

朝我「はやてとは友人です。それで、今日から“お隣に引っ越して

きた”のでご挨拶に来ました」

丁寧な言葉使いで話すところを見ると、特に主はやてに危害を加えるような者ではないようだ。

床で狼になって座っているザフィーラも、それを理解しているようだ。

シグナム「そうでしたか。私はシグナム」

朝我「よろしくお願いします」

そう言って彼と握手をする。

主はやてに危害を加えるような者ではないと判明し、安堵する。

主はやてに仕える騎士として、どんな者でも油断は出来ない。

朝我「それでシグナムさん」

シグナム「シグナムでいい。何か？」

朝我「・・・シグナム。両腕・・・大丈夫ですか？」

シグナム・ザフィーラ「「!？」」

今・・・彼はなんと言った？

・
ザフィーラですら気づけなかった両腕の傷を気づいた・・・だと・・・

シグナム「お前・・・何者・・・」

朝我「あの、なんかありましたか？痛そうですけど・・・」

心配そうな表情で長袖で隠れている両腕を気にする。

シグナム「も、問題ない。しかし、よく気づいたな？」

朝我「すみません。観察力だけは良い方なので」

苦笑いしながら後頭部を照れるようにかいている。

シグナム「・・・そうか」

無理に質問することもせず、私はここで話題を変える。

シグナム「隣に引っ越してきた。と言う事は、ご家族と？」

朝我「え、ええ。母が一人と妹が一人で、3人家族です」

シグナム「そうですか。機会があったら、こちらも伺います」

朝我「はい。妹も喜ぶと思います。はやてと同年なので」

主はやてと同年・・・それは喜ばしいことだ。

主はやては両足が不自由なため、ご友人と呼べる方々が少ない。

この機会は、主はやてにとっても・・・

はやて「あ、朝我さん。いらっしやい！」

朝我「はやて、久しぶり」

主はやてがシャルに車椅子で押されながらやってきた。

シャル「あなたが朝我さん？」

朝我「あ、はい。朝我零です。よろしくお願いします」

シャル「こちらこそ！」

そう言ってシャルとも挨拶をする。

シャル《シグナム、ザフィーラ。彼はどうなの？》

念話で話しかけてくるシャル。

シグナム《問題ない。主はやてに危害を及ぼすような者ではない》

ザフィーラ《だがこの者の目は鋭い。用心しなければ、我らの秘密が知れる可能性がある》

シャル《そう・・・分かったわ》

そう言って私たちは念話を切った。

はやて「それで朝我さんはなんで家に来たん？」

朝我「今日から隣に引っ越してきたんだ。だから挨拶に来んだ」

はやて「ほんまか！？お隣さん！？」

朝我「ああ。よろしく」

はやて「うん！」

この時の主はやての笑は、私たちが今まで見てきた笑の中で、もつとも幸せそうな笑だった。

だが・・・この者、何者なんだ・・・

その後、主はやてが就寝した後、シャマルとヴィータも集め、話をする。

シグナム「あの朝我と言う者。やはり異質だ」

ザフィーラ「一般人・・・と呼ぶには相応しくない」

シャマル「そうなの？」

ヴィータ「悪い奴じゃないみたいだったぞ？はやてと仲良かったし」

シグナム「裏で主はやてを狙っている者と言う可能性も・・・・・・・・..
いや、考えすぎか」

管理局の人間が動き出している。

だからこそ、今まで以上に神経質になっているのかもしれない。

・・・だが、何故か彼を見て私は、懐かしかった。

久しい存在に感じた。

初めて出会った筈だが・・・

もしか、主はやての前の主の中にいたか・・・敵だったか・・・

・・・いや、深く考えすぎか。

ザフィーラ「いずれにせよ、注意すべき者がいるのであれば、十二分に注意をする必要があるだろう」

ヴィータ「・・・」

シャル「分かったわ」

シグナム「よし・・・それでは、行こう」

そう言って私達は、ジュエルシードを集めに向かう。

朝我 Side

話は俺、朝我零がはやての家に訪れる数時間前に遡る。

アリシア「到着！」

プレシア「無事、転送完了したみたいね」

朝我「・・・寒」

確か俺達がアルハザードに向かった時はまだ春だったぞ？

朝我「・・・時間軸が全然違うっていうのはこういうことか」

さて、あの時から何年経ってるんだ？

朝我「とにかく、アースラにでも向かうか・・・」

フェイト達のことも気になるしな・・・

プレシア「ちょっと待って」

朝我「え？」

プレシアは俺を呼び止める。

プレシア「少し・・・私に、時間をくれないかしら？」

朝我「時間？」

プレシア「今の私がフェイトの前に現れても、受け入れてもらえないかもしれない。そして、私自身もまだ、フェイトに会う権利が無い。だから・・・この地球で、フェイトの姿を遠くから見たいの」

朝我「・・・それは、フェイトとは会わないってことか？」

プレシア「いいえ。ただ、フェイトが然るべき歳になったら、ちゃんと話そうと思うの」

朝我「・・・」

・・・それも、無しではないか。

別に、急ぐ必要はないんだ。

急いで、仲を元に戻す必要はない。

時間はあるんだ。

プレシアが決断するまで、待ってればいい。

朝我「アリシアは、それでいいのか？」

アリシア「うん。会いたいけど、それは今じゃなくても大丈夫だから」

朝我「・・・そうか」

アリシアの笑を見て、ふと思った。

俺は・・・フェイトの笑顔を、見たことがない。

六課にいた頃のフェイトは、いつも笑顔だった。

けれどこの世界でのフェイトは・・・俺に笑を見せてない。

・・・今、フェイトは笑顔でいるだろうか？

朝我「――!?」

プレシア・アリシア「!?」

だが突如、世界が変化した。

朝我「これは・・・結界か!？」

プレシア「それも強力な結界。魔導士以外の侵入は出来ない構造になってるようね」

プレシアの話しがほんとなら、誰かが俺たちを狙っている可能性がある・・・

朝我「誰かが狙われるのか・・・（それに、懐かしい魔力を感じる・・・）」

プレシア「・・・この感じ」

プレシアも何かを感じ取った様だ。

朝我「俺は行ってくる。プレシアはアリシアの傍から離れないでここで待機しててくれ」

プレシア「・・・分かったわ」

朝我『
『瞬間魔力換装』
プリューゲル・ブリッツ
』

朝我「あれ・・・」

たどり着いた頃には、全てが終わっていた。

移動距離もそこそこあったとはいえ、ここまではやく決着が着いていたなんて・・・

朝我「・・・あ」

周りに散っている魔力を感じ、思った事がある。

朝我「夜我・・・なのは・・・それに、フェイト・・・」

あいつ・・・地球に来たのか・・・

・・・ちよつと待て。

朝我「・・・シグナム・・・ヴィータまで・・・」

何で・・・はやての傍にいつもいた騎士達がここに・・・

??? 「この戦いが全ての始まりやからな」

朝我「っ!？」

その時、俺は絶句した。

俺に話しかけてきた・・・懐かしい声。

背の低い、茶髪の女性。

朝我「……はやて……」

六課にいた頃の……死んだはずの、八神はやてだった。

はやて「おひさ〜」

朝我「『おひさ〜』じゃない。何がどうなってるんだ!？」

はやて「む……挨拶はしっかりせなあかんよ？」

朝我「おひさ〜のどこがしっかりとした挨拶だって？」

はやて「うっ……そ、それはあ……」

言い返せないだろうな。

朝我「まあそれは置いといて」

はやて「置いとくんかい!」

お、久しぶりにツツコミを入れられた。

朝我「……何が起ころうとしてるんだ？」

はやての登場は恐らくなのはとフェイトと同じだろう。

と言うことは……はやてに関係する何かが起こる。

はやて「……この時は、まだ私はシグナム達の苦勞を知らなかったんよ」

相良「え……」

シグナム達の……苦勞？

はやて「まず、今から起こるのは――闇の書を巡った事件」

朝我「闇の書？……どこかで聞いたような……」

はやて「朝我君はロストログア関係の捜査もやっとなからな。聞き覚えだけはあるやろ」

朝我「……あ」

思い出した。あの闇の書か……

朝我「いや、ちょっと待て。闇の書って無くなったはずじゃないの

か!？」

俺は確かに知っているけど、その時には既に封印されているとあった。

はやて「あゝあれなあゝほんまは私の夜天の書が元は闇の書なんよ」

朝我「へえ……え!？」

ということはこの人……

朝我「常時ロストログアと持ち歩いてると言うのか!？」

はやて「その言い方はちよおひっかかるけど、まあそんな感じや」

朝我「そうだったのか……で、その闇の書と今回の一件はどう繋がるんだ？」

はやて「簡単や。――事件の根源にして終焉やよ」

朝我「……」

はやての表情が、大きく変わった。

真面目な表情。

何か……深い想いを感じる。

はやて「多分ここであつた戦いでなのはちゃんと夜我君のリンカーコアが奪われたよ」

朝我「リンカーコアを？何故だ？」

はやて「それが闇の書いや・・・夜天の書の存在」

朝我「え？」

はやて「主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージとされているのに・・・何代目かの主が欲にかられて闇の書に変えてしまうたんだよ」

朝我「その結果が・・・これかよ」

誰かを傷つけていけないの存在出来ない本へと変わってしまったのか。

はやて「朝我君。お願いがあるんよ」

朝我「・・・なんだ？」

はやての願いなら・・・叶えてあげたい。

はやて「この先、なのはちゃんとフェイトちゃんはシグナム達と戦ってしまふ。せやか朝我君に・・・止めて貰いたいよ」

朝我「・・・分かった」

はやて「うん。朝我君になら、任せられそうやな」

朝我「え？」

はやてはそのまま消えた。

朝我「そんじゃ、はやての家にでも行くかな」

そう言ってはやての隣の家に住み、八神一家の皆と親戚になるのだ
った。

隣にいる迷い（後書き）

ここで追加情報。

朝我は『闇の書は完成してもしなくても主の未来が死』と言うことを知らない。

このままもし戦いを止める事が成功すれば、呪いではやては死を迎える。

この真実に触れるか触れないかで朝我がどちらの味方につくか変化する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9760x/>

魔法少女リリカルなのはA's ～全てを変えることが出来るなら～

2011年12月24日08時46分発行